魔法少女リリカルなのはStS　内部監査部の日常

なのは中毒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　内部監査部の日常

【Ｎコード】

Ｎ１５８５Ｔ

【作者名】

なのは中毒

【あらすじ】

管理局本局内部監査部の平凡な日常をたんたんと描いたものです。過度な期待はしないでください。後、画面から３０ｃｍは離れてみやがってください。なのはリレー小説企画第二段です。※妄音ルゥ⇒暇零⇒ムーギネーター⇒混沌の使者⇒ＴＲ⇒回覧板、という順番をループします（敬称略）。

第一話　その名は時空管理局本局内部監査部（前書き）

さて、始動しましたなのはリレー第二段。
一番手は私妄音ルゥでございます。
……設定のほぼすべてを回覧板さんより”押し付けられ”四苦八苦しつつも投稿を開始します。
募集要項には５０００字～と書かれていましたが時間がないので第一話に関しては半分以下ですがご容赦を
個人的なことですが学校が超忙しいんでｓｏｒｚ
では失礼

第一話　その名は時空管理局本局内部監査部

時空管理局設立以来最悪の事件と言われたＪＳ事件が終結してから半年が経過したとき
時空管理局上層部によって新設された部署が、ひっそりと存在していた。
部隊の名は「時空管理局本局内部監査部」
ＪＳ事件の時のようなことが起こらぬよう、法と秩序の守護者である時空管理局”自体”の「法」と「秩序」を保つための部署
それこそが「時空管理局本局内部監査部」であった。
これは、そんな正義の疑問に立ち向かった一つの部署の戦記である。

†　‡　†　‡　†

「皆さんおはようございます」
『おはようございます！』
時空管理局本局内部監査部の初日は、部長アンネ・ルミナリカの挨拶から始まった。
「本日より私たちはこの『時空管理局本局内部監査部』という部署で、法と秩序の守護者である時空管理局を時空管理局然とするために仲間を疑わねばなりません」
アンネは諭すように、だが悲しげに内部監査部について説明する。
「我々は少数先鋭……いえ、それすらも実際には知られるわけにはいきません。何故なら私たちが監査官であると知れれば取り繕うことができてしまうからです」
現在、内部監査部のオフィスには五人の人間しかいない。

それは他の局員が遅刻しているわけでもなければ五人だけで集まったのでもなく、内部監査部には五人しか所属者がいないのだ。
「私たち監査官は、これから査察官として働くことになるでしょう。それは管理局の”今”を見るための迷彩に過ぎません、皆さん己の正義を信じて、法と秩序の守護者を導くために尽力してください」
少数先鋭、そうアンネは言ったが実際はそれほど先鋭とはいえない魔導師ランクで言えばニアSランクなどいないしかといって天才と呼べるほどの才人がいるわけでもない。
そこそこ、まぁまぁ、普通、そんな言葉こそしっくりくるような先鋭
それこそが内部監査部であったのだ。
「それでは、頑張っていきましょうか？」
アンネの締めの一言で、時空管理局本局内部監査部は始まった。

「過去ログ見るとひでぇな、管理局ってやつはさ」
監査部用に用意された小さなオフィスで業務を始めた内部監査部そのなかで、戦闘要員筆頭となるカリス＝ラッドはそう呟いた。
「……なにがだ」
それに答えたのは同じく戦闘要員であるナオヤ・イグニスだ。
自分の資料を読みながら声だけでも返すのは律儀と言えるかもしれない。
「大きな事件で言えばＰＴ事件、闇の書事件、ＪＳ事件……諸々含めるなら何時だかの執務官罵倒騒動や撤退未完了でのアルカンシェルの使用等々、なかなか人命を無視してるな」
「９の為に１を斬った時もあったんだろう、だがそうでないこともある。それを断絶するために俺達が集まったんだろう」
「……違いねぇな」
過去の不正や無秩序な事件のログを見て、二人はそう監査部を捕らえた。

「そう言う交流なんかも必要だけど今は仕事をしてね？」
「あてっ」
「むぅ……」
そこに丸めた紙資料で軽く頭を小突き、注意を入れたのは監査部副部長のアンネ・フォークスだ。
……別に部長であるアンネ・ルミナリカとは血縁関係もなければ赤の他人である。
「つってもフォークス三佐、過去ログなんて永遠と見せ続けられたらこうなりますよ」
それにカリスは食い下がる、まぁ業務といわれたのが過去の不正ログを一から見ていく、何てことならば気も滅入るのだろうが。
「それでもやるのがお仕事です。それから私のことはアニーで構いませんよ、部長と被るでしょうし同じ部署でそれは堅苦しすぎるでしょう」
「……ならアニー、あれはいいのか？」
ナオヤが斜向かいの席に座ってウィンドウに向かうウルス＝クリッターを指して言う。
「ウルス君がどうかしましたか？彼は真面目に……」
「寝ているようだが、目を開けたまま」
……
「……いたっ！え？なに？どうしたの？」
「ウルス君？」
「え、あぁ、アンネさんどうしまし……た？」
「お仕事しなさ～い！」
「なんでばれたの！？」
アニーによる一撃を避けたウルスはオフィスを飛び出し、それを追ってアニーも出て行く。
「……いいの？あれ」
「構わんだろう」
「そうかねぇ……ありゃ？これは？」

アニーたちを見送った二人だったが、カリスが資料の中に何かを見つける。
「これは……不正？」
「どれだ？」
「これ、過去ログでも最近のやつ。半年前くらい？」
「『地上本部特別相談局筆頭が地上本部付特化警務重機動中隊カグヤ・ヴァルキューレス部隊長と交際』……？なんだこれは」
「詳細は……っと、何々？『特別相談局筆頭がカグヤ・ヴァルキューレス部隊長と交際を開始したらしい、きっと何か弱みを握って強要しているのだろう』……って憶測混じってるし僻みじゃねぇか」
「最悪だな」
「過去ログ整理してくれし……」
Ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ
そこに通信が入る
「はいよっと、カリス＝ラッド査察官であります」
『アンネ・フォークスです、実は……』
「え？はい……了解しました、すぐに向かいます。ナオヤ、初仕事だ」
通信越しに話を聞き、すべて終わったのか通信をきる。
そしてカリスはナオヤにそういった。
「なかなか早い初仕事だな」
「あぁ、なんでもここの設立前から探りを入れてたのが実ったらしい。現場は次元航行船ハンガーだそうだ」
「分った、すぐに向かおう」
二人が立ち上がり、オフィスを出る。
「さぁ、俺達の始まりだ！」

第一話　その名は時空管理局本局内部監査部（後書き）

次話からはきちんとした長さの物が読めると思いますのでご期待くださいw
俺の文章が下手だからって見捨てないでね！
他の人は上手いから！
では次は暇零さんです、よろしくお願いします。

第二話　捜査初日（前書き）

二番手暇零、行くであります。
ちょっと文章硬かったり描写がしつこいような気がするのもご愛嬌って事で、１つどうですかね？

第二話　捜査初日

次元航行船ハンガーと言っても、２人が向かっているのは一般に広く知られる格納庫的な施設ではない。どちらかと言えばドックに近く、ここで艦艇の建造から解体まで、工具で艦艇を弄るほぼ全ての作業が行われると言っても過言ではない。

「で、そのドックがどうしたんだ？」

通路を歩きながらカリスが問う。それにナオヤは書類を手渡して答えに代えた。

余談ではあるが、ナオヤの方がカリスより年上だ。それでも話す口調が常態なのは、年齢差を階級差で相殺しているからなのか。とにかく、ナオヤも細かい事は気にしていない様だ。

「ＤＤ級大型次元航行艦。排水量が７２，０００ｔにも達する、未だ試作段階の艦艇だ。現在の主力艦であるＸＶ級に対し、艦隊旗艦や特務隊運用艦としての運用が見込まれているらしい。ただ……」

そこで言葉を濁すナオヤ。彼の真意が理解出来ずにカリスは首を傾げるが、再び書類を捲った瞬間に事態を理解、己自身の目を疑った。

「主砲にリサイズしたアインヘリアルを3基、特装砲として新造のアルカンシェル。対空迎撃用のスフィアシューターは７５年度標準艦艇規格の約２．５倍強。……何だコレ、戦争でもする気かよ？」

何も言わずにただ黙々と進むナオヤの背に、何とか声を投げかける。この非常識なまでの重武装は、カリスには信じ難いものだった。

暫し立ち止まって考える。何故こんな物が設計開発されたのか、誰がこんな物を望んだのか。しかし、いくら考えても答えには辿り着けない。

「カカシの様に突っ立っている事を否定はしないがな、仕事中に相応しい行為ではないと思うぞ」

先に行くナオヤがカリスを呼ぶ。その一種機械的とも言える声は、

暗に法の番犬には感情など不要であると言っている様に聞こえ、思わずカリスは身震いするのだった。

「地上本部の方……ですか？」
「と言うよりは、単純に船が好きなので。面白い艦があると聞き、居ても立ってもいられなくなり、こうして上司権限を乱用してここに来ている訳です」
　巧妙に偽造されたＩＤは、現場の担当者を不審げな表情にはさせたものの、そのトリックが露見する事は無い。担当者が警戒したのも、陸の人間がドックに来たという事実についてのもので、別に彼等の正体についてはＩＤの情報をそのまま鵜呑みにしているようであった。それに対してナオヤは口からつらつらと嘘のオンパレードを並べて見せ、その場慣れした様子にカリスは心中で舌を巻くのだった。
「いやまぁ、確かにウチで造ってはいますけどね？　一応部外秘なんで、軽くチェック通してからお願いしますよ」
　そう言って担当者は、２人を通路のような場所に招く。あちこちの壁面にセンサーのような物が見える事から、恐らくはここを通過して初めて艦と対面出来るのだろう。
　僅かに躊躇するカリスに対し、ナオヤは臆する事無く通路を進む。そして何事も無かったように振り返り、視線でカリスを呼んだ。
「へいへい……と」
　半分諦めた様な声でそれに応え、カリスも通路を抜け、問題の艦があるであろうドックに足を踏み入れるのだった。

　異次元間を超えての移動は、物体に大きな負荷が加えられる。故にそれを主とする次元航行艦は、大抵が頑強な内骨格に各種機材を外付けし、その上から更に外骨格で包み込み、それに装甲等を取り

付けて完成する。
監査対象として挙げられたＤＤ級は、上から見れば逆Ｙ字形のフォルムをしており、速力と被弾回避を重点的に設計されたと見える。また、武装のほとんどは艦内に収納可能であり、被弾による破壊の防止や次元航行時の安全性の向上を狙っているらしい。
「しかしデカいな、こいつはよ……」
全長４１２．０ｍ、最大全幅１８５．３ｍの雄姿は、未だ装甲の取り付けが始まっていないながらもカリスを圧倒する。いや、むしろ機材等が露出しているだけ視覚的な情報量は膨大であり、むしろ今のこの状態の方が威圧的かも知れない。所々に１ｍ四方程度の箱の様な窪みがあるのは、そこに対空火器が設置されるからだろうか。しかしその造形美すら感じられる巨躯は、管理局の理想とは異なる、攻撃の意志を秘めている。
目を凝らして見れば、内装のあちこちも最新鋭のパーツを使っている。冷却装置やケーブル類の中に埋もれるようにして搭載された魔力炉は、通常艦艇のそれよりは拠点にエネルギーを供給する為の物に近い。という事は、兵装のみならず、推進機関やその他の艦内施設に関してもかなりの充実化が図られているのだろう。
しかし、ここまで凄まじい物を造っておきながらそれを安易にこうして他人に見せる辺りからは、造船部の人間が酷く杜撰であるか、もしくは彼等が法を一部知らないと見える。この様な連中に次元航行艦隊の船を造らせて良いのだろうか、ともすればテロリストと結託してこういった表に出ない艦を横流ししないだろうかといった疑問が、カリスの脳裏を過ぎる。
「おい、ナオヤ。何やってんだ？」
ふと振り向いて見れば、ナオヤは静かに目を閉じている。呼吸も深く、独特な波を持つものになっていた。それが１０秒程度続いたかと思うと、ナオヤは目を開いて顔を上げた。
「そろそろ時間だ、職場に戻らねば。このような貴重な光景を見せて頂き、ありがとうございました。我々はこれにて失礼します」

唐突に見学の終了を告げ、担当者に頭を下げるナオヤ。更にそこから本当に帰り道を歩き出してしまうのだから、カリスはそれに慌ててついて行く以外の選択肢を持たなかった。

「おい、ナオヤ！　いい加減スピード落とせって！」
監査部に戻る途中の廊下、ナオヤはほとんど競歩に近いスピードで歩いている。それを追い掛けるカリスの苦労は尋常な物では無く、そろそろ本格的に息が切れそうになっていた。
「……？　あぁ、済まない。つい業務を優先していた」
ナオヤはそれに気付いて謝るものの、あまり悪びれた様子は無い。立ち止まって携帯端末を広げ、何やら高速でタイピングを始めている。
「……何やってんだ？」
「枝（インターセプター）を張っておいた。それの機能テストだ。」
インターセプター、つまりは盗聴器や盗撮カメラの類いであり、捜査用の材料として一部の査察官の間に出回っている代物だ。勿論の事ながら法規制のスレスレを行く手段であり、かなりえげつない捜査方法と言える。少なくとも、ヴェロッサ・アコース査察官の用いる無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）の方が確実にスマートな方法に見えるだろう。
そんな手段をこうも平然と実行してみせ、しかも問われれば答える。同僚のかなりドライな一面に、カリスは驚かされるばかりだ。
「よし、確認完了。後はこの情報を俺のアーカイブでレジストして、査察のサーバーに滑らせれば一件落着だな」
端末をしまうと、残業上がりのサラリーマンよろしく伸びをして見せるナオヤ。しかし言っている事は半歩でも間違えればサイバーテロに等しく、カリスは思わず辺りを素早く見回す。こんな事を誰かに聞かれでもしたら間違い無く懲戒処分を喰らう羽目になるだろう。
「ナオヤ、頼むからそういうヤバい事を外で言うなよ。な？」

真顔で言われてしまえば、それを聞かない道理は無い。ナオヤは素直にその言葉に頷き、再び監査部への道を歩み始めるのだった。

「ただいま戻りましたよ……っと」

「2人共、お疲れ様です」

大きく肩を回しながら自分の席に戻るカリス。一応業務時間内な為、アンネが数秒だけ笑顔で迎えてくれた以外には皆作業に集中している。ただ1人、ウルスだけはたまにアニーに小突かれてははっとした様にディスプレイに向かい直すのだが。

「報告書はたぶん後で纏めてそっちに送ると思う。今はちょっと休ませてくれ」

そう言ってカリスは机に突っ伏す。対照的にナオヤは、自分のコンピュータに予備のディスプレイを接続し、通常業務以外にドックから送信され続ける情報をリアルタイムで調査していた。それだけ見れば良いのだが、彼は多少問題のある行動をしていた。

「ちょっと、イグニス准尉。オフィス内で煙草はNGですよ？」

アニーから軽く叱責が飛ぶ。ナオヤは煙草をくわえながら作業をしていた。火こそ着けていないものの、見た目や職場内風紀といった面ではあまり好ましいものではない。

「しかもソレ、さっき廊下で見つけた金髪ポニテの娘(こ)をシメて出させたヤツじゃんか」

カリスまでもがそれに反応する。監査部に帰る途中、未成年の女性局員が隠れて何かやっていた所を詰問した所、今ナオヤの手の中にある煙草が出て来たという寸法だ。ちなみに銘柄は『ＰＨＩＬＩＰ　ＭＯＲＲＩＳ　ＥＸＴＲＡ　ＬＩＧＨＴＳ』であり、わざわざ管理外世界である地球に出向いて購入しなければミッドチルダには存在しないようなものである。

「未成年の非行については訓戒はしておいた。次からは俺もガムにしておく」

呟くように言い、ナオヤは火の着けない煙草をそのまま携帯灰皿に放り込む。そして作業を再開し、先程よりも高速な操作で他の職員達を唖然とさせるのだった。

「お疲れ様、報告書は確かに受け取りました。今日は初めてだし、この辺りで切り上げましょう」

ナオヤとカリスが揃って報告書を提出し、他の皆も作業は大体切りの良い所で終わっている為に、監査部最初の１日は無事に終了した。

「じゃあ最後に、今日１日仕事をしてみての感想を訊いてもいいかしら？」

伸びをしたり、肩を叩いたりと各々の方法でリラックスしている皆に、アンネが問う。最初に視線を振り向けられたのは、ウルスだった。

「……眠い」

その言葉は、瞬時に他の全員によって黙殺される。しかしウルス自身は若干１５歳の身であり、普通であれば学校に行っているはずの所が管理局で働いている為、ある意味では仕方の無い事ではあるのだが。

「単調なデスクワークが非常に多くを占め、集中が途切れるとたちまち仕事にならなくなりますね。個人のそういった能力を見極め、効率的な振り分けを実施すれば、現在よりもストレス無く業務に臨めると思います」

優等生的な意見を述べるアニー。やはり副長という事もあってか、皆の身を気遣いながらもきちんと監査部その物について考えている。アンネは了解したという風に１つ頷くと、アニーの意見を手元のメモ帳に記録した。

「自分の足で捜査に出向くのは難しいな。やろうと思えば出来なくはないが、結局疲れたり時間が無かったりで限界が来そうだ」

カリスが言う。ナオヤと共に今日1日の半分近くを捜査活動に使っていた為に、その言葉は重い。さりとて今はこの方法の一択しか出来ず、改善は非常に難しいものだという事は、言ったカリス自身も良く分かっていた。

「ここのみならず、管理局データベースのほぼ全てに言える事だが、セキュリティが非常に甘い。作業の合間に試しに何度かアタックしてみたが、その全てが成功し、痕跡も残らない。近い内に強化しておく」

ナオヤは軽くキーボードを操作しながら言葉を放ち、最後にエンターキーを押す。すると皆の目の前にあるコンピュータのディスプレイに一斉にウィンドウが展開され、『お疲れ様でした』とメッセージが表示される。

全員の意見が出揃い、残るはアンネ1人となった。

「分かったわ、皆ありがとう。対応出来る問題はこちらで解決し、そうでない物は皆で考えていきましょう。私は今日のこの1日を、とても有意義な物だと理解しています」

では、と最後に起立をし、全員がそれに倣う。

「現時刻19：00をもって、本日の監査部の活動を終了とします。お疲れ様でした」

皆が一斉に敬礼で返し、それを直った時には部屋の中の緊張感は解けていた。

第二話　捜査初日（後書き）

次話はムーギネーター様が担当です。
頑張って下さい。

第三話　ウルス＝クリッターの憂鬱（前書き）

遅れて済みませんでした！

駄文ですが、宜しければ読んで下さい！

第三話　ウルス＝クリッターの憂鬱

2日目――――

「うーん……」

内部監査部の為に用意されたオフィスのデスクに頬杖を突きながら、ウルス＝クリッターは短く唸った。

その正面に鎮座しているのは起動中のパソコンのディスプレイ。そこに映る映像を暫くの間入念に確認してから、彼はポツリと呟いた。

「……疲れた」

疲労困憊と言った顔の彼の視界に存在するのは無数の写真――――無論その全てが局員。管理局が誇る精鋭魔導師である彼らの写真こそが、齢15の青年を苦しめている元凶であった。

「ん……」

目が疲れたのだろう、ウルスは一旦パソコンから顔を離して瞬きをした。そして暫くそれを繰り返すと、彼は再び目の前の強敵（しゃしん）に向き合った。

一体何故こんな事になったのか？　それは2時間前に遡る――――

～～～

「「「局員名簿の整理……？」」」

アニーの言葉に反応して、３人の監査部局員が一斉にハモった。

「ええ。先日のＪＳ事件の事後処理なんだけどね。アレの影響で、結構な数の人事異動があったでしょう？」

「そう言やそうですね。まあ事情はそれぞれみたいですけど」

腕を組んだままそう言うカリスの相槌に頷きつつ、アニーは続けた。

「それでこの機会にと言う事で、改めて各部隊に登録されている局員の確認をする事にしたの。今後の業務を行う上で、人事の把握をしておいた方が良いしね」

「成程な。なら早速取り掛かるとしよう」

そう言うと、ナオヤは受け取った資料と共にオフィス内の自分のデスクに向かい仕事に取り掛かり始めた。カリスもそれに続いて資料データの入ったＵＳＢメモリーを受け取ると若干身軽さを感じさせる動きで椅子に座り、パソコンを起動させた。

「はい、ウルスはコレを頼むわね」

「はい」

続いて資料を受け取ったウルスは、やはり少し離れた場所に配置された自分のデスクへと向かい作業を始めようとパソコンを起動させＵＳＢを挿入した。

だが、そこからが彼の予想の範疇を超えていた。

「え……？」

いざ仕事に取り掛かろうと意気込んで彼がモニターに目を向けた瞬間、そこに信じられない量の人物データが映った。どれ程なのかと言われて簡潔に答えるならば、フォルダを開くと同時に目が痛くなる量とでも言えば良いだろうか。

「？　どうしたのウルス？」

画面を見たまま硬直する彼を見て、アニーが怪訝な顔をして話し掛けて来た。

「い、いえ……何でも……」

「？　そう？　何か不備があったら言ってね」

まさか量の多さに怯んだなどと言える訳も無く、ウルスは首を軽く振ってアニーに答える。アニーはまだ得心が行かないと言った表情をしながらも、ウルスがそう言っている以上深く追及はせずに席に戻り仕事に取り掛かった。

コレで済めばまだ良かったのだろうが、ウルスの不幸は更に続く。

「はい。カリス＝ラッド査察か……はい？　了解、直ちに向かいます！」

「カリス、何かあったの？」

「ああ、今し方武装組織『デュミナス』が『キルガデパート』に人質を取って立て籠ったらしい。『緊急の事で応援を頼む』との事だ」

「了解したわ。ナオヤとカリスは直ちに応援に向かって。こちらは私とアニー、それとウルスでどうにかするから」

「了解！　行くぞナオヤ！」

「ああ！」

簡潔なやり取りと共にナオヤとカリスはアンネからの指示を受けて、あっと言う間に部屋を飛び出した。

そして。

「こんな時に……。ウルス君、アニー。厳しいと思うけど2人の分もお願い出来るかしら？」

アンネの口から放たれた言葉が、彼の心臓に強烈に響いた。

〜〜〜

（やった……後もう少しだ）

長く苦しい写真地獄の果てが見え掛けた事を彼は内心で喜んだ。
と同時に妙な達成感がウチから湧き上がって疲れが飛び掛け――――

「はい。こちらウルス＝クリッター査さ……武装集団が！？」

不意に起こった緊急事態（イレギュラー）に因ってその幻想を脆くも砕かれた。

「り、了解……直ちに向かいます……」

精神的な疲労から元気の無い声でそう応じると、ウルスは電話を切った。

「ウルス君、キツイなら無理をしない方が……」
「いえ、今の状況は説明がし辛いですし……それに身体を動かす方が合っていますから……」
「……分かったわ。でも、無理はしないでね」
「……了解です」

アンネの言葉にそう答えると、ウルスは現場へと急行した。

この時の彼は、知る由も無かった。
この事件が、彼の身に更なる憂鬱を振り掛ける事になると。
彼の長い１日は、始まったばかりだった。

第三話　ウルス＝クリッターの憂鬱（後書き）

混沌の使者さん、本当に済みません！

次をお願いします！

第四話　ウルスとザフィーラ、狼が通りますよ（前書き）

四番手、混沌の使者です。

頑張って書きました。

宜しければ見てやってください。

第四話　ウルスとザフィーラ、狼が通りますよ

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

本編に入る前に、ウルスについての備考を入れたいと思う。

ウルス＝クリッター。

彼は第５７管理内世界『ウルフウッド』と呼ばれる世界の出身で、この世界は狼と共生している世界なのだ。一重に狼といっても、色々な種類がいる。地球のニホンオオカミのようなのや、アルフのような狼など、とにかく沢山の種類の狼と人間が共存している。

この世界の他の特徴と言えば、平均身長が低いということである。実は成人男性でも、１４０ｃｍいくかいかないかなのだ。今のウルスの身長も１１０ｃｍ～１２０ｃｍ程度で、通常の１５歳にしては大分背が低い。

そんな世界で、彼は放任主義の親に育てられていた。ウルスは他の子供よりも、どちらかといえば言語を発さない狼と遊ぶことが多く、その事を親も特に何も言わなかった。そのためか彼は狼とのコミュニケーション能力は、相当高い。それがどんな種類にも関わらず。

そんなウルスが何故管理局にいるのか？　それは――

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

（社会勉強してこいって言われたんだよね……）

心の中で呟くウルス。

今は現場に向かう途中のヘリの中。ヘリにいるのは、ヘリパイロットとウルスだけだ。

なんとなく憂鬱なウルスはそのまま昔の事を思い出していく。
ウルスはそう親に言われて、管理局に入った。それが5年前である。入ったはいいが、ウルスはほとんどの時を狼と過ごしていたせいか、人間とは中々打ち解けず、訓練校にいながら、ほとんど1人で3年間ほど過ごした。成績は良くもなく悪くもなくといった感じで、強いて言うなら、魔力制御がうまかったぐらいである。他は基礎身体能力が高いぐらいだ。そんな感じの3年間であった。
だがウルスはそれにはもう耐えきれず、2年前の冬の雪の日にホームシックのようなものになり、どこに行っていいのかもわからず、ただただミッドチルダの街の徘徊を始めた。それも薄着で。最終的に動けなくなり、道路の隅の方で、震えながら座っていた。
寒くて、寂しくて、何だかもうどうでもよくて……このまま……。
そう思った――その時――

（あの人が話しかけてくれた）

それは――

『こんなところで何をしている？　速く立たないと食べちゃうぞ』
『……狼？』

狼のぬいぐるみを腕にはめて、動きをつけながら、ウルスに人形劇のような感じで話しかけてきた女性。その女性はまるで聖母のような、慈しみの笑顔を浮かべていた。だが、その時の記憶はそこまで。ウルスは限界に来たのか倒れてしまった。

そして次にウルスが目覚めたとき――まったくわからない場所にいた。とりあえず家なのはわかる。ウルスはふかふかのベッドに眠らされ、その部屋にはタンスや机があり、さらに音楽――クラシッ

クが流れていた。何の曲だろうか……ウルスにはわからなかった。

『目が覚めたのね』

そこに先程の聖母のような笑顔の女性が、ドアを開けて、部屋に入ってきた。

『あの……』

『無理しないで。そのままでいいわ』

ウルスはベッドから起き上がろうとしたが、聖母のような女性はそう言って、ウルスを制す。

『ここは……？』

『私の家よ』

何となく不安なウルスに女性は、落ち着かせるように頭を撫でる。

『熱はないみたい。今、暖かいもの持ってくるからね』

『はい……』

それから色々と話をした。女性と仲良くなったウルスは、これからの2年間ほど何度も女性の家に訪れた。ちなみにその女性は既婚者だったので、その夫とも仲が良い。本当の親より、親子っぽい関係になった。その女性と言うのが――

（アンネ・ルミナリカさん……）

時空管理局本局内部監査部、部長アンネ・ルミナリカだった。そんな縁もあり、ウルスはここ時空管理局本局内部監査部で働いてい

る。

（あの人がいたから、僕はここにいる。だから、疲れたなんて言ってられない）

「着きました」

「はい」

（頑張るんだ）

ウルスは現場近くに降りたヘリを降り、現場に向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ウルスは現場――ミッドチルダのとある場所に辿り着く。

「ウルス＝クリッター査察官です。状況は？」

「は！　……は……？」

そして後ろから局員に声をかけたら、振り向いた局員はキョロキョロと辺りを見だした。局員は〈気のせいか？〉と思い、再び視線を戻す。

「こっちだーー！！」

「へ？　えっ！？」

その大声に反応し、局員は振り向き下を向く。そして――

「小さ……！」

「ちっちゃくないよ！　他の人が大きいだけだよ！」

思わず漏れた声に、ウルスが大反論。しかし、事実的にはウルスは小さいです。

「こほん、とにかく状況は？」

「は！　只今、高層ビルにて、武装集団が人質を取り、立て籠っております」

「武装集団と人質の数は？」

「武装集団は１０人以上、人質は２０人以上はいるかと思われます」

ウルスはその報告を訊き、ふむと考える。ちなみに今は犯人と交渉中で、どっかの局員が時間稼ぎをしているようだ。

（よく訊くような状況だけど、その癖対処は面倒だなぁ……どうす……ん？　……あれ……って？）

ウルスは見る。目の前に見える青い毛並みの獣を。そして――

「オオカミィィ！！」

「ぬおっ！？」

突如抱きついて撫で始めた。その獣は驚きのあまり声をあげる。

「……喋った……？　すごい……すごい！　お前なんて言うの？」

ウルスは感動のあまり、もう周りは見えていないようだ。それもまあ仕方ないかもしれない。ウルスは、狼ともう5年間もまともに会っていない。正直会いたくて仕方なかったろう。

「とにかく離れろ……！」

「あ……ごめん」

ウルスは獣の一言に、少し我を取り戻し、一旦離れる。

「ザフィーラだ。今は事件に集中しろ」

「あ、うん。よろしくザフィーラ。ザフィーラも局員なの？」

「ああ」

ザフィーラと名乗った獣は、ウルスの質問に短く返す。ウルスは知らないようだが、ザフィーラといえば、かのＪＳ事件を解決に導いた古代遺物管理部、機動六課。その部隊長、八神はやての固有戦力の一人、青き獣、守護獣ザフィーラである。

「とにかくどうにかしなきゃ……狼……ザフィーラ……あ……！」

ウルスはザフィーラに触りたい衝動を押さえながら、必死に思考を巡らせ、ブツブツと何かを呟く。そして何かを思い付いたようだ。

「ザフィーラ、ちょっと」

ザフィーラはウルスに呼ばれ、近付く。ウルスは近付いてきたザフィーラに何かを耳打ちした。

〈そんなことが出来るのか？〉

〈わからない。でももしかしたら……〉

他の者に訊かれると駄目なのか、２人は念話で話す。どうやら、ウルスもあまり自信はないらしい。

〈まあいい。失敗だろうと、犯人を刺激することは、ないだろうか

らな〉
〈ありがとう。それじゃあ“来たら”頼むよ〉
〈ああ〉

ウルスはそう言葉を残し、その場を走って去っていった。残されたザフィーラは、局員にそのまま時間稼ぎを続けるように言い、時を待つことにした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふぅ」

ウルスはどこかの屋上に辿り着き、息を吐く。そこはどうやら、犯人達が立て籠っているビルの横にある同じ高さくらいのビルのようだ。

（このミッドチルダにいるかわからないけど……）

ウルスは心の中で呟き、息を整え、大きく吸い――

「ウオオォォォォォオオン！！」

狼の雄叫びのような声が、ミッドチルダの街に響き渡る。

（お願い、この声が聞こえるみんな！　力を貸して！　お願い！）

その想いに反応するように、地響きのようなものがミッドチルダに伝達する。遠くの方では、一般市民が慌て出していた。

そして、局員達もそれを視認して、慌て出す。

それは――大量の狼の群れ。アルフのような額に、宝石のような

ものがある種や毛が逆立ちハリネズミのようになっている種やら、どこに住んでいたのか、それらはウルスの呼び掛けに答え、現れたのだ。
だがその事を知らない局員達は、全員慌て出し、武装集団どころではなかった。
さらにそれは助長し、武装集団もそれに慌て出した。なんと狼達は、ビルにまで侵入してきたのだ。
あまりの不測の事態に慌てに慌てる。なんと言っても、人質が役に立たない。何故なら局員が慌てているところを見ると、人質で脅したところで、狼が止まるはずないからだ。
ビルに侵入した狼の群れは、武装集団を悉く撃破していく。慌てた武装集団の攻撃は、すべて単調なものとなり、狼は野生の勘で躱せた。

そんな状態で、武装集団のボスは――

「どうなっている!?」
「わ、わかりません!?」

状況がわからず、混乱していた。その間も下の階では、仲間がやられている声が、無線越しに聞こえている。
そしてこの階に上がってきている音を聴く。

「チッ、全員構えろぉ！　所詮は狼だ！　砲撃を放っちまえば倒せる！」

杖を構えて言うボスからの命令に、部下達――その場にいる４人も杖を構え、入り口に向ける。
ドアが破られた瞬間――

「撃てーーー！！」

その計5人から放たれた砲撃は、狼の群れに突き進みやっつけた――かに見えた。

「な――ッ！」

「テオアァァ！」

その砲撃は1匹の青い狼に魔法障壁によって受け止められ、更には、その青い狼が放ったと思われる白い魔力の軛は、人質を包み込みように覆った。

「しまった！？　やはり管理局の……！？」

「観念するのだな」

その青い狼はザフィーラ。ザフィーラは格好は狼だ。紛れてもまずバレない。もし管理局員が狼と共に来れば、報告されここに到着するまでに人質が、危険に晒される。だから局員には、あえて知らせず混乱してもらった。これが管理局の仕業ではないと、思わせるために。人質の安全が保証された今は、すでに狼はこちらを襲わないことを伝えて、武装集団の逮捕に向かわせている。

「チッ……！」

失敗と知ったボスは、急に走りだし、窓を突き破って、空に飛び出した。

「しまった……！　奴は空戦魔導師だったか」

ザフィーラは自分の失態に気付き、追うために自分も空に飛び出

す。そこに――

「ザ、ザフィーラ……」

何ともぎこちない飛行をするウルスがやって来た。あんまり慣れていないようだ。

「僕も行く。でも飛行魔法って苦手なんだ。お願い乗せて」

「……乗れ……」

ここで問答をしていては、取り逃がすと思い、ザフィーラは素直にウルスをその背に乗せ、ボスを追いかける。

「待てー！」

「チッ、これでもくらえ！」

ボスは3個の魔力弾を生成し、ウルスとザフィーラに向かって飛ばす。しかし、それはザフィーラに容易く防がれた。しかし、その後も魔力弾は近付く毎に放たれ、なかなか近づけない。

「ザフィーラ、僕が魔力弾で破壊するよ。その隙に」

「貴様が……？」

その言葉にザフィーラは、訝しげにウルスを見る。魔力弾を魔力弾で破壊するというのは、思った以上に難しいことだ。相手の魔力弾の種類も考えなければいけないし、尚且つ魔力弾を巧みに操れるだけの実力がなければ、そうそう出来ることではない。それをこんな子供がやろうというのだ。正直出来るのだろうかと疑ってしまうだろう。

「大丈夫。魔力制御には自信があるんだ」
「……わかった。任せよう」

一般局員用の杖型ストレージデバイスを構えて、自信満々に言うウルスに、最悪の場合、自分がフォローをすればいいと思い、任せることにした。

そしてそのやり取りで、2人は再びボスに近付く。ボスは近付けさせまいと魔力弾を今度は4つ放ってくる。それにウルスも4つの魔力弾を作り出し――

「やあ！」

敵の魔力弾めがけ飛ばす。その魔力弾は敵の魔力弾と同じ軌道を描き、相殺した。

（ほう……）

ザフィーラはそのことに素直に感心する。ウルスの魔力制御の実力はおそらく、なのはの幼少期と同等ぐらいかと推測した。多分ウルスはザフィーラに乗っていなかったら、空中では撃てなかっただろう。何故なら、空中に浮くことに集中しすぎて、魔力制御が覚束なくなるため。更には地上だとしても、動きながら操作して撃つというのはウルスにはおそらく難しい。格好の的になるだろう。言ってしまえば、ウルスはザフィーラがいて、初めて実力を発揮できるのかもしれない。

とにかくそれによりボスは、ウルス達の接近を許した。しかし――

「バカが！」
「「――ッ！」」

それは罠。すでに溜めていたのだろう。杖の先にはすでに一定量の魔力が、溜めこまれており、至近距離で砲撃が撃たれようとしていた。そして――それは放たれた。
爆音が鳴り、辺りに煙が立ち込める。ボスは〈やったか？〉と煙を凝視する。だがそれは間違い。ちょっとした愉悦感なのだろう。本来放った時点で逃げるべきだったのだ。何故なら――

「そん――ッ！」

ザフィーラが悠々とそこにいるのだから。至近距離の砲撃をガードしきる。流石は盾の守護獣というだけある。それに驚きつつもボスは更に気づく。

（あのガキは！？）

そうウルスがザフィーラに乗っていなかった。ザフィーラが無事なら、ウルスも無事である可能性が高い。ならばどこに？　その答えはすぐに出ることになった。

「はあ！！」
「な――ッ！」

上から響いた声に反応し、瞬時に振り向いたボスだったが、時すでに遅し。ウルスの持つ杖が顔面に直撃し、そのままどこかのビルの屋上に落ちた。煙が立ち込めるが、それも一瞬、すぐに煙は晴れ、中からは意識を失っている武装集団のボスがいた。
これにて事件が終了し、ウルスもザフィーラもノビているボスを連れて、現場に戻った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ありがとうみんな来てくれて！」

戻ったウルスは狼たちによしよしと抱きついて、撫でながら、労をねぎらう。更に怪我をしたらしい狼の手当てもして、最大限の感謝の言葉を贈り、狼たちと別れた。狼たちはなるべく人間のいない場所を通り、住まう場所へ帰って行った。

「狼と仲が良いのだな」
「うん。狼は僕の声を訊いてくれるから……」
「……そうか。今回は助かった」
「あ、うん。こちらこそ」

そう短く言葉を交わし、２人とも事後処理に移った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

夕方の日が沈みかけている時間。

（疲れたな……）

帰りのヘリの中、そう心の中で呟くウルス。

（よかったこともあったけど……やっぱり疲れた……あ、でもこれでアンネさんに褒められたらうれしいなぁ……なんて、そんなことないかな……あぁ、疲れた……）

ウルスはそのまま寝てしまった。この時、ウルスは気づいていなかった。自分が及ぼした事象を。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……ス」
「ん」
「…ルス！」
「んあ……」
「ウルス！」
「わぁ！？」

耳元で叫ばれた声に驚いて、ウルスは目を覚ます。
そこにいたのは、アンネ・フォークス。通称アニーであった。

「アニー……さん？」
「やっと起きた」

アニーは溜め息混じりにそう言い、ウルスを起こし立たせる。そしてヘリの中から出る。そこには部長のアンネ・ルミナリカもいた。

「お疲れ様、ウルス君」
「はい！」

アンネはウルスを労い、頭を撫でる。それにウルスは嬉しそうに返事をした。

「ウ・ル・ス」
「な、なんですか？」

そこで素敵な笑顔のアニーに呼び掛けられ、嫌な予感のするウルスは顔をひくつかせて訊く。

「狼による人的被害に食物被害。その他諸々。これはどういうことかな？」
「え、え～と……」
まあ狼が街を闊歩したというだけで、たとえ狼が直接的に手を出していなくても、何らかの被害は出るだろう。更にどうやら狼は食べ物を食い散らかしていったようで、店にも被害が出たようだ。
「アニー、その辺にしてあげて。ウルス君も疲れているだろうし」
「甘いです！　こういうことはきちんとさせなきゃいけません！　そういうわけで、反省文を１００枚ほど書きなさい」
「い、イヤだー！」
「待ちなさい！」
逃げようとしたウルスだったが、あっけなくアニーに捕まる。
「僕もう疲れたー！　寝るー！」
「さっきヘリの中で寝たでしょ！」
「足りないー！」
「ダメです！　カリスとナオヤと一緒に反省文を書きなさい！」
「カリスさんとナオヤさんも？」
「はい」
「そういうわけだウルス」
「……」
そこに急に現れたカリスとナオヤ。２人はウルスを両側からがっちりホールド。どうやらこの２人も何かをしでかしたらしい。
「うわあぁぁぁぁぁぁん！！」

ウルスはそのままカリスとナオヤに連行され、魔の反省文１００枚地獄に落ちるのだった。

第四話　ウルスとザフィーラ、狼が通りますよ（後書き）

お次はＴＲさん、お願いします！

頑張ってください！

第五話　新人は謎ばかり？（前書き）

ＴＲです。
今回も色々と壊していきたいと思います。

第五話　新人は謎ばかり？

時空管理局内部監査部に新たな1日が始まった。

「アンネ・ルミナリカ部隊長はいるか？」

突然入ってきた青年のその一言で。

「あらクロノ・ハラオウン提督。何のご用でしょうか？」

突然の来訪に、アンネは表情を変えずに用件を尋ねた。

「いや、少しばかりここで面倒を見てもらいたいのがいるんだ」

「それは隊員の配属と言う事ですか？」

アンネの直球の問いかけに、クロノは顔色一つ変えずにそうだと答えた。

「……皆さんはどうでしょう？」

「私は別にかまいませんよ」

「俺も同じく」

「俺もです」

「僕もです」

アンネの問いかけに隊員たちが快く答える。

「だそうです」

「分かりました。それじゃ……ミル」

外にいるであろう人物に声をかけると、新人が姿を現した。

「わぁ〜」
「こ、これは」
その人物を見た瞬間、アニーとナオヤが感嘆の声を上げた。
その人物はツインテールの金髪に、目元は少しばかりくっきりしてやや背が低い少女だった。
「ミル、挨拶を」
クロノが促すがミルと呼ばれた少女はアンネたちを警戒してかクロノの後ろに隠れていた。
「ミ、ミルドレッド……マイアル……です」
「はぁ……怯えてないでちゃんとしなさい」
そのミルの様子にアンネたちは茫然としており、クロノはため息をついていた。
「だ、だって、このおばさん。怖い」
ピキッ！
「「「ッ！！！！」」」
ミルのトンデモ発言に、一気に監査部内の温度が氷点下へと達した。
「ふ、ふふふ」
そしてその張本人のアンネは顔が笑っていない表情で笑っていた。

その手には監査部の資料（百科事典サイズ）があった。

「部、部隊長！！それはまずいです！！」

「お、落ち着いてください！！」

「少しは大人の余裕で許してやればいいのに」

「あぅあぅ……」

アンネを必死に止めるウルス達に、その光景を怯えた眼差しで見るミルという何ともカオスな空間が広がっていた。

★　★　★　★　★

それは二日前のこと。

『クロノ提督！！』

「どうした？慌てて」

きっかけは部下の一本の通信だった。

『はい、実はミッドの都市部から離れた場所で、大暴れしているものがいるので応援を要請したいとのことです』

それは一変変わらない応援要請だった。

「分かった、僕が出るとしよう」

『提督自らですか！？わ、分かりました。ではそう伝えておきます』

クロノの言葉に、局員は一瞬取り乱したが、何とかそう伝えると通

信を切った。
そしてクロノは出撃の準備をするのであった。

★★★★★★

「ぐぁ！？」
「がっ！」

現場に出たクロノが見たのは、まさに意味の分からないだった。
あるものは頭を抱えて倒れ、またあるものは自分の放った誘導弾を食らっていた。
他にもその誘導弾から必死に逃げていたりする者もいた。

（一体なんなんだ？これは）

クロノはそれを最初に見たときは、遊んでいるのかと思った。
だが、それは次の瞬間一変する。

「ほらほら！逮捕するんじゃないの！？拘束するんじゃないの！！
早くしてみなさいよ！！！」

クロノの視線の先にいたのは、青を基調にしたワンピースを着こんだ少女だった。
そしてその手には四角い箱のようなものがあり、それを何回も回転させていた。

「（一体なんなんだ？）そこまでだ！抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するのなら武装を解除しろ！」

クロノは自らのデバイスＳ２Ｕを少女に突き付ける。
クロノはたとえ相手が少女でも油断しない。
今までこの言葉だけで素直に従ったものはないにも等しい。
たいていが逃走するか攻撃を仕掛けるかだ。

（行動に移したら即座にバインドで拘束。これでいいだろう）

もしもの時の行動を考え、クロノはデバイスを持つ手の力を強めた。
あたりに緊張感が漂う。
誰もが少女の動向を伺う。
そして少女は突然動き始めた。
そして向かったのは、クロノの元だった。

「ッ！！！」

全員が一気に狙撃態勢に入る。
だが、少女の取った行動は、その場にいる誰もが想像できないものだった。

「――――さま」
「ん？」

少女が声を出すが、それは今までのような凛々しいものではなかった。
そう、言うなれば子供の感じが出ているもの。

「お父様！！」

そして少女はクロノに抱き着いた。

「……はい？」

その場にいたものが全員が固まった。
今少女は何て言った？
その場にいる隊員たちの混乱をよそに、少女はなおも甘えるようにクロノに抱き着く。

「お父様！お父様！お父様！！」

そして、嬉しそうに涙を流しながらだ。

「お、落ち着け。まず、僕は……君の父親ではない」

クロノは一瞬ためらったが、真実を告げることにした。
すると、少女は驚いた表情を浮かべると、そのまま涙ぐんだ。

「そ、それじゃあ、お父様は、どこぉ？」

「そ、それは……」

子供の涙に弱いクロノは、どう返したらいいものか悩む。
そしてすぐに思いついたことをいう事にした。

「そ、そうだ！それじゃ、僕たちが君のご両親を探してあげる」

「……本当？」

「も、もちろん」

クロノのその答えを聞いた少女は、先ほどまでの悲しげな表情はどこへやら、ぱっと笑顔に変わった。

「それじゃ、ちょっとお兄さんたちに付いて来てくれるかな？」
「うん！」
少女は笑顔で頷くと、クロノの手を握った。
「ところで、君の名前は？」
「ミル、ミルドレッド・マイアル！！」
屈託のない笑顔で名前を言うミル。
ちなみにこれを見ていた隊員たちは『さすがクロノ提督！！』と尊敬のまなざしで見ていたとか。
ちなみにクロノはその後が大変だった。
まず本局内に戻ったら、ミルが怯えだしてクロノの背後にぴったりとくっつき、さらにはクロノの義妹にその光景を見られ斬られそうになったり。
クロノの受難の二日だったとか。

★　★　★　★　★　★

「……まさかとは思いますけど、面倒になったから私たちの所に連れてきたという事ではないですよね？」
「な、何を言うか！彼女は戦力としてでも非常に優秀だ。お前たちの助けになるはずだ」
「でも、魔法資質はないんですよね？」
ジト目で見るアンネに、クロノは慌てて反論した。
「そこが不思議なんだ。彼女曰く、自分はマジックアイテムを使っ

て戦っていたにすぎないらしい」
「……ますます意味が分かりませんが。とりあえずは彼女の事はお任せください」
アンネはそう言ってクロノの要請を受けた。
こうして、彼女は内部監査部の所属となった。
「さて、まずは自己紹介からね」
そう切り出したのは、部隊長のアンネだった。
「私はここ監査部の部隊長、アンネ・ルミナリカです。よろしくね」
「同じく副隊長のアンネ・フォークスです。隊長とは血縁関係はないからね」
「俺はカリス・ラッドだ」
「そして俺はナオヤ・イグニス」
順調に自己紹介が進んで行っていくはずだった。
そう、最後の一人になるまでは。
「えっと、僕はウルス――お父様!!!!!――へ!?」
ミルが思いっきりウルスに抱き着いた。
そしてどこかで見たような光景が広がった。
「え?え!?」
混乱するウルスに、あまりの事で固まっている部隊員。
まだまだ監査部のトンデモな1日は始まったばかりである。

第五話　新人は謎ばかり？（後書き）

お次は、回覧板さんです。

よろしくお願いします！

第六話　パパと呼べ（前書き）

回覧板いきまーす。
遅くなって申し訳ないなぁ（∀、＊ゞ）テヘッ

第六話　パパと呼べ

「ウルスお父様、資料はまとめ終えたら持ってきてくださいね」
「……はい」

ルミナリカは慈愛に満ちた聖母のような微笑みをウルスに向けてから、自分の仕事に戻った。
そのウルスの隣には当然の如くミルドレッドが居座っている。
ミルドレッドはクロノ直々の訓練によって二等海士の位を持っているが、まだ正式に登録されていないので、現状は事務作業に専念してもらうことになった。
そこで先生役に大抜擢されたのは、もちろんミルドレッドの「お父様」だ。

「……お父様……ふっ」
「ナオヤさん！　笑ったら、くふっ、笑ったらいけません！」
「うわわぁぁ！！」
「お父様ぁ！？」

いろんな意味でウルスにとって精神衛生上よろしくない空間になってしまった内部監査部だが、この部署がこれだけふざけているのはある意味いいのかもしれない。

と、ルミナリカに一本の電話が入った。

「こちら管理局システム情報部部長アンネ・ルミナリカ一佐です」

偽物の固い肩書きをやんわりと言ってでた電話。
ルミナリカは、はい、ええ、と相づちを打ちながら、端から見て

話を流しているような返事をしている。
それが十分ほどして、ルミナリカは電話を切って、椅子にかけたコートを羽織った。
「少し用が出来ました。資料は纏めて私の机に置いておいてくださいね」
言うが早いか、ルミナリカは出て行ってしまった。急いでいる様子で、とても止める気になれなかったが、止めておいた方がよかったかもしれない。
何故ならこの場を収束しようとする人物がいなくなってしまうからだ。

「お父様、これはどうやればいいんでしょうか？」
「あ、えっとそれは……」
「お父様……くっ」
「わかりました♪　お父様、お茶入れてきますね♪」
「う、うん」
「……お父様」
「……ナオヤ准尉」
「なんだ、……お、と、う、さ、ま」
「うぉぉぉおおお！！」

だんっと力なく崩れ落ちる姿はさながら穴にはまったかのよう。
それにしてもナオヤは笑いのツボに入ったのか、先ほどからもごもごと口を動かしては含み笑いをしている。
そのたびにウルスの精神的なライフは０を下回っていくのだが、そんなこと気にしていられない。
ミルドレッドがお茶を入れて戻ってきたのだ。

「はい、お父様♪」
「あ、うん……」

差し出されたお茶を受け取り、舌を浸して温度を確かめる。
……まだ熱い。
ミルドレッドはニコッと笑い、今度はナオヤの方に行ってお茶を差し出す。
ナオヤは親指をグッと突き立てるようにして答える。
それに気分を良くしたミルドレッドは軽い足取りで最後の一人、フォークスにお茶を差し出した。
お茶を受け取ったフォークスはニコッと笑い、熱いままのお茶をすすっと啜る。

「うん、美味しい。ありがとね♪」
「はい♪」

またニコッと笑い、今度はお辞儀をしてから、最後の一人、カリスのところに向かう。
待ってましたとばかりにお茶を受け取ったカリスは豪快に飲んで、豪快にむせた。

「ごふぅ！！」
「っ！？　だ、大丈夫ですか！」
「げほ、げほ！　……大丈夫。美味しかったよ♪」
「ありがとうございます♪」

それからパタパタと犬のようにウルスのとこに戻ると、ニコニコと顔をこすりつける。

「な、なに！？」

「やりましたー♪　ご褒美ですー♪」

まるで本当の父親に甘えるかのように張り付くミルドレッドを強引に引き剥がすことができないウルスは、少しのけぞりながらもなされるがままにされる。

それは、かつて自分がルミナリカにされたように、甘やかすのではなく、けれど優しく包み込むように、相手を受け入れる。

やがて、すりつけてくる頬の感触がなくなり、ただぴたりと張り付くだけになる。

そして聞こえてくるのは、スースーという寝息だけだ。

「寝ちゃった……」

どうしたらいいかわからず、でも起こすのはまずいと思い動けない。

結果どうすることも出来ない。

「む……俺も出る」
「どうしたの？」
「不穏な空気がある」
「私も一緒に行こっか？」
「頼む。佐官がいて損はないから」
「ん♪　じゃあ行こっか♪」

そう言っていじっていたパソコンを、おそらく仕掛けた映像を見て何かを発見したのだろう、閉じて制服を羽織る。

仕事で外に出るときは必ず制服であることが義務付けられている。

そしてフォークスとナオヤが出て行った。

残ったのはカリスとウルス、ミルドレッドだけ。

「俺も出るか」
「え」
「その方がおもしろそうだしよ」
「そんなー！」
「じゃあな！」

上着をひっつかみ颯爽と出て行ったカリスなのだが、最後に一度ひょっこりと顔だけ戻して言う。

「寝てるからって変な気を起こすんじゃねぇぞ？」
「……変な気？」
「……言うまでもなかったか、忘れてくれ」

そうして扉が閉まると、ウルスとミルドレッドは二人っきりになった。
もちろんミルドレッドは寝たままなので場は静まっていて、外の喧騒がよく響いている。

そんなものが聞こえたってどうしようもない。
ウルスはどうすれば、どうすれば、と頭を悩ませながら、ちょっとだけ気分が良くなっていた。
自分がされて嬉しかったことが出来ているんだから嬉しくもなるのだ。

「それにしても良く寝るなー。なんだか見てるこっちも眠くなってきたよ……おやすみー……」

それからはスースーが二重奏になって静寂の部屋に響いていた。

＊　＊　＊　＊　＊

なんとなく部屋を抜け出したカリスは、ずんずんと大股になって歩いていた。
なんだか妙にムカついてきたのだ。
それもあり、喉も渇いたのでジュースでも飲もうかと思って食堂まで足を運んだのだ。
ジュースを買って、人がいっぱいいる中でも人が密集していない場所を陣取りコップに口をつける。
今日はなんとなくコーラというものを頼んだ。このしゅわしゅわとした気泡をカリスは堪らなく好んでいるのだ。

「あー、うめー」

声に出すとまた格別に美味しい。
まったりと寛ぎながらちょっとだけ今の仕事について考える。

カリス・ラッドは元来とても正義感が強くて、自分で何でも解決出きると思っていた。
考えたらまず行動し、全力を尽くす。仲間は彼を熱血漢とまで呼んだ。
しかし、決して良い意味などではない。仲間はそう呼んで彼に仕事を押し付けたのだ。
カリスはもちろん反抗するが多勢に無勢、さらにもとから人助けが好きなので、押し負けて引き受けてしまう。
そんなことが何回か続いて、カリスは一度だけミスをしてしまう。
そのミスの全てを仲間はあろうことかカリスに押し付けたのだ。

彼は絶望し、人を頼ることも頼まれることも止めた。
うんざりだった、例えどれだけ頑張っても人は上辺しか見ていない。他人は利用するためにしかないのだ。
だから自分で何でもこなして、こなせる自分に酔いしれて、下ろせぬ重荷を背負い続けて、やがて重荷に身を潰された。
知っていた、一人ではなにも出来ないことくらい、ちょっと冷静になれば簡単に分かった。でも理解だけはどうしても出来なかったのだ。
それでも、歩みだけは止めなかった。歩みはそのまま正義だったから、正義がなくなれば自分は……カリス・ラッドという一個人は一般大衆へと成り下がる気がしたから。
そして、泥をかぶって前に進んだ。泥をかけられ前に進んだ。泥が積もって前に進んだ。泥を払えず前に進んだ。泥が固まり前に進んだ。泥が普通になって、――――前に進めなくなった。
正義が、信じていたものが、偽善にしか見えなくなってしまった。
目に映る全てが敵に見えた。
そんな時、カリスはルミナリカに出会って、ここに勧誘された。

コーラを飲み干す。しゅわしゅわが喉を滑り落ちて胃を刺激する。
周りにはまだ人がいるが、カリスを気にとめるやつはいない。
――――普通の反応だ、おかしいことは何もない。

「カリス君」

呼ばれて顔を上げる。
そこにいたのはやはりルミナリカだった。

「そう呼ばれんのは嫌だって言いましたか、ルミナリカ一佐」

「ふふ♪　だってあなた今物凄く話しかけづらい雰囲気出してたもの」
「素だ」
「ふふ、嘘ね」
この人にはかなわない。
「ルミナリカ一佐に声をかけられた時のことを思い出していたんだ」
「忘れられないわよ、あれは」
「すいませんでした」
「良いのよ。一回で諦めるなら私はあなたのところへいかなかったんだから」
思い出す。
内部監査部に誘われた時のことを。

「誰が入るかよ」
それがカリスの答えだった。
ルミナリカは特に驚いた表情を見せることもなく、そうとだけ言って笑った。
カリスは今でもその笑顔を忘れない。裏切られて負の感情がこめられても良いはずなのに、ルミナリカの笑顔には負の感情は欠片も感じられず、ただただ優しさに満ち溢れた笑顔だったのだ。
翌日、カリスのもとにまたルミナリカが来た。そして言う。
「一緒に来ませんか？」
「……はぁ？」

勧誘だった。
昨日断られたのにまた勧誘にきたのだ。
カリスは必要とされてると思うのと同時に、捨て駒にされるのではと恐怖した。
だから、答えは決まっている。

「誰が入るかよ」
「あら、残念。また来るわね♪」

翌日もまたルミナリカはカリスのところへ来た。そして何度も断られた。けれどずっと、一日と欠かさずルミナリカはやってくる。
正直うざかった。
カリスはいつしか何と言って追い払おうか考えるようになり、日に日に追い返す言葉は語気を荒げた。

そして、絶対に見放してくれないことの辛さを知った。

「どうして、来るんだよ」
「さぁ、あなたの力を借りたいからかもしれないし、あなた個人に思い入れがあるのかもしれないわよ？」
「……」
「黙っててはわかりませんよ。私はあなたじゃありませんから」

そうだ、自分のことは自分しか話せない、けれど、この人を失望させたくないというのもまたある。
だから、カリスは喉まででかかった言葉をグッと飲み込んで、頭から下りてきた言葉を言う。

「俺、前科持ちだぜ？　あんたの部署に泥を塗るだけだ」

「そうみたいね、一つや二つじゃないのも知ってるわ。悪い子ね」
最後の言葉はカリスの心に重たく響いた。
できることなら違うと叫びたかったが、それは誰かの迷惑になる。
それは嫌だった。
ルミナリカは歯を食いしばって耐えるカリスを見て、慈愛に満ちた笑みを見せた。

「ほんと、悪い子ね。それで、入る気にはなったかしら？」
「……何言ってやがる」
「私の部隊に入りませんか、って言ったのよ♪」
「訳わかんねぇよ。言っただろうが、俺が入っても損にしかならねぇって。それでも俺を入れようとすんのか？」
「そうよ？　それが悪いかしら？」

カリスは生まれて初めて、言葉を失うという経験をした。

「私はあなたが悪い子って知ってるわ。あなたが人に罪をなすりつけられない悪い子とも知ってる。だから私はあなたを勧誘するのよ。悪いことを分からせてあげるために」
「やめろよ。そんな偽善は迷惑だ」
「ふふ♪　いいじゃない、偽善でも。行われない善や、うまく隠された悪よりも数倍良いわ。だから私と一緒にやりましょう、偽善をね♪」

カリスは思う。今日は初めてのことばかりだ。
雷に打たれたような感覚なんて滅多に体験できるものじゃない。

「……やってやる。部署の名前は？」
「管理局本局内部監査部へ、ようこそ♪」

席を立ち、コーラをもう一本用意してから部屋に向かう。

「どこ行ってたんだ？」

「ん～、ちょっとした用事かな～」

にこにことした笑顔でかわされるとカリスにせめる余地はなく、ルミナリカの言葉遣いに対する苛立ちのみが残る。

でも、特に気にするようなことじゃない。

部屋に戻ると、ルミナリカはさっさと机に戻り作業を開始する。

といっても、今日はもう仕事を終えてあがる時間なので、各自は自由に帰ることが出来る。

当然寝てたってその権利はあるので、ウルスとミルドレッドの二人にだって権利はある。

カリスはゆっくりと寝ている二人に近づき、冷えたコーラをウルスとミルドレッドにそれぞれ押し付けてから手前の机に置く。

冷たさに驚いて目を見開く二人。

カリスはその二人に対してどうどうと言ってやったのだ。

「パパと呼べ」

内部監査部に轟雷の如き動揺が響き渡ったという。

第六話　パパと呼べ（後書き）

次はまたまた妄音ルゥさんになりますよー。
頑張ってくださいね♪

第七話　「自己主張はそれなりに大切だ、行き過ぎなければだがな」（前書き）

はい、お待たせしました妄音ルゥでございます。
このリレーも二週目に入り、そろそろ物語りも動き始めそうです。
まぁ今回は前回の様に複数の事件を盛り込ませることはできそうにないですが。
長さ的に
はてさて、今回もなかなかタイトなスケジューリングの中何とか書き上げてきましたよw
そしていつも通り他の方々に比べると短めです。
まぁ中身もないに等しいんですがw
それでも次の方への繋ぎと思って呼んでくだされば と思います
それでは！

第七話　「自己主張はそれなりに大切だ、行き過ぎなければだがな」

「パパ、どうすればいいの？」
「それを考えるのも仕事のうちだぞ、ミル」

先日のカリスの爆弾発言から早一週間、なんとなくカリスが『パパ』と呼ばれていることに違和感がなくなってきたいた。
「でもでも！わかんないんだもん！パパ教えて！」
「あはは……カリスさ――パパだ――……パパ、そんなに睨まないでください」
どうにも『パパ』が気に入ったのかカリスはネタや冗談ではなく年少二人にそう呼ばせ続けるらしかった。
……なかなかチャレンジャーであるとしか言えないが
そもそも１５歳であるはずのミルがあれほど幼児的なのもあれなのだが
それは久しい愛情（？）に触れての一時的な幼児退行現象だと納得せざる終えない。
とはいえこの状況もどうかと思うが
「そもそも書類の整理くらいは普通にできてもらえなけりゃ困るんだよ、こっちも何かと忙しいしな」
カリスは自分のデスクでディスプレイに向かいながらそう答える。
厳しいのだか優しいのだか分らないその姿にオフィスにいた面々は苦笑していたがそれすらもカリスは気にしていないようだった。
……それはそれで、なかなかすごいことのような気もするのだが
「まぁまぁ、そう厳しくせずに気長にやりましょう？実戦では嫌というほど活躍してもらうんですから事務仕事くらいは優しく教えてあげましょう？ね、カリス」
カリスのなかなかに鋭い一言にアニーはそう言ってミルに事務仕事を教え始める。

ミルは、初めは戸惑ったようだがすぐに話を聞きちゃんと覚えて見せた
天才とはどこにでもいるようである。
「飴と鞭を配分しないと碌なことにならないぞ？アニー」
「飴が多くても、鞭が多くても上手くいきはしませんよ、要はバランスですから」
「……とりあえず、何でもいいからお前ら仕事をしてくれ」
ナオヤのそんな呟きが聞こえたのは、そのときだった。

†

なんだかんだといっても、所詮は皆人間なのである。
いきなり何を、と思うかも知れないがそれを今、俺は痛感している。
「だから、僕は僕が思うようにやったんです！それのどこがいけないって言うんですか！？」
「だから、お前のやりたいようにやるだけじゃいけないから俺は注意してるんだろうが！」
まぁ、端的に言えば
今、カリスとウルスが喧嘩している。

事の発端は各予算案に不備がないか確認していたウルスと
それを手伝っていたカリスの言い合いが始まりだった。
曰く、予算配分に偏りがあるとウルスが
曰く、それがどうしたとカリスが言ったのだ。
要は見識の違い、それだけである。
ウルスが不服に思ったのは、管理外世界への割り振り金の安さ。
それが気に入らないから会計部に問い合わせようとしたらしい。

そして、カリスがそれを止めた。
それは自分達の管轄の話ではないと、ついでに言えば通年と変わらぬ金額だから問い合わせたところで変わらないだろうと。
ウルスは、管理内世界出身とはいえ自然が多数残り野生が世界の大半を占める半分観測世界のような場所で生まれたことで管理外世界への関心が強いことが原因だろう。
カリスはミッドチルダ出身の、完全な都会っ子だ。
見識の違いは否が負うにも生まれるのだろう。
そして、それが衝突したのだ。
喧嘩はヒートアップし、既に武力交渉が行われてもおかしくない空気が漂っていた。
「パパ……いや、カリスさん。これだけは譲れません！」
「勇ましすぎるな、だから子供だと言われるんだ。それにな、俺達の仕事はそんなことじゃないって散々説明しただろう」
「カリスさん……！」
「ウルス……！」
「はいはい、そこまでね」
「「でも！」」
「そこまで、ね……？」
「「……はい」」
どこまでも続く言い合いを、なにやらよく分らない凄みでアニーが止め
二人を紙面書類で叩く。
微笑ましい光景だがウルスとカリスの間の闘争は今だ終わりを見せてはいないようだ。
「ウルス、次だ」
「……はい」
不躾に書類を渡し、すぐにそっぽを向く様は正しく子供といえるだろう。
だが、非常に面倒なことにカリスの親心（？）はそれすら見逃さ

なかった。
「ウルス、仕事は仕事だ。どんな事情があろうとキチンとこなせ」
「……カリスさん、僕はキチンと仕事をしています、そもそもカリスさんが突っかかってこなければこうやって止まる事もないんです」
……
一瞬の沈黙、視界の隅に書類を丸めたアニーが見えたのはきっと気のせいだと思いたいが
「「やるか！？」」
「やるな！」
スパーン、と勢い良く振り抜かれたアニーの書類は二人の頭にクリーンヒットし、これでもかと言うくらい気持ちのいい音を発した。
「二人とも！お仕事しなさい！喧嘩なら後でいくらでもしていいから！」
……いいのか？
「「でも！！」」
「でもじゃない！」
それから、いつ終わるのかさっぱり分らないアニーの説教がオフィス内では始まった。
部隊長はニコニコとそれを見ているだけでどうにも止める気はないようだった。
だから……
だから一言言ってもいいよな？
「だからお前ら、仕事をしてくれ……」
俺の呟きは、アニーの説教に混ざって虚空に消えた。

†

さて、大そう長ったらしく続いた説教も終わり

時間は既に勤務終了時間へと相成っていた。
先の説教で未だにギクシャクとするウルスとカリスであったが、流石と言うべきかなんだかんだ仕事自体はこなして見せ
なんとか本日分の業務を終了することができたのであった。
「さて、では今日の業務を終了しましょうか？」
定時五分前、部隊長のその一言で俺達の仕事はいつも通り終了した。
いつもならこのまま帰って趣味に勤しむところではあるのだが……
「カリス、今日この後暇か？」
俺はこう、声をかけていた。
「あ？あぁ、暇っちゃ暇だが……どうした？」
業務終了後滅多に声をかけない俺からの誘いとあって、多少警戒した（なかなかに失礼だ）声音で尋ねてくる。
「なに、大したことじゃない。久しぶりに共に食事でもどおかと思っただけだ、年少二人も連れてどうだ？」
「あぁ……そうだな、たまにはいいか。ウルス、ミル、飯食いにいくぞ」
「うん！」
「僕は……」
カリスが年少に声をかけると、ミルは嬉々として近づいてきたがウルスは先ほどのことがあるからか芳しくない表情をしている。
「アニー、お前もどうだ？ミルの歓迎会とでも洒落込もうと思うのだが」
「え？……あぁ、そう言う……えぇ、参加させてもらうわ。部隊長もどうですか？」
「あらあら、それなら行きましょうかねぇ」
俺が声をかけると、アニーはなんとなく意味が分ったのか気を利かせて部隊長にも声をかけてくれた。
こういうところがアニーの美点の一つだと俺は思う。
「それでウルス、お前はどうだ？」

「え……行きます」
頭の良い奴だ、気を使われたのを分ったのか
多少いやな顔をしたもののすぐに了承した。
「んじゃどこへ行く？」
「ミル、あなたの好きな食べ物ってなに？」
「ん～……ハンバーグ？」
「それなら陸に上手い店を知ってるぞ」

それからはとんとん拍子に話は決まり、ミルの歓迎会（兼カリスとウルスの仲直り会）は開催へと相成ったのだった。

第七話　「自己主張はそれなりに大切だ、行き過ぎなければだがな」（後書き）

二週目二番手は変わらず暇零さん！
よろしくおねがいします！

第八話　パパがいれば当然ママもいる（前書き）

相変わらずの暇零です。
遅くなっちゃった気がしますが、その分楽しんでもらえたらなぁと叶わぬ願いを口にしてみます。

第八話　パパがいれば当然ママもいる

結局の所、外食というのは兎にも角にも懐具合がモノを言う。ナオヤはそれを熟知している為に、まずは財布の中身を確かめる。
「先に外で待っていてくれ、すぐに後から行く」
一瞬だけ硬直し、顔をしかめると、他の皆に先に行くように伝えるナオヤ。それを受けてまずカリスが、続いてミル、ウルス、アンネと出て行き、最後に僅かな時間差でアニーが続こうとする。それを、ナオヤは視線で止めた。
何？　と問うように首を傾げるアニー。他の全員がエレベーターに乗ったのを確認すると、ナオヤは静かに部屋の扉を閉める。
「……何がしたいの？」
今、この室内にいるのはナオヤとアニーのみ。隣近所の部署は今日は非番であり、周囲に人はいない。さすがにアニーも少し不安になったのか、声色に焦りの色が滲んでいる。しかしナオヤの方は、何をするでもなく、ただ口を噤んだまま、言うべき言葉を探すように視線を動かす。
「何か、言いたいの？」
少しだけ、自らの言葉に『圧』をかけ、ナオヤに送る。当然その量の圧では本来ならばナオヤに有効なはずも無い。しかしナオヤはそれを話の切っ掛けとして利用し、ようやっと口を開いた。
「ミルドレッドの事だ。遺伝子情報等も含め、集められる全ての条件からサーチをかけてみたが、未だに彼女の出自が分からない」
つまり、ミルの故郷が既に存在しないか、彼女自身がヒトならざる者である可能性が高くなりつつあると、言外に告げている。聡明なアニーがそれに気付かないはずもなかった。
「でも、あくまで可能性の問題でしょう？　答えが見つかるまではカリスやウルスが上手くやってくれるわよ」
しかし、アニーは笑って答える。人員の内に悩み事を持つ者があ

れば、それを和らげてやるのも副長としての仕事の1つだ。そしてナオヤも、それに釣られたように少し笑顔を見せた。
「あぁ、そうだな。あいつ等も何だかんだ言って、本当の家族のようになってきている」
そう言って、少し目を細めてカリスのデスクに目を向けるナオヤ。その視線には、嬉しさ以外にも、その奥に何か別の感情があるように、アニーの目には写った。しかし、それも一瞬だけ。ナオヤは、これで話は終わりだと言うように、部屋の扉を開ける。アニーはそれに従い、素直に部屋を後にした。
「……ありがとう、アニー」
扉の向こうで呟かれた、ナオヤの感謝の言葉を耳にする事無く。

＊　＊　＊　＊　＊

彼戦況極めて不利なり、しかし救援など望めどそれは来るはずも無く。
つまり、どういう事かと言うと。
「パパ、次はこれが食べたい！」
「お、いいんじゃないか？　会計はナオヤが持ってやるって言ってたしな」
今、ナオヤは、人生始めての本格的な財布の危機に直面していた。
「久し振りに羽根を広げられるわ。ナオヤ、ありがとう」
にこやかにほぼ死刑宣告じみたような言葉をかけるアンネ。きちんとテーブルナプキンを首から下げて、フォーク1本のみで器用かつ美しくヴォンゴレ・ヴェルデのスパゲッティ――正確には、麺の太さが1．6mm程度であるので、『スパゲッティーニ』と定義されるものだ――を食する姿は、流石は部隊長と言った所か。
しかし、このテーブルの上では控えめに見えるそれとて、ナオヤ

の普段食べているカップ麺や立ち食い蕎麦の軽く7倍を上回る値段だ。そして、他に目を向けて見れば。
「もっきゅもっきゅもっきゅ」
「あ、このサーロイン美味しそう。ミディアムレアで頂こうかしら？」
ひたすらに照り焼きハンバーグを食べる作業に没頭するウルスと、メニューに載っている写真を見て目を輝かせるアニー。２００ｇともなれば軽々と１０００ｋｃａｌ．に到達してしまうような超高カロリー食品である肉の塊なはずだが、彼女は全く気にしようとしない。
ここまで来てしまえば、いくらナオヤと言えどもヤケになってしまう。注文を知らせるボタンを押し、そしてそれは正常に機能して店員をナオヤ達の着くテーブルに呼び出した。
「ドネル・ケバブ、お願いします」
その単語が、テーブルを囲むメンバーに新たな戦争をもたらす事に、ナオヤは気付かなかった。
「ほぉう……ケバブか。勿論、ナオヤはチリソースだよな？」
「何を戯けた事を言っているの、カリス？　ケバブと言えばヨーグルトソース、これ常識です」
チリソースとは、赤唐辛子の辛味が効いた辛さの中に甘味と酸味のあるトマトソースの事であり、それに対するヨーグルトソースは、裏にコショウ等の香辛料を含ませており、独特のコクを持ちながらスパイシーな感触を楽しむ事の出来るソースである。そして、どのような料理でも味付け等の方法で好みがはっきりと分かれるように、このケバブのソースでも、カリスとアニーの間には絶対的とも言える意見の差異があった。しかも、お互いに一歩の妥協も許さず、時にこうして周りを巻き込んでしまうのだから、この部署の中では恐らく最も始末に終えない問題でもあった。
「あの、何でそこまで意見が……」
「私、バーベキューソースがいいな」

年少2人の意見は、カリスとアニーの放つ殺気によって霧散される。確かに、ウルスの言う通り、お互いにもう大人なのだから、相手の趣味を認めてやった上で自分の趣味を貫き通せば良いのだろうが、残念ながらこの2人にはそのような選択肢は眼中に無いようだ。
「じゃあ、部隊長に訊いてみましょうよ。ヨーグルトとチリ、どっちがいいんですかっ！？」
そして、今回はアンネに飛び火した。
「え、えぇ？　私は、ヨーグルトソー……」
「ほら！　やっぱりケバブにはヨーグルトソースなんですよっ！！」
完全に開ききったような瞳孔のまま問われてしまえば、それに逆らうワケにも行くまい。部隊長と言う最強とも言える味方を取り込み、情勢は一気にアニーの方に傾いた。しかし、カリスも負けてはいない。
「ぐぅっ……ウルス！　確かお前、辛い物好きだよな！？」
「う、うん。そうだけど……」
子供の素直な意見という奴を味方に付けたいのだろうか、然してカリスのその企みは成功と相成った。これで2対2、アニーの持つ数的有利も、実質的有利も、呆気無く崩れ去る。
そこに、ようやくと言うべきか、論争の的であるケバブが運ばれてきた。いや、実際にはかなり早い段階で運ばれてはいたのだが、争いを続ける2人の剣幕に怯えた店員が、今の今までテーブルに品を置けずにいたのだ。
「さぁ、ナオヤ！　このチリソースを使うんだ！！」
「違うわ、このヨーグルトソースこそケバブに相応しい！！」
瞬く間にソースの入ったチューブをナオヤに押し付けるようにして差し出す2人。ナオヤはそれを無視して少しの間考え込んでいたが、頭に血が上ってしまった2人は、ぐりぐりとチューブをナオヤの頬にめり込ませてまで自身の主張を強烈に押し付けんとする。
そして、それが数分続いたかと思えば。
「いい加減にしないか、2人共。俺は肉が喰いたいんだ、まずはそ

の素材本来の持つ味を堪能したいんだ。誰かの主張に応じて自らの好みを変えるだと？　ふざけるな、そんな物は好みでも何でもない、流行の奴隷に過ぎない。とにかく、俺は俺の喰いたいように喰う、それだけだ。ついでにカリス、あまり辛い物ばかり食していると香辛料に含まれている成分に体を蝕まれるぞ。実際に唐辛子と発癌性の関連性が存在する事は少し前から指摘されている。そしてアニー、瞳孔を全開にしたり、テーブルを叩いたりするのは淑女の取るべき行動では無い。謹んでくれ」

ナオヤは、静かにキレた。流れるようなノンストップの言葉は何の感情も含んでおらず、それが却って2人の感じる恐怖を増大させていた。瞳に光は無く、無機的な、ただの音声読み上げソフトのような感触。

そして、ナオヤの目に光が戻り、ケバブが口に運ばれる。ゆっくりと肉を噛み締め、その味を確かめるように目を閉じる。そして肉を飲み込み、次に目を開いた時、ナオヤが手にしたのは。

『何でええええーーーーーーッッッ！？！？！？！？』

焼肉のタレだった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

何だかんだで深夜と夜の合間辺りで馬鹿騒ぎじみたミルの歓迎会は終了となる。

街はそろそろ眠りに就く頃であり、ここがミッドチルダ首都である事を一瞬とは言え忘れてしまう程に明かりも乏しい。そして、眠りに就くべき年齢の者達もまた、思い瞼をこすりながら家路に着く。

「眠いならおぶってやるぞ？」

カリスの言葉にこくりと頷き、素直にその背にしがみつくウルス。しかし、それを良しとしない者がいるのもまた、事実の1つであっ

た。
「……パパ、私も」
ミルもまだ子供の内だ。しかし言ってしまえば、カリスもまだ齢18の身ではあるのだが。
とにかく、彼女もまた眠気を訴え、背負ってほしいらしかった。しかしカリスが持ちあわせている背は1人分だけであり、それ以上の搭載能力は存在しない。
「ナオヤは……ルミナリカさんと一緒か。アニー、済まないがミルを頼めるか？」
アニーはその言語に頷き、優しくミルを抱え上げる。ミルは余程今まで眠ってしまいたいのを堪えていたのだろう、アニーの背に着くのとほとんど同時に完全に寝入ってしまった。
こうして見れば、至って普通の少女に過ぎない。しかし、クロノやナオヤから聞いた事を考えてみると、少し複雑な感情がアニーの胸を塞ぐ。しかしそれも、次の瞬間には吹き飛んでしまう。
「カリスパパ……ウルスお父様……アニーママ……」
本人としてはただの寝言なのだろう、悪気もないのだろう。しかし、その言語が周囲に与える破壊力は、絶大なものがあった。
「俺がパパで、アニーがママで……」
そこまで言って、顔を赤らめるカリス。それは、アニーも同じ事だった。
内部監査部、明日からもまた、色々大変な事が起きそうである。

第八話　パパがいれば当然ママもいる（後書き）

次回、ムーギネーター様がまた何かやってくれると信じています。

第九話　「どっちが強い？」（前書き）

遅れて済みません！

ネタが思いつきませんでした……

第九話　「どっちが強い？」

ミルドレッドの歓迎会の翌日――――

「用意は良いか、ウルス」

「勿論万全です。そっちはどうですか、パパ」

「俺も問題無い」

人気の無いビルが立ち並ぶ寂しい街（ゴーストタウン）を模した訓練用スペースの中央に佇む2人が、互いに確認の言葉を投げ掛け返事を受け取る。

その目付きは一言で言うなら真剣。獲物を捉える猛獣の如きそれは、それに力が宿っている様な錯覚さえ感じさせた。

何故2人がこんな風に向かい合っているのか？　それはこの日の朝にこんな事があったからである――――

～～～

を向いていた。一体どんな質問なのか。彼が『娘』の問いを待っていると――――

「ウルスお父様とパパって、戦ったらどっちが強いの？」

「え！？」

唐突に単純な質問が為された。あまりに単純な内容のせいだろうか、書類の山の向こうのカリスの顔が少々間抜けな物になっていたのはココだけの秘密である。

「そ……そうだな。最近はあんまり身体を動かしてないけど、俺の方が強いんじゃないか？」

カリスの魔導師ランクはＡ－、一方のウルスはＢ。単純に考えればカリスが『自分の方が上』と言うのは無理も無い事であろう。

だが、そんな風に言われて暗にカリスより弱いと言われたウルスが納得するハズも無い。

「待って下さい、パパ。状況次第なら僕の方が強いですよ」

むっとした口調でそう言うと同時、席を立って書類の山を迂回してカリスに詰め寄った。無論この流れは予想済みだったのだろう、カリスは特に慌てるでもなく切り返した。

「いや、俺の方が強い」

「僕です」

「いや、俺だ」

「僕ですって！」

しかしその返しが火に油なのは明白で、当然ウルスとカリスは上のやり取りを繰り返し始めた。流石にそれはマズイ、と言うアンネの判断で2人の口喧嘩は強制的に中断させられて現在に至ると言う訳である。

〜〜〜

「ぐ……ッ！」

己の得物である杖とカリスの爪が激しくぶつかると同時、耳障りな音が鼓膜に響く。合わせて伝わる重量と衝撃に顔を顰めながらもウルスは目一杯力を込めてカリスを弾き飛ばした。

「やるじゃないかウルス！　ココまでとは思わなかった！」
「パパこそ！　『最近身体が鈍（なま）っている』って言ってた割には凄くキレがありますね！」

頭髪や頬を汗で湿らせながら、2人は顔を近付け嬉しそうに話す。しかしまるでスポーツで対戦している時の様なその台詞とは裏腹に、その心中では互いに『負けられない』と言う感情が炎の激流の如く唸りを上げていた。

「せあッ！！！」
「くッ！」

裂帛の気合と共に、ウルスはカリスの爪と鬩ぎ合っている杖を振るう。全力を込めて振るわれたそれはカリスの予想以上に力が籠っており、ウルスの目論見通りカリスの身体は後方へと弾き飛ばされた。

「シュート！」

好機とばかりに、ウルスが牙を放つ。魔力制御に長けるウルスの放つそれはまるで獲物を追う蛇の如くうねりながらカリスにその軌道を読ませない様にして彼へと迫る。

「同じ手をッ！」

だがカリスとて伊達に局員として生活して来た訳ではない。己に迫り来るそれらをかわし、時には互いに衝突して相殺する様に仕向ける事でやり過ごす。そして自身の得物――――展開している間は己と一体化している鋭く赤い爪を思い切り振り被り。

“同時に、腹に響く強烈な衝撃を感じた”

「グッ……。お前、狙ってたのか……」

「パパのフットワークじゃ、普通に撃った弾は回避されるだけですからね。フィールドを使わせて貰いました」

腹に留まる痛みを堪えながら問うカリスに対し、ウルスは爽やかな笑顔でそう返す。カリスはそれに対し笑みを口元に浮かべながら俺も、まだまだだな……と呟きながら倒れた。

と。

「お父様凄い！」

「わっ！？　ミル！？」

疲れと勝利を実感していた彼に、ミルドレッドが抱き付いた。その表情は歓喜に満ちており、それを見ていると疲れが吹き飛ぶ様な錯覚さえ感じられた。

「カリス、惜しかったわね」

「ああ……くっそ、こりゃ鍛え直しだな……」

アニーに手を貸して貰いながらふらふらと立つと、カリスはそう

言った。

そして。

「ウルス！　機会があったらまた戦(や)るぞ！」

背を向けながらウルスにそう告げて立ち去った。ウルスはそれに対して元気な声で返事を返しつつ、再戦も勝つ！　と心中で闘志を燃やしていた。

第九話　「どっちが強い？」（後書き）

混沌の使者さん、遅れて済みません！

次をお願いします！

第十話　ママとして（前書き）

どうも、2回目の登場。
混沌の使者です。

ふむぅ……若干微妙な出来になっちゃったんですが、宜しかったらご覧ください。

第十話　ママとして

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

はてさて、朝から始まった“どっちのパパが強いか決定戦”のようなものが、訓練用スペースで行われている中、私は2人でそれを見守っていた。

「ねぇママ、ウルスお父様とパパ、怪我しないよね？」
「ん？　うん、大丈夫よ。決定打を一発当てたら、勝つ勝負だから大きな怪我はしないわよ」

それはミルドレッド・マイアルことミルちゃんと私――アンネ・フォークス、通称アニーである。
ミルちゃんはあの外食から、私のことを“ママ”と呼んでいた。あれはただの寝言のはずだったが、恐らく夢で見たなんかしらの内容を覚えてて、現実世界にも反映したのだろう。
そんな私は、ママと呼ばれることに、嬉しさ半分、戸惑い半分のような感情を宿していた。
私も女の子だ。というより、女性だ。結婚願望はあるし、子供の頃は“お嫁さんになりたい”なんてことを口にしたこともある。
だが、こうして22歳という歳になって、それは絵空事のように思えていた。
若い頃の私は、自分の才能の無駄使いというのか、なんというのか、それを大いに悩んだものだ。
私には、リンカーコアがあるので、魔法が使える。更に稀少技能『魔力変換資質《圧》』というものが使える。ここでの細かい能力説明は省くが、ここまでだと私は、優秀の部類に入ると予測される

だろう。
しかし、1つ決定的なものがなかった。それは“術式適正”がなかったことだ。
いくら魔力があっても、ミッドチルダ式もベルカ式も使えなければ、結局は無用の長物、宝の持ち腐れだ。
これを知った最初の頃は、落ち込んだものである。
しかし、それは最初だけだ。
元々、すぐに諦めるなんて性格ではなく、やれることはやるという結構アグレッシブな性格だったので、どうにか魔法が使えなくても、魔法のようなものが使えないか模索したところそれを見つけた。
ここでは省くが、自分で言うのもなんだけど、それは並大抵の努力ではなかった。
それからは、色々と資格をとったりと階級を上げたりと色々忙しかった。
そんな私の男性関係だが……付き合ったことがない……なんてことはなく、一応あるにはある。
しかし、それは数ヵ月しか保ったことはない。
まあ、私の性格上、どうしても仕事優先になってしまい、中々うまくいかなかったのだろう。いや、それほど熱中するような人がいなかったと言った方がいいのか。
ともかく、大した男性経験はないのだ。
それはいつしか私に、“お前はお嫁さんなんか向いてない”、“結婚なんて出来るはずがない”なんて、幻想を生み始めていた。
最初は否定したりもした。
しかし、この頃――内部監査部に入ってからは、若干受け入れつつあった。
それはすぐ近くに、母親の規範たるような女性――アンネ・ルミナリカがいたからだ。
その優しく包んでくれるような暖かい雰囲気を持った女性を見ると、どうしても自分と比較して見てしまい、自分は母親なんて向い

てないなぁ、なんて思うことしばしば。
自分はすぐに怒ってしまい、部隊長のように優しく諭すなんて出来ない。
恐らくはああいう女性を“母性溢れる”なんて言うんだろうなぁ、そんな風にも思う。
でもそんな部隊長がいながら、この子――ミルちゃんは私に“ママ”と言った。
嬉しかった。でも同時に不思議だった。なんで部隊長じゃなくて私なのか……。
こんなすぐ怒るし、部隊長ほどの落ち着きはないし……母性なんて一欠片もない……はずなのに。
それなのにこの子は、ママと呼んでくれる。
理由を訊こうか、なんて思うが、少し怖くて出来ない。
私にも母親みたいな要素があるのかな、とか思っているのに、もし訊いて「なんとなく」とか「理由なんてない」なんて一言で答えられたらと思うと、少し躊躇われる。
ああ、別に誰でもよかったんだ……、なんて思えてしまう。
そう思うと、私の中にある嬉しさがなくなってしまう感じがする。それが怖い……。
でも、そうなると、もう半分の戸惑いが消えない。これを引き摺ればモヤモヤして、仕事が手につかないかもしれない。
ならば、訊いた方がいい……でも訊けない。
私はそんな無限に続くループにはまっていた。
と、そんなことを考えていたら、いつの間にか2人の試合はもうすぐ終わりを迎えていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そして2人の試合が終わると、私とミルちゃんは2人の父を迎えに行った。

結果はウルスの勝利という少し驚きの展開だった。

私ははしゃいでウルスに抱きつくミルちゃんを見遣り、カリスに近づく。

「カリス、惜しかったわね」

そう言って手を差し出すと、カリスは私の手を取って、立ち上がり様に――

「ああ……くっそ、こりゃ鍛え直しだな……」

そうごちた。

ふらふらした足取りのカリスを支える。

言ってしまえば今、私は一夫多妻ならぬ一妻多夫の状況なんだなぁ、と思うと、自然と顔が赤くなる。大した男性経験もないのに、いきなり2人の夫の妻になっているとか、想像すると恥ずかしい。

まあでもカリスは齢（よわい）18で、4歳も年下だ。少々、攻撃的な性格も相俟って、まだまだやんちゃな子供なイメージ。

ウルスに関しては、7歳も年下だ。そういう……その……恋……愛対し……とかには見れない……。

私がそんなことを思っていると、カリスが何事かをウルスに叫んでいた。

それで私の意識も現実世界に戻る。

どうやら、再戦の約束だったようだ。

カリスはそう言いながら、いつの間にか歩き出していて、すでに背を向けて歩き去っていた。

何でそんなに闘うのが、好きなのかしら、と心中思いながら、少し興奮気味のミルちゃんを宥めて、ウルスとミルちゃんと私は、訓練用スペースを出る。
そこで私は、クルッと反転し、ウルスとミルちゃんを見据える。
それに2人が、不思議そうに首を傾げた。

「私は今日は別の方に用事があるから、ここでお別れよ」
「ママ……どこか行っちゃうの？」

ミルちゃんは私を悲しみを孕んだ潤んだ瞳で、見てきた。
それに私は心を揺さぶられる。
生きてきた中でこんな瞳で、見られたことがあっただろうか？
いや、ない。
この子の事を愛おしく感じる。しかし、これは母としての感情なんだろうか……それとも、それとは別の……優越感のようなものなんだろうか……？
もし、そうなら嫌な女だな、と少し胸がズキッと痛んだ。

「大丈夫よ。そんなに遅くならないから」

でも、それを顔に出すわけにはいかず、微笑みながら、ミルちゃんの頭を撫でる。
すると、横にいるウルスから――

「……アニーさんが優しいとか違和感しかないなぁ……」

そんな小さな呟きが聞こえた。
私は笑顔のままウルスを見る。
そしたら、ウルスがひきつった顔をした。
ふふっ、そんな顔してももう遅いわよ。

「ウルス」
「は、はい！」
私が呼ぶとウルスが、しゃきんと背筋を伸ばした。
「私が帰ってきたら、やってもらいたい仕事が、“たくさん”ありますから……覚悟してなさい」
「ご、ごめんなさい～！」
私は泣きながら謝ってくるウルスを一瞥して、そのまま歩き去った。
まったく失礼しちゃうわ。確かに貴方達にキツく当たってるかもだけど、優しくない訳じゃないんだから！
でも、皆からは私がキツい女って見られてるのかしら……それは少し嫌ね……。
もう少し優しく接した方が良いのかしら？　でも、どうしたらいいの……？
ハァ……部隊長みたいには、私は出来そうにないわね……。
そう悲観に暮れながら、私は本局の無機質な廊下を目的地に向かって歩いた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ハァ……」
本日何度目か知れないため息が漏れる。
私は目の前に行き交う人や、並べられたささやかな料理を見なが

ら、部屋の隅っこで、壁に寄りかかっていた。
今、私は執務官が集まる会合のようなものに出席している。
これは言ってしまえば、執務官同士の情報交換会みたいなものだ。
まあ、参加は自由で、来たかったらといった感じのもの。
事実、来ているのは、大体が早く事件を終わらせなければという正義感溢れた者達で、手柄は自分の物だっという者達は、基本来ない。まあ、時折、ナンパ目的で来るような輩がいるのだが。しかも大した情報は持っていない。
それはさておき、私は執務官というわけではないのだけど、執務官資格は持っているので、一応出席くらいは出来る。
これは大体半年に一度くらいの頻度であるみたいだが、私は一度も出席したことはない。
まあ、執務官ではないし、顔馴染みがそんなにいるわけではないため、行く必要がなかっただけなのだけど。
そんな私が何故、今日こうしてここに来ているかというと、ミルちゃんについて、何か情報がないかと思ったからだ。
あんまり考えたくないけれど、色々とサーチをかけても引っ掛からない所を見ると、どこか事件めいたものを感じる。
そういうのは、執務官で調べている人は、たくさんいる。
中には何年も同じ事件を追ってる人もいる。
その中に何か有力な情報がないか、と色々話を訊き回ったのだが、特にこれといったものはなかった。

「ハァ……」

またため息が漏れる。
いや、別に残念というわけではないのだ。
ミルちゃんがそういう何かの事件に関与していないならいないで、それは良かった……、と思う。
ただ、やはりここまで出向いて、なんの収穫もないと、それはそ

れで徒労に終わったな……、となんとなくため息が漏れてしまうのだ。

「あの……もしかして、アニーさん？」

「えっ？」

と言って、顔を上げると、目の前には綺麗な金髪のロングを揺らした、この人が通れば１００人中１００人が振り返るだろう美女がいた。

それは――

「フェイト執務官……？」

「お久し振りですねアニーさん。それと私はフェイトでいいですよ？　お仕事中じゃないですし」

「そ、そうね。久しぶり、フェイト」

フェイト・Ｔ・ハラオウン。執務官の中でも、この歳でトップクラスの実力を誇り、醸し出す雰囲気は、まだ多少幼いながらも、ベテランの領域に達している。

その上、この美貌だ。

男は放っておかないだろう。事実、何回も告白されて、困っているというのを前に聞かされたこともある。

そんなフェイトは私の隣の壁に背を向け、寄り掛かる。

「何だか珍しいわね。フェイトがこういうのに出てるなんて」

フェイトはこういうのに出るのは、苦手な方だと思っていたので、そう訊いてみた。

「ああ、えっと、その……あはは……」

するとフェイトは少し困ったように、頬を掻いて苦笑した。
それで理解した。恐らくフェイトは半ば強引に、出席させられたのだろう。
また誰かに求婚でもされたのかしら……、と考える。

「貴女も大変ね」
「えと……はい……」

そう言って縮こまる、フェイト。
こうして見ると、やっぱりまだどこか少女っぽい一面があるなぁ、と思う。
でも……これでも、先の大事件の時は、前線で戦って、主犯格を捕まえたっていうんだから驚きだ。
今のこの少女を見る限りでは、とてもそんな風には見えない。
私とフェイトが出会ったのは、執務官資格を取る際で、ちょうど同じ時期に、試験などで一緒になってる内に、意気投合して話すようになった。
その時は、本当にまだまだ少女――しかし、内に秘めた確固たる意思は、相当だな……、と感じた。
今では、少女っぽいところはあっても、大人の女性といった雰囲気の方が強い。
それに何処と無く部隊長に似ている感じがする。
そういえば――

「フェイトは甥と姪がいるのよね」
「え？　あ、はい……」

藪から棒に呟いた言葉に、フェイトは反応し、戸惑いながらも頷く。

「その甥と姪は、フェイトになついてるの？」

少し変な質問だけど、フェイトはそれを聞くとう～ん、と考える素振りをする。

「うん。なつかれてると思います。寄ってきてくれますし」

「そう……」

「どうかしたんですか？」

「あ、いや、その……」

理由を訊かれても話すわけにもいかないしなぁ、と戸惑う。

でも……。

「仮に……仮によ。もし、突然、女の子がやってきて、一緒に過ごしてる内に、ママって言われるようになって……でも、ママって言われた女性は、全然優しくなくて、寧ろ怒ったりするの。それに、近くには優しくて母性溢れる女性がいる。それでも母性の欠片もないような女性に、女の子はママって言うのよ。どうしてだと思う？」

と、そこまで訊いて、思わずハッと声を上げる。

って、私……年下の女性になに訊いてるのよ……、と少し自己嫌悪に陥った。

でも、フェイトは真剣な表情で悩むと、パッと顔を上げる。

「アニーさん、私、ヴィヴィオって子の後見人になったんです」

そして、話し出す。

私も自己嫌悪から抜けて、フェイトの話を真剣に聞こうと、耳を傾ける。

「そしたら、その子は私の事“フェイトママ”って、呼んでくれました」

……そうよね。こんな優しそうな子だもの。子供はやっぱりその人に“ママ”って呼ぶのよね。

「でも、私以外にも“ママ”って呼ばれている女性がいるんです」

へ〜、その人もフェイトと同じくらい、優しくて、母性に溢れてるのかしら……？

しかし、次に発せられた言葉は、私からは想定外の言葉だった。

「その女性は、厳しくて、ヴィヴィオの事、転んでも自分で立つようにって、泣いてるのに、起こしてあげないんです」

「結局、私が起こしちゃったんですけど」と付け加えるフェイト。それに私は衝撃を受けた。確かに私もそうしてしまうかも……、と思ったのだ。

つい厳しくしてしまうから。

でも、だったらどうして、そんな厳しい人をママって呼ぶんだろう？

そして、その次のフェイトの言葉は、更なる衝撃を私に与えた。

「でも、ヴィヴィオが本当に“ママ”って感じてるのは、私じゃなくて、その厳しい女性だって思ってます」

そ……んな……！

「そんなことないわ！」

と、つい叫んでしまった。
フェイトが一瞬、呆気に取られる。
私は「あっ」と思わず口を塞いだ。
恥ずかしくなり、そのまま縮こまる。
だって、そんなわけない……きっと、優しい人の方が、ママだって思うはずだもの……。
フェイトはそんな私を見遣り、微笑む。
「……きっと、わかってるんだと思います。厳しくするのは、その人が自分を本当に大切にしてるからだって……。確かに優しくしてあげるのは、良いと思うんです。でも、叱るべき時に叱らないのは、優しさじゃない……それが、わかってるんですよ、きっと」
その言葉は、私の心を大きく揺さぶった。
本当にそうなのかしら……？
わからない……だって、叱られたら、子供って悄気(しょげ)るじゃない。落ち込むじゃない。
そんなことされたら、やっぱり嫌いになるんじゃないの？
今まで、仕事の事ばかり考えていたツケが来たのかな……、とわからぬ心を考えながら、フェイトと別れて、内部監査部の部署に戻った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……部隊長、ただいま戻りました……」
私はオフィスの方まで戻り、部隊長にそう言う。

どうやら、他には誰もおらず、私と部隊長だけのようだ。

「どうかした、アニー？」

どうやら、少し元気のない私に気付いたらしい部隊長が、そう訊(たず)ねてくる。

でも、相談するわけにもいかず私は「いえ、何も」と短く答えて、背を向ける。

「アニー」

そしたら、背中越しに部隊長が、私を呼び止める。

「子供って親に何を望んでると思う？」

「望むもの……ですか？」

私は問い掛けられ、思わず振り返り考える。

それは……やっぱり……。

「包み込んでくれるような優しさとか、暖かさとか、所謂、部隊長が持ってるような母性じゃないんですか？」

そうだと思う。

だって、子供は優しくしてあげれば喜ぶし、温もりを与えれば安心するじゃない。

「ふふ、ありがとう。そうね。それも大切……でもねアニー。私思うの……子供って純真でしょ」

「はい……」

部隊長の言わんとしていることが、よくわからずとにかく頷く。
「だから、優しくされれば嬉しいし、叱られれば落ち込んじゃうの」
「はい……」
そうよ。だから、私がママなんて、呼ばれるなんてあり得ないはずなのよ……。
こんないつも叱ってて、落ち込ませてる私になんて。
「でも、純真だからこそ……相手の心が見えるんだと思うのよね」
「心が……見える……？」
部隊長は何が言いたいの？
私に何を伝えようとしてるの？
「うん。だから、叱られたって、相手が自分を想ってるのがわかるから、その後はその人の言う通りにするでしょ？」
「……」
そう……かもしれない……。でも、それはもう叱られたくないから、嫌だからじゃないの？
そんな私の心を読んだかのように、部隊長は言葉を続ける。
「そうね。確かに嫌々かもしれない。でも、その子もきっとわかってるんだと思うの。それが正しいことだって。だって、それが本当に正しくないって思ったら、きっとやらないもの」
そう言って、私に微笑みかける部隊長。
私は何も言葉に出来ない。
だって、確かにそうかも……、と思うけど、私のどこかがそれを

否定する。
違う……！　そんなわけない……！　って。
そんな私に部隊長が問い掛けた。
「それじゃあ、母性って一体何なんだと思う、アニー？」
私はその言葉を聞いて、わからなくて……わかりたくなくて……
バッと後ろを向くと、駆け出していた。
「大丈夫よ、アニー。怖くないからね」
その部隊長の言葉は、私には届くことはなく、空気に融け、こちらを見ていた影にも気付けなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

私が駆け出して、飛び込んだ場所は、適当な空き部屋。
辺りは暗く何も見えない。
私はその場にしゃがみこんだ。
何でだろう……もう何も考えたくない……。
そう思って、真っ暗闇の中、更に目を閉じる。
そうすると、完全に真っ暗になり、そういえば前にも……、なんて思い、幼い頃の記憶が、断片的に呼び起こされた。
――お母さんに叱られて、思わず家を飛び出しちゃって、辺りは夜で真っ暗な中、ただただ走って……そしたら、道がわからなくなっちゃって、こんな風に縮こまってたっけ……。
あの時……本当は自分が悪いことがわかってた。

でも、つい意地を張っちゃった……。
何か1つを思い出すと、他にも思い出されてく……。
――学校のテストで満点を取ったら、褒めてくれて、それが嬉しかったり。
――ふざけてたら、不注意でお皿を割っちゃって、きっちり叱られて、落ち込んだり。
他にも数えたら、無数にある。
でも、嬉しかったことも、落ち込んだことも、私にとっては、良いことだった。
叱られたって、ずっとお母さんの事は好きだったし。
愛情を感じた。
でも……。
何かが否定する。
認めたくないと……違うんだと。
その時――
コンコン。
ドアをノックする音がした。
誰かと思い、ドアを開ける。
すると、いたのは――
「ミル……ちゃん……？」
ミルちゃんだった。

どうしたんだろうと思い、ミルちゃんを見ると、少し悲しげな顔をしていた。

「どうしたの？　何かあった？」

「アンネが……ママが泣いてるから、行ってあげてって」

ここでいうアンネとは、部隊長のことだ。

別に私は泣いてなんか――

「ママ……いい子だから、泣かないで」

そう言って、ミルちゃんは私の頭を撫でた。

そうされた瞬間、わからないけど胸から込み上げるものがあり、抑えきれずに目から何かが垂れる。

「あ……」

それは一筋の涙だった。

何故かはわからない……だけど、ミルちゃんに撫でられた瞬間、私の中にある闇が少し晴れた気がした。私はその一筋の涙を拭き取る。

その間も、ミルちゃんは私を撫で続ける。

今なら訊ける気がする……いや、きっと今しか訊けない。

「ねぇ、ミルちゃん？　何で私の事、“ママ”って呼ぶの？　だって、私、怒って、叱ってばかりなのに……」

私がそう訊くと、ミルちゃんは私から手を離し、う～ん、と少し悩む仕種をして、再び私に向き直る。

「確かにね、叱られたら、落ち込んじゃう」

そう……だよね……。

こんな私じゃあママっぽくないよね……。

「でもね、“だから”大好き！」

「――ッ！」

――だから……！

そのミルちゃんの言葉で、私を縛っていた鎖が、解けた気がした。

涙が後から後から流れ出る。

そっか……私、怖かっただけなんだ……母性があるとかないとかって言葉で、予防線を張って、ミルちゃんと最小限の接近に留めようとしたんだ……。自分がママとして、接することが怖くて……。自信がなかったから……勇気がなかったから……。この子は私の事を見ててくれたのに……。

泣き崩れる私をミルちゃんは、戸惑いながらも頭を撫で続けてくれる。

ポンッ。

と、ミルちゃんが撫でる感触とは違う、別の感触を感じ、頭に手をやると、そこにはハンカチがあった。

慌てて、廊下を見ると――

「ナオヤ……」

すでに背を向けて、歩き去るナオヤの姿が見えた。

まったく……普通泣いてる女性(ひと)見て、ハンカチだけ置いて、行っちゃう？　一声くらいかけるでしょ……ホントにぶっきらぼうなん

だから……。
私はナオヤが置いていったハンカチを見つめながら、そう悪態を吐いた。
でも……、と付け加え、ありがと、と心中呟いて、ハンカチで涙を拭った。
そしてミルちゃんに向き直る。

「ごめんね」

言って、私はミルちゃんの髪を梳いてあげる。

「こんな弱いママだけど、ミルちゃんはまだ私のことママって、呼んでくれる？」

思わず年下の――それもママと呼んでくれる子の前で、大泣きしてしまい、幻滅したんじゃないかと思い、そう訊いたところ――

「うん！　ママが弱くても私が守るよ！」

思わずまた涙が流れ出しそうな言葉を言ってきた。私は込み上げるものをグッと堪える。

「……そっか、じゃあママもミルちゃんのこと絶対に守るね」
「うん！　約束！」
「うん、約束」

2人して、小指を出し、指切りを交わす。
その後は2人で手を繋いで、部署の方に戻った。
部署に戻ってきた私とミルちゃんの姿を見た部隊長は、優しげに微笑んだ。

今回は部隊長にすごく助けられた。だから、お礼を言ったら、「あらあら、なんのこと？」と惚けられた。
ホント、部隊長ってくえない人ね……、とそんな感想が漏れる。
そして、仕事に戻った私の元に、ウルスが寄ってきた。
「あの～、アンネ三佐？　今朝のことなんですけど～」
そしたら大分こちらを気遣わしげに接してきた。
まったくもう……。
「今朝？　なんのこと？」
今日だけは許してあげるわよ。
私が惚けると、ウルスはパーッと明るい顔になり、「い、いえ、なんでもないで～す！」と言って去っていった。
現金な子なんだから……、とその後ろ姿を見送った。
そうだ……、とちょっとしたことを思い付いた私は、仕事中のナオヤに近付く。
ナオヤは私が近付いてきたのに気付くと、気まずいのか目線を逸らした。
む……、と少し唇を尖らせ、私はナオヤの近くに立つ。
「目を逸らさなくてもいいでしょ？」
「……」
私がそう言うが、尚もナオヤは気まずそうに、目線を逸らしながら頭を掻く。
だが、私が見つめていると、数秒して、向き直り、私の目を見てから、意を決したように口を開いた。

「なんだ……その……大丈夫……なのか？」
「ええ、お陰様でね」
「そうか……」

それで話は終わったかのように、再び目線を逸らし、仕事に戻ろうとする。
私の話がまだなんですけどね……。
仕方ないので、横を向いたナオヤの耳に、口を近づける。
「今日の仕事終わりに付き合ってください」
ナオヤは少し驚いた顔でこちらを見てきたが、私はそれだけ言って、仕事に戻った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その翌日の朝。
アニーと途中で会ったカリスが廊下を歩いていると、後ろから――
「パパー！　ママー！」
という声がして、アニーとカリスは後ろを向く。
そこには少し遠くから、廊下を走りながら、近づいてくるミルドレッドの姿があった。
「走ると危ないぞー！」

それにカリスが、注意を促すが、ミルドレッドは聞こえていないのか、それとも早くママとパパの元に行きたいのかわからないが、走るのを止めようとしない。
すると、予想通りというか、お約束というか、とにかく数メートル先で、ベチャッと転んだ。
カリスが「言わんこっちゃねぇ」と呟き、助け上げようとして――

「待って。きちんと受け身が取れてたわ。多分だけど怪我はしてない」

アニーがそれを止める。
カリスは有無を言わせぬその口調に、しり込みする。

――私はもう逃げない。

ミルドレッドが顔を上げて、泣き顔で「パパ、ママ～」と言ってくる。

「だ、だけどよ、ここの廊下かてぇし……」
「いいから」

尚も言い募ろうとするカリスを押さえ込み、アニーは屈んで両腕を広げる。

「どこも怪我してないわよね？　おいで？　ママ、ここにいるわよ」

そう言ってアニーは、優しく微笑んで、ミルドレッドを見る。

――私があなたを守るから……。

ミルドレッドは頑張って立ち上がろうとする。
カリスはそれをハラハラとした気持ちで見て、どこか落ち着かない様子。
「ここまで来れたら、いいものあげるわよ」
「ママ……」
ミルドレッドがしっかりと2本の足で立ち上がった。
――せめて、あなたがここにいる間は、私がママとして。
ついで、ミルドレッドはママ――アニーに向かって駆け出す。
「ママ！」
そして抱きついた。
アニーもそれを支えつつ、抱きしめ返す。
――あなたに愛情を持って接するからね。
「偉かったわね、“ミル”」
「うん！　ママ！」
それから、ミルドレッドの腕の中には、1日中クマのぬいぐるみがあった。
それは昨日ナオヤと共に、買いに行った品である。
――部隊長、私なりの問い掛けの答えを出しますね。行動じゃな

い……その行動をどんな気持ちで、相手にしたかが重要なんだ。

——大人になるにつれて、相手の心が見えなくなって、外面だけ見るようになるから、“母性”というのを行動で考えてしまうのかもしれない。

——でも、子供にとっては、その裏に隠された真意こそが“母性”なんだ。

——愛情を持って接してあげれば、きっとわかってくれる。“母性”を感じ取ってくれる。

——私はそう思いました。きっと正解じゃないだろうけど、答えは出ました。

——あなたにとっての母性ってなんですか？

第十話　ママとして（後書き）

なんだか繋ぎにくい終わり方した気がします……。

ごめんなさいＴＲさん、次よろしくです。

第十一話　夢とマイアル（前書き）

２回目のＴＲです。

今回もシリアス路線で行きます

第十一話　夢とマイアル

ミルＳｉｄｅ

私は夢を見ていました。
そこは一面火の海でした。
時より外では爆発音までします。
私は怖くて泣きそうになりました。

「大丈夫よ、ミル」

そう言ってあたしの頭を優しく撫でてくれるのはママです。
顔は覚えていませんが、とても優しい人だったのは覚えています。
少しすると、二人の人が私の所に戻ってきました。

「いい子にしてたか？　ミル」

私にパパがやさしい表情をして聞いてきます。
私が頷くとパパは私の頭を撫でて褒めてくれました。

「――――、やりすぎだよ」

横にいたお父様がやつれた様子でパパに文句を言います。
私にはパパとその親戚のお父様がいます。
パパはいつも家にいないのでいつもお父様に遊んでもらっています。
だから私はお父様とパパの事が大好きです。

「二人とも、今日はどうだった？」
「少し大変でしたけど、みんなが助けてくれたのでなんとかなりま

した」

ママの言葉に、お父様が横にいる狼さんを撫でながら報告します。

「こっちも少々苦戦したが、何の事もなかった。マイアル家にかなうものなど、そういない」

「ふふ。そうね」

パパの言葉に、ママがやさしく微笑みます。

「カ■■パパ……■ル■お父様……■ニ■ママ」

私はちょっと頬を膨らませて三人を呼びました。

それがあの日見た、最初の夢でした。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

★　★　★　★　★　★　★

「パパ、ママ」

「どうした？ミル」

とある日、いつもの局員の服装ではなく私服のカリスとアニーに手をつながれて歩いているミルは、二人に声を開けた。

「ウルスお父様は大丈夫なの？」

「あ～」

「大丈夫だ。あいつはあれでもしっかりやるタイプだ」

ミルの問いかけに、アニーは苦笑いを浮かべながら、カリスは表情を変えずに答えた。

「そ、それよりも！今日は何が食べたい？」

強引に話題を変え、アニーはミルに尋ねた。

「ふぇ！？　……お任せします」

何度も言うが、ミルはいまだにどのような料理があるのかを知らない。

そもそも覚えきれる方が恐ろしい具合だ。

「だったら、あそこはどうだ？」

「？？　まあ、カリスに任せるとしましょう」

アニーの言葉に任せとけと軽快に答えると、そのままカリスの知る店へと向かうのであった。

その姿は何も知らないものが見れば、どこにでもいる普通の家族のようなものであった。

★　★　★　★　★　★　★

一方そのころ管理局の内部監査部はと言うと……

「ウルス！　これはそっちだ！！」

「あ、はい！！！」

「ウルス君、その後はこっちよ！！」
「は～～い！！！！！」
大忙しの状態だった。
事の発端はカリスの『俺達の変わりはウルスがやってくれる』と言う言葉だった。
これに反論しようとしたが、ミルの尊敬のまなざしに負けて引き受けてしまったのだ。
ちなみに、この後どこからともなく叫び声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

★★★★★★★

「へぇ～随分と良いお店ね」
カリスが連れてきたのは、ミッドにある飲食店とは一風違った所だった。
それは、地球の文化に合わせて作られたものなのだ。
現代、エース・オブ・エースなどの地球出身者が注目されている影響ともいえる。
「いらっしゃいませ。三名様ですか？」
「あ、はい」
突然出てきたウエイトレスに驚きながら答えた。
「それでは、こちらにどうぞ」
「ご注文が決まりましたら、お知らせください」

ウエイトレスは丁寧にお辞儀をすると、カリス達が座るテーブルから離れて行った。

「いっぱいあるのね」

「そういう事だ。で、ミルはこれにするか？」

カリスはアニーに答えながら横に座るミルにメニューの一部を指差しながら聞いた。

「お子様、ランチ？」

それはよくおなじみの子供用に出される『お子様ランチ』だった。

「……」

意味を理解したミルの雰囲気が変わった。

（あ～あ、やっちゃったわね。カリス）

アニーもそれがどういったものかに気付いた。

だが、気づかないものが一名。

「俺は何にしようかな～」

いま目を輝かせてメニューを眺めているカリスだった。

★★★★★★★

「すみません」

やがて注文する物が決まったカリスは店員を呼び、注文をすることにした。

「お決まりでしょうか？」

「はい。私は魚介スパゲッティで」

まず最初にアニーが注文する。

「俺はスタミナ丼で、この子はお子様――」

カリスが、ミルの注文を言おうとした時だった。

「スタミナ丼でお願いします！」

「ミ、ミル！？」

突然のことに目を見開くカリス。

それもそのはず。

スタミナ丼は量が多いことで知られているものなのだ。

それを彼女一人で食べると言うのは、明らかに不可能だ。

だが、驚いたのは彼だけではなかった。

「お、お嬢ちゃん。あれは大人用だからお嬢ちゃんには――――――」

「スタミナ丼！！！！」

説得しようとするウエイトレスを言葉で威圧した。

「か、かしこまりました！！」

ウエイトレスは慌てて、厨房の方に入って行った。

「ミ、ミル」

「私は子供じゃない！！！」

どうやら、カリスに子ども扱いされたことが気に障ったらしい。

「パパはもう少し乙女心を勉強するべきなの！！」

「はい。すみません」

その後、カリスはミルによって怒られ続けた。

（どっちが子供なのやら）

アニーはその光景を見ながらため息をついた。

ちなみにこの説教は、ウエイトレスが料理を運んでくるまで続けられた。

★　★　★　★　★　★　★

「うん、いつもうめえ」

「本当ね、これもおいしいわ」

カリスとアニーは、おいしい料理に舌鼓みを打っていた。

しかし、約一名は違った。

「ぁぅ～食べられないよぅ～」

テーブルに突っ伏しているミルだった。
ちなみにスタミナ丼は7割残されていた。

「だから言わんこっちゃない」
「でも、3割もよく食べれたわね」

呆れた風にため息をついて背中をさするカリスに、器の中に残った量を見て感心しているアニー。
何とものどかな光景であった。

――――そう、この時までは。

パァン！！

乱暴に開けられたドアに、その場にいた客全員が入口の方を見る。
ドアを乱暴に開けたのは、黒い帽子にサングラスをかぶっている5人組の人物だった。

【やりそうだな】
【やりそうね】

二人は念話でそんなやり取りを交わし、いつでも動けるようにカリスはこっそりとデバイスを起動させる。
そして……

パン！パン！パン！

「動くな！！動けば撃つぞ！！」

男（声色から判断）の一人が天井に向けて威嚇射撃する。
それは質量兵器であった。

【行くわよ！】
【おう！！】

そして二人は一気に動いた。

「てめえ！！　座って――――――――ぐはっ！？」
「何しやが――――――――――――がっ！！」

カリスとアニーの奇襲が功を奏し、次々に犯人を制圧していく。

（いい感じ。このままなら）

アニーが内心でそう思った時だった。

「動くな！！　この餓鬼がどうなっても知らないぞ！！！」

リーダーなのであろうか、ガタイのいい男が大きな声で叫ぶと片手に掴まえられた人物の頭に銃を突きつける。
その人物は……。

「「ミル！！」」

先ほどまでテーブルに突っ伏していたミルだった。
二人は、ミルのことを失念していたことに後悔すると男たちに向き合う。

「まずはそのデバイスを捨てて貰おうか」

「カリス……」
「っち！」
アニーの一言で、カリスは犯人の言うとおりにデバイスを男の方へと投げ飛ばした。
「いいか！　へんな真似をしてみろ！　この子の頭が吹き飛ぶ！！！」
男はそう高々に宣言すると、客に向けて銃を突きつける。
（どうしたものかしら）
アニーは考えた。
普通であれば、すぐに制圧が出来る状況だが、今は犯人の手にはミルがいる。
もし動いてしまえば、次の瞬間には犯人によって殺されてしまうことは確実。
「兄貴、この女中々いいですぜぇ」
「触んないで！！」
犯人グループの一人がアニーの方に振れたため、反射的にその手を振り払った。
「きゃあ！？」
その次の瞬間、男の足払いでアニーは地面に倒れた。
「この女！！！よくも！！」

「ッ！！」

男が蹴る体勢をとったので、アニーは次に来る痛みに耐えるように目を閉じた。

【大丈夫。ママは私が守るよ！！！】

その瞬間、頭の中に力強くて頼もしいミルの声が響いた。
それは念話とは違うものであった。
心の中で、首を傾げている時だった。

「おい！　餓鬼！！　何さっきから呟いてやがる！！！」

リーダー格の男の叫ぶ声が店中に響き渡った。
アニーは目を開けて声のした方を見る。そこには……

「エルにジア・ミゼラ二・セイルスウェル」

まるで呪文のように無表情で唱えるミルの姿があった。

「このくそ餓鬼！！」

そして男が引き金を引こうとした時だった。

「ナガニリア・ミルセイユ・マイアル！！！」

ミルの言葉と同時に、辺りは光に包まれた。
その光は時間にして、ほんの数秒程度。
そしてやがて光はゆっくりと薄れていく。
そして光が消えた時、アニーたちが見たのは……。

「なッ！！」
「嘘……」

犯人グループ全員が地面に倒れて気を失っている姿だった。
その後、局員が到着し犯人たちを逮捕して事件は解決した。

★　★　★　★　★　★　★

「すぅ……すぅ……すぅ……」
「よく寝てるわね」

犯人たちを撃退してからずっと眠っているミルを担ぎながら、アニーはつぶやいた。

「……ああ」

カリスの生返事に、アニーはさらに言葉をつづけた。

「……さっきのあれの事を、気にしてるの？」
「そうだな。魔法陣を展開しないで中規模の魔法を行使……普通じゃありえない」

カリスの言葉にアニーも頷く。
通常、中規模以上の魔法を行使するときは、どうやっても魔法陣を展開しなければならない。
これを展開せずに魔法を行使したとなると、それは希少能力（レアスキル）に分類されてもおかしくない物だ。

だが、二人はただのレアスキルではないと考えていた。
「あの呪文と、魔力測定の結果を鑑みてもおかしいわ」
「……ちょっと俺、調べてみるよ」
カリスの言葉に、アニーは驚いた様子でカリスの方を見た。
「何か知ってるの？」
「いや、俺は知らない。だが、もしかしたらあそこを調べればあるかもしれない」
「あそこって？」
アニーの問いかけに、カリスは答えた。

★　★　★　★　★　★　★

「ユーノ、いるか？」
「あれ？　カリスじゃない。珍しいね、君がここに来るなんて」
カリスが訪れたのは、色々な場所の本が保管されている『無限書庫』の司書長でもある”ユーノ・スクライア”だった。
二人は、昔からの知り合いでもあるのだ。
「ああ、ちょっとユーノに調べてほしいことがあってな」
「調べてほしいこと？」
カリスの言葉に、首を傾げるユーノに、カリスは事情を話した。

「なるほど……事情は分かったよ。時間が掛かるかもしれないけど。調べてみる」
「すまないな、用事を増やしちまって」
ユーノが快く引き受けたことに、カリスは謝った。
無限書庫の司書長というのはかなりきつい仕事で、休みがほとんどないのだ。
その理由は、無限書庫の特性にもよるものだが。
「分かったら伝えるよ」
「ああ、よろしく」
カリスはそう告げると、無限書庫を後にした。
ちなみに、このことを伝えた時にアニーに「あなたが無限書庫を知ってるなんて驚きだわ」と言われたのは、未だに彼の心にダメージを与えていた。

★★★★★★★

カリスがユーノに見るの調査を頼んでから数日後。
「パパ、これはどうすればいいですか？」
「ああ、それはな――――――」
内部監査部はいつもの和やかでしかし、少々慌ただしい雰囲気であった。
「失礼します。無限書庫の司書長のユーノ・スクライアです」

そんな中、突然内部監査部に訪れたのは、ユーノとその後ろにいるクロノであった。

「あら、ユーノさんにクロノ提督！？　一体どうなされたんですか？」

「いえ、ちょっとお話がありまして……」

ほとんど来ない（ユーノに関しては初めて）二人の訪問に、アンネは驚きを隠せなかった。

もっとも驚きを隠せなかったのは、彼女だけではないが。

「すみません。彼女を連れて行ってもいいでしょうか？」

「え、ミルを……ですか？」

突然のクロノの申し出に、アニーは表情をこわばらせた。

ここでＯＫを出していいのか悪いのかを、彼女は判断できずにいたのだ。

「はい、大丈夫です。」

「カリス！？」

カリスの答えに、思わず大声を出したアニーに、カリスは大丈夫だと目線で伝えた。

「……」

「すみません。それじゃ、ちょっとお兄さんとお出かけしようか」

「いい子にするのよ、ミル」

アニーの言いつけに、ミルは”は～い”と元気に答えると、クロノ

と手をつないで内部監査部を後にした。

『……』

残された内部監査部のメンバーとユーノは無言だった。

「あ、僕お茶を入れますね」

「あ、いえ。お構いなく」

ウルスの一言が突破口だったのか、口を閉ざしていたアニーたちが口を開いた。

「それで、お話と言うのは？」

「あ、はい。彼……カリスに頼まれたことの報告を」

アニーの問いかけに、ユーノが答えると、全員の表情が強張った。

「……それで、どうだったんでしょうか？」

アンネが、単刀直入にユーノに問いかけた。

アンネたちは、カリスがユーノに頼んだ内容を知っていた。

「まず、簡単に言ってしまいますと彼女……ミルドレッド・マイアルは――――――」

そしてこの後、ユーノの口から、衝撃の真実が語られる。

「この世界……いいえ、この時間軸の人間ではありません」

第十一話　夢とマイアル（後書き）

お次は回覧板さん。
よろしくお願いします。

第十二話　ベルカのマイアル（前書き）

二週目回覧板レッツラゴー！

第十二話　ベルカのマイアル

「あくまで仮定の話なんだけど、おそらく、彼女はベルカ時代の人間かもしれない」

ユーノはそこで一旦喋るのを止め、画面を開く。

と、同時に各員にも画面が共有される。

それを確認してから、ユーノは喋るのを再開した。

「国無し幻王、シャンデルライト・マイアル。古代ベルカ時代、強力な諸王の中に突如として現れて、猛威をふるった一族の長。彼自身は国も自伝も持たなかったけど、諸王の国記の中には必ず出る勇士だよ」

共有された資料にはシャンデルライト・マイアルという文字がところどころに記され、悪いものから良いものまで幅広く書かれている。

しかし、これだけではミルドレッドの件とは関係がない。

あくまで、姓が一緒になっただけの関係だ。

全員それは分かっている。

「彼の娘の名前は、ミルドレッド・マイアル」

名前が同じ。しかし、まだ関係ない。

「彼女は“今なお行方不明として扱われている”」

最後のは衝撃的な事実だった。

古代ベルカ時代に行方不明になった人物が今なお、いや、管理局

で捜索している。単純にその事実がミルドレッドという異常を表していた。
そう、古代ベルカ時代――“今から数百年も前であり、管理局は存在していなかった時代から捜索され続けている少女”、これが異常でない訳がない。

「分かっていると思うけど、これは異常だよ。けれど幸いな事に良い情報もある」
「良い情報？」

フォークスは少しでも事態の好転を願って、その情報を聞き入る。
ユーノはミルドレッドの捜索状をフォークスに手渡す。

「下を見てみて」

フォークスは受け取った捜索状の下を見る。そこに書いてあったのは依頼主の名前と出身世界だった。

第一管理世界、ミッドチルダ。ルビオール・マイアル。

マイアルという文字が隊員達の目で踊る。

「まず間違いなく、彼は何かを知っているはずだ」

ユーノはそう力強く断言した。
後はどうするかを決めるだけだが、そんなことはどうでもいい。
何をするかという結論はすでに見えているのだから。

『ルミナリカ一佐！』
「行っていいわよ？」

フォークス、カリス、ウルスの声に反応して、ルミナリカは許可を出した。
それからは迅速かつ素早く行動する。
ただしユーノは止めようとして、ルミナリカは眺めるだけだ。
「ま、待って！　話は最後まで聞いて！」
ユーノの必死の言葉もなんのその、三人は勢いそのままに部屋から出て行ってしまうのだった。
部屋に残ったのは、ルミナリカとナオヤ、それからユーノの三人。
「って、何か問題があるのか？」
静かさが戻ってからナオヤが口を開いた。本来なら隊長であるルミナリカが聞くべきことであるのだが、ナオヤはルミナリカがどんな性格なのかを知っているので、隊長の代わりに聞いたのだ。
ユーノは腕を組み、また資料を渡す。
「マイアル家は昔から極度の鎖国的一族で、何の連絡もなしにいくと、攻撃してくるんだ」
「あいつらは強いから平気だ」
「いいや、マイアル家の力は生半可な力じゃない」
「どういうことだ？」
「マイアル家が古代ベルカ時代に生き残った理由がそれ。マイアル家秘伝の稀少技能（レアスキル）、幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）。敵味方関係なく、発動した瞬間にあらゆる魔法攻撃を反転する技。とくにシャンデルライト・マイアルのそれは圧倒的で、無機物すら騙されたらしい」
「つまりあいつらには荷が重いと？」

多分ね、と心配そうにユーノは言う。

しかしナオヤは特に心配しなかった。

何故なら信頼しているから。あの三人が魔法がなくなっただけで負けるわけがないということを。

「大丈夫だ。あいつらはそんなにやわじゃないからな」

「ふふ♪　そうね♪」

今まで黙って眺めていたルミナリカが、ナオヤをいじるように乱入してきた。

ナオヤは面白くなさそうに顔を歪めるが、ルミナリカは気にした様子もなく笑っている。

ルミナリカは大らかな性格ではあるがそれはいいことばかりではない。

彼女の場合は、なんでも許容してしまう性格があり、それが長所であり短所なのだ。彼女は魔法を使えないが故に、許すことであらゆる事件を解決して、彼女に捕まえられた犯罪者はほとんど再犯しない。

ナオヤはそんなルミナリカに対して多少の嫌悪と、それに勝る好意を持っている。もちろん、尊敬という意味でだが。彼の行動をルミナリカは何でも許容し、言動もすべて許容する。無視しても許容するが、無視しても構ってくる。ルミナリカはそういう人だった。

「なんですか……」

「いや、うふふ♪」

「それで、止めなくていいんですか？」

「それは誰をかしら？　うちの三人？　それともクロノ提督？」

ゾクッという感じがして、ユーノは座ったまま硬直した。

それは怖いとか威圧があるとかそんなんじゃない。得体のしれない何かを首に突きつけられたような感じだ。
ユーノは気付かれないように静かに深く息を吸い込んで、落ち着くように吐く。

「でも危険かも」
「まぁいいじゃない。青春ってやつよ」

ルミナリカはまったく気にした様子も無く、作業に戻っている。
困ったような様子をしているユーノに、ナオヤはお茶を差し出す。

「あいつらが簡単に負けるようなら、その程度の気持ちだってことだろ」
「あらあら、ナオヤちゃんは心配じゃないの？」

作業をしながら口を挟むルミナリカを一瞥してから、茶を啜る。

「あ、それ」

ユーノが口を開いたところでナオヤは自分が飲んでいるお茶がユーノに差し出したものであることに気付いて、ゆっくりと立ち上がり、新たに入れたお茶をユーノに差し出した。
再び座り足を組むが、組まれた足は苛立ちを体現したようにかたかたかたと動いている。
ユーノは居心地悪そうにお茶を貰い、一息ついてから立ち上がる。

同時に扉が開いて、クロノが肩を竦ませてやられた、という顔をして入ってきた。
後ろにはミルドレッドの姿があった。何か分からずにきょとんと

していた。
　クロノはその顔のままルミナリカの前に立ち、とある画面をルミナリカに差し出す。
「あら？　クロノさんが持ってきてくださるとは思いませんでした」
「送信するだけでもよかったんだが、この子を連れてこなきゃいけなかったからね。それにしても、あなたに預けたのは僕のミスでした。まさか先を越されるなんて」
「誉め言葉かしら？」
「そう受け取って貰って構わないさ、正直僕個人としてはこうなってくれて嬉しいよ。執務官としてはこの行動力に感嘆するよ」
　ちらりと渡した画面を見る。
「本来なら厳重な監視のもと保護するはずなんだが、陸少将に陸佐官数名が連名で監視場所に内部監査部を推薦したら、海としても無理な行動は出来ない。今回復し始めた陸との関係に傷をいれるわけにはいかないからな」
　画面は内部監査部においていいか否かのもので、既にルミナリカの名前がでかでかと書かれているのが見える。
「この子のような稀少技能は研究の対象……はっきり言えば実験体にされかねない。あなた達なら信用できそうだし、何よりあなたがいる。アンネ・ルミナリカ一佐」
「あら？　過大評価ですわよ。私にできることなんて、許すことくらいしかありませんもの」
「……まぁあなたがそういうならそういうことで。でも少将クラスの人間に頼めるのはあなたくらいですよ」

クロノはミルドレッドの前に屈んで真正面から見る。
「もう少しここでおとなしくしているんだぞ？」
「はい！　お父様！」

ミルドレッドの元気の良い返事を聞いて頷いたクロノは、納得のいかなさそうなユーノを連れて隊舎をでていった。
それを見送ったナオヤは、自分の席に戻り、張り巡らせてある監視用の機器の映像の確認をし始めた。その姿はどこか落ち着きが感じられず、時たま時計で時間を確認していたりする。
ミルドレッドはそんなナオヤを不思議そうに見ながら、簡単な書類を纏めているのだが、不意に電話がなる。
それを取ろうとしたミルドレッドだが、ナオヤが手で制して、電話をとった。

「管理局システム情報――――」
途中まで対応していたナオヤは苛立たしげに通話を切り、怒りを抑えるように荒い息をしていた。

ルミナリカは不思議そうにナオヤを見る。
「どうしたの？」
「――――俺が絶対に関わりたくない類の人類がいた！」
もはやいろいろと取り戻して、総毛立っているナオヤを面白そうに見ていると、もう一度通話を求める音がなる。
同じところからだ。
ルミナリカは場所を確認し、通話を受けて、相手からの声が聞こ

えないようにしてから、自分のお茶を入れて一服。
そして、声が届くようにした。
“もしもーし！　あれ？　まさか聞こえてないのか？　聞こえてたらおっぱいって返事くれよ！”
「久しぶり、ナクタ」
“お、通じた！　ほれみろロロ嫌われた訳じゃないだろ！？　賭けは俺の勝ちだな！　抱きついてぐぼふっ！　ちょ、ビン！　一升瓶は死ねる！　というかどこから出してんだよ！”
騒がしさには耳を閉じてやりすごし、ルミナリカはまたお茶を啜る。
うん、美味しい。
“いやーまさかアンネから連絡が来るとは思わなかったぜ！　あ、まさか最近になって魅力が分かってきた？　俺は既婚でもどんとこい！！”
「助かりましたわ、ナクタ小将。貢献の方も全員この組織を知っている人にしてくれたことにも」
“楽勝楽勝！　だって全員男だしな！　おっぱいないから真面目に話したら簡単に応じてくれたぜ！　ぐばっ！　な、なんだ、理不尽な攻撃がどこからともなく！？　あ、メール……り、理不尽だ……言い訳できないけどなぱぁっ！”
電話の向こうで、ナクタと呼ばれる少将がとある特殊部隊の隊長から理不尽な遠距離攻撃をされたのを、こちら側の面々は知らない。

ともあれ、このナクタと呼ばれる少将が何かをしたことは言うまでもなくないことだろう。

“それに巨乳のお前からの頼みだしな。聞かない訳ないだろ？　お前にはいろいろと借りもあることだしな”

いちいち不真面目な単語を交えながらなされる会話には、何の隠した様子はない。全てをさらけ出しているかのように会話されている。

片や何でも許容する寛大な心、片や何も隠さないありのままの心。

――両方、ナオヤが最も嫌いなタイプ、――しかし、ナオヤの理想とするタイプでもある。

「それで、何か欲しいものはあるかしら？」

“おっぱい！”

「分かりましたわ♪　後でいらっしゃい♪　乳児として扱ってあげる♪」

“うわ！　運命の二択かよ！　おっぱいを吸って乳児になるか、おっぱいを吸わない大人の体裁か！　だけどな！　男にはどうしてもやらなければならない時がグボヘッ！　だめ！　っていうかそのビンの素材はなんだよ！　なんで強打しても割れないんだよ！　え？　俺の頭が柔らかいから？　ひどくね！？”

「それはそうとして、近々一緒に食べにいきましょうか。ナクタの昇進祝い、まだしてなかったでしょ？」

“……ほれみろ、これが大人ってやつだ！　クミコ、お前の魅力は俺にしか届かないぜ？　ハハハ、コウスケクン、デバイスハシマッテクレナイカナ？　ロロ？　まさか相手にするやつがいないのか！？　なんなら俺がぼへっ！”

相変わらず楽しそうな人ですわね。ルミナリカはよほどそう思ったが、それは口に出さなかった。

出してしまえば、認めたくないことまで認めなくてはならない気がしたからだ。

「ではまた」

“あ、待てっておっぱ――”

通話を切ったルミナリカはうんと伸びてから、数秒後にきた通信を受ける。

“いきなり切るなよ！　まだ用があるんだって！”

「何でしょうか？」

“お前、ちゃんと認めてやれよ？”

「――――切りますね」

ルミナリカは通信を切った。

それからなるべく平静を装って作業に戻る。

ナオヤでも、ルミナリカの動揺には気付けなかったのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

ミッドチルダ市街を走る、ウルス、カリス、フォークスの三人は、目標までもう少しというところまでたどり着いていた。

「会ってどうすればいいんだろ？」
「それはその時決める、今はとにかく会うぞ！」
「局員三人って威圧的じゃないかな！？」
「大丈夫だ！　一人は子供でペアとしたら普通だからな！」
「子供役はまさか僕じゃないでしょうね！？」

騒がしく進む三人に周りの人は奇異な目を向けるが、それ以上に関わりたくないというように目を逸らす。
そしてようやく目的地であるルビオール・マイアルの家にたどり着いた。

その最初の感想は、――――でかい。それくらいだ。

「じゃ、じゃあ、呼ぶわよ？」

フォークスが代表してインターホン代わりの通信を行う。
するとすぐに通信は受け取られて、画面と共に声が発せられる。
その声は予想より遥かに重たい声だった。

「誰だ」

それだけ。

――しかし、フォークスのように言葉に圧を加えた訳でもないただの肉声が、三人に重く冷たく鋭利に届く。
フォークスはグッと気持ちを抑え、できうる限り平静を装いながら言葉を返す。

「管理局システム情報部副部長アンネ・フォークス三等陸佐であります。捜索願いに出されているミルドレッド・マイアルさんについて伺いたいことがあってきました。あってくれますか？」
「……見つかったのか？」

わずかに驚きの色が混じった声だった。捜索願いは出しただけで期待はしていなかったのだろう。フォークスも予測はしていたことなので、焦らずに話を続ける。

「会って話します」
「管理局は信用ならない。だが、何かしらの情報を持っているようだな」
「否定はしません」
「そうか」
ルビオールは、ふぅと息を吐き、それからやや挑戦気味に、言葉を紡いだ。

「俺と勝負しよう。俺が負けたら何でも情報をくれてやる。ただし、俺が勝ったら何でも無条件に従え」
「……分かりました。では、誰が戦うかを」
「いや、三人でいい」

通信が切られた。直後大きな門が開き、三人を中へと誘う。三人は警戒しながらも中に入る。
そこは庭園だった。だだっ広い家の大半を庭園が占めているよう

だ。

「ここなら派手に戦闘しても被害はないだろう」

――――忽然と三人の前に、まるで気体中の何かが合わさって出来たかのように一人の青年が姿を表した。

彼こそがルビオールだ。長い銀髪を後ろの高い位置で一つに結い、色彩の薄い水色の瞳が三人を見据えて離さない。長躯なこともあり、三人をやや見下ろすような感じになっているのがまた、彼の威圧感を高めているようでもあった。

「なんだ、そんなに強そうには見えない面子だな。そんなんで俺に勝てるとでも思っているのか？」

「あの人、僕のこと見てません？」

「気にしたら負けだ、ウルス」

カリスは腰を落とす。これから一気に飛び出し肉迫するように。

「タウティ、一気に沈めるぞ！」

《了解だよ♪》

両拳に鉤爪が現れ、同時に、カリスは不敵に笑った。

「形質変化、［水］！」

《分かったよ♪》

鉤爪からさらに長い爪が空気中から現れる。カリスが空気中の水蒸気を魔力によって水に変換したからだ。しかし、それだけでは、爪の形に止まらない。

「［制圧］。固定は任せて！」
「おう！　一気に決める！」
《任せといてね♪》

水を爪として固定しているのはフォークスだ。本来なら氷にまでするのがカリスのやり方なのだが、水のままの方がいろいろと都合がいいので任せているのだ。

駆ける！　五歩以内の距離を三歩いき、巨大な三つの水の爪を右から左へ敵を切り裂くように――――！

「幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）」

不意に、そんな言葉が三人に届いた。

《ぼ、防御！》

直後、まるで引き裂かれたような後を付けて、カリスが大きく後ろになぎはらわれた。巨大な三つの鉤爪でつけられたような痕が、地面に刻まれている。

幸いなことにタウティが防御を展開したため、カリスに直接ダメージが入ることはなかったが、相手の力がどんなものか理解できた。

その非常識さを。

「いってぇ……」
《大丈夫ー？》
「あぁ、助かった」
「カリス！？」

「大丈夫だ！　気を抜くなよ！」

チラッとルビオールの方を見る。動いた痕跡もなければ、何かをした様子も感じられない。

これが単独で国に挑んだ一族の末裔だということに今更ながらきづかされるのだった。

第十二話　ベルカのマイアル（後書き）

次は妄音ルゥさんです。
よろしくぅ！

第十三話　ｖｓ幻惑の庭園（前書き）

さて三週目に突入しました
どうも妄音ルゥでございます。
早くも三週目ですが終わる見込みはありません。
つかこれ五週で終わるの？ｗ
まぁとりあえずは三週目の一発目をお楽しみください
ちなみに今回は戦闘のみです。
未熟ですが、よろしく

第十三話　ｖｓ幻惑の庭園

「大丈夫だ！気を抜くなよ！」
「もちろん！」
「わかってる！幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）、なかなか厄介ね……」
カリスの言葉に全員が答え、すぐに警戒態勢に戻る。
カリスも姿勢を整え、三人は前中後衛に別れほぼ一列に並んだ隊列へ変わる。
「どうした？まだ始まったばかりだぞ」
ルビオールの挑発的な発言を、三人は受け流しつつ観察する
――どこに隙がある……？――
考えることは三人とも一緒だ
だが、答えが出ない。
隙は……ある
いや、隙しかないのだ。
自然体、ルビオールはただ庭園を眺めるだけのような、そんな風に立っていた。
「カリス、もう一度……いける？」
「当たり前！もういっちょ逝くぜ！」
アニーの言葉に返事をし、瞬時に十歩の距離を詰めルビオールに肉薄する。
「学べよ、青年。幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）」
「っぐ！！」
ルビオールの一言で、カリスは再び吹き飛び倒れる。
「弱いな、お前ら。今までの奴よりはいくらかマシだが、バカの一つ覚えじゃ俺には指一本触れられんぞ」
「（幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）……魔法反転能力か、体術なら相手になるかしら？
・・・・いや、それならあの余裕が説明できない。なら……なにが効くの？）」

「そら、徒手空拳でも質量兵器でもなんでもいい、かかって来いよ」
「安い挑発ね、それにあなたがそう言うってことは絶対の自信があるんでしょう？そうそう相手の土俵には立たないわ」
アニーは考えながらもルビオールに言葉を返す、だが
「ふん、そもそもここは俺の庭だ。最初から俺の土俵の上にお前らは立ってるんだよ」
「……なら、いかせて貰います！パパ！一緒に！」
「りょーかい！遅れんなよ！？」
「パパこそ！」
そう言って今度は二人が切迫する
左右から槍と巨大な水の爪がルビオールを襲う。
「幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）、だから学べよ、青年ども」
だが、やはり一言で覆されてしまう。
「く……いってぇ、けど、分ったぜ？お前の弱点」
「ほぅ？」
「本当に？（多分、カリスの予想は間違ってる。いや、それが分ってて口にしてるのか……ん？そう言えば何か）」
カリスが吹き飛ばされながらルビオールにそういった。
その言葉に各々反応を見せるが、ルビオールの余裕さはまったく変わらない。
「ウルス、合わせろよ？」
「了解！」
一瞬のアイコンタクト、それだけで意を解したのかカリスとウルスは同時に駆ける。
「所詮バカか、幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）」
カリスが切りかかった瞬間、ルビオールは幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）を発動させカリスを吹き飛ばす
「いっけぇ！！」
「あああぁぁぁぁ！！」
刹那、カリスと交差する形でウルスが肉薄、攻撃する……！

ズガンッ！と強烈な音がして
「ウルス！」
ウルスが、弾き飛ばされていた。
「お前……」
「まさか、幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）が単発の物だと思ったか？これはな、空間展開系の……言わば結界なんだよ、効果の持続なんぞ朝飯前だ」
「くっ……」
カリスが、一つ呻きをあげてこちらを見る
――もう、分ったか？――
アイコンタクトは、そう私に伝えた。
「なにが……ん？……っ！」
そこで、理解する。
違和感の正体が解り、頭の中ですべてのピースがかちりと填まるのがわかった。

「カリス！ウルス！立ちなさい！反撃を……開始するわよ！」

「はは、流石は我らが参謀だ！もう解ったか！」
「なんだか解りませんが、従います！」
私が叫ぶと、二人ともキチンと返してくれた。
――これなら、何とかなるかもしれない！――
「反撃か、なにか良い打開策を見つけたか？悪いが、平凡な策は見飽きているぞ」
今だ余裕綽々なルビオールはその立ち姿のまま、挑発してくる。
「さっきとは違い幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）は常時展開に変えてある、さぁ……どうする？」
「関係ない！【散】！」
まず、カリスの水の爪を維持している【制圧】を解除する。
「アニー！？」
「いいから！【集】！【縮】！」

続いて”あるもの”をカリスとウルスのデバイスに集め、縮圧で圧縮
「【制】！」
【制圧】で以ってそれを固定する。
「それで、【加】！」
急激な加圧、それは地面に叩きつけられ粉塵を舞わせる。
「煙幕か？無駄なことを」
「さぁ？どうでしょうね？……二人とも！準備は完了！そこで余裕こいてる高飛車なバカに一撃繰れてやりなさい！」
――準備は、本当にこれで終了。後は実行するのみ！――
「なんだか解らんが……攻撃すりゃあいいんだろ！」
「いきます！！」
「防御は全開！衝撃に備えてね！！」
「「了解！！」」
そして、二人が跳ぶ。
「やはりバカの一つ覚えか、それでは勝てん」
そして、二人の攻撃が、ルビオールに迫る。
「これで！」
「終わりだ！」
二人は、武器をぶつけた。

――――――――――――――――！！！！！！！！！！

強烈な光が、その場を支配する。
その後、尋常じゃない轟音が響き
そして、その場を燃やし尽くした。

”粉塵爆発”
極々小さな粒子の粉塵に着火することで起こる爆発のことだ。
詳しい説明は非常に長くなるため省くが、そのエネルギー量は下

手をすればダイナマイトをも超えるほどである。
アニーは、二人のデバイスに空気中の”水素”を圧縮した。
水素は可燃性の非常に高い物質だ
それ故、デバイス同士がぶつかった事によって起こった小さな火花を
瞬間的に大きな炎へと変えたのだった。
そして、それは【加圧】によって舞っていた砂に着火
大規模な粉塵爆発が起こったのだった。
「幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）は確かに強力な魔法封じになる、けど間接的な自然攻撃はどうかしら？」
「あぁぁぁ！いってぇ！アニー！手加減って物を知らんのか！？」
「これは流石に堪えます……」
すまし顔で言うアニーと、爆発によって弾き飛ばされ戻って来たカリス、ウルスは文句を言う。
「しょうがないでしょ？これくらいしか思いつかなかったのだから、それにカリスがヒントをくれたんじゃない」
「俺は別にこんなことを提案したんじゃない！」
油断はしていない、警戒はしている
それでも、勝ったと思った。

だが
「ふむ、さすがにこれは堪えるものがあるな……だが、その程度だ」
「……流石にここまでくると化け物ね」
まだ、ルビオールは倒れてはいなかった。
「そもそも、俺は希少技能保持者（スキルホルダー）であると同時に魔導師だ。非魔法攻撃で俺にダメージが入るとでも？」
「……アニー、次は？」
「気合、じゃだめかしら？」
「結局は精神論になるんですね……」
噴煙が晴れ、悠々と立つルビオールは、やはり無傷だった。

「出鱈目な！……まぁ、やるしかねぇかんな」
「はい、精神論でも強攻論でもやってやりますよ！」
「それじゃ、消耗戦に移行するわよ！」
「「おう！！」」

それからは、泥仕合と言えた。
攻撃しては弾き返され
攻撃しては弾き飛ばされ
攻撃しては、消耗する。
千日手にもならない泥仕合。

「どうした？もう終わりか、管理局」
「いったい、どういう魔力量してんだあの野郎は……！」
「魔力的には、エース・オブ・エースに匹敵する、らしいわよ？」
「それは……厳しいですね……」
三人は、息も切れ切れにそう悪態をつく。
対してルビオールは余裕の表情を崩さない。
「なにか、なにかないか……？」
「さぁ、どうしたんだ管理局？終わるなら、わかっているな？」
「んの野郎！」
――３０秒――
「あ……？」
「誰？」
――３０秒だ、それだけ持たせろ。そしたら終わらせてやる――
「……聞こえた？みんな」
「あぁ、たくさ。つくづく俺たちはヒーローになれねぇよな」
「でもそれが僕たちですよ」
「んじゃ、気張っていこうか！」

「次はどんな駄策を見せてくれるんだ？」
「うっせ！タウティ！形質変化［氷］、氷塊爪（アイシクル・ブレイズ）！」
「魔力集中、集中、集中……形成、斬破刀！」
「【解】！【散】！」
三人はそれぞれ魔法を行使する
カリスは最初に使った爪を氷で再現する。
ウルスは得意の魔力操作で魔力を集中、杖（ちなみにデバイスだが局員用の汎用ストレージデバイス）を元に三尺はありそうな斬破刀を作り上げる。
アニーは二人に【解圧】と【散圧】を化して防御の負担を減らす。

ここまでで、約１５秒。

「往くぞ希少技能保持者（スキルホルダー）、魔力の残りは十分か？」
「アニー、時間稼ぎはいいけど……別にあれを倒しちゃってもいいんだよね？」
「構わないわよ！思いっきりやりなさい！」

残り、５秒。

「あああぁぁぁぁ！！」

４秒

「うわああぁぁぁぁ！！」

３秒

「いっけぇぇぇぇぇぇ！！」

2秒

「結局莫迦か、幻惑の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）」

1秒

――よくやった、終わりだ――

0。

第十三話　ｖｓ幻惑の庭園（後書き）

次回は暇零さん！
よろしくお願いします！

第十四話　決着、しかし代償は大きく（前書き）

三週目？　早いですねぇ。
とにかく暇零行きます。浅漬急増故のクオリティ＆考証レベルの低さはお見逃し下さいませ。

第十四話　決着、しかし代償は大きく

さながら艦砲の直撃の如き派手な爆発。カリス、ウルス、アニーは瞬時にその視界を失い、前衛となっていた為にほぼ爆心地に位置していたカリスとウルスは、共に聴覚を失いかねないような轟音にも襲われていた。

煙が濛々と立ち込める中、カリスはその中心に二人分の人影を見た。一人は今まで自分達が対峙していた敵、ルビオールである事は確かなのだが、もう一人、『黒』の装束を身に纏う青年の姿に心当たりは無い。――否、僅かばかりではあるが、その顔は、実際には会った事は無いものの、どこかで見たような記憶がある。

その青年は、逆手に持つ剣をルビオールの喉元に突き付け、余裕といった調子で止まっている。対するルビオールも、どこか自分にまだ勝機は残っていると言わんばかりの態度でそれを甘んじて受けている。

「この状況から、逃げられるとでも思っているのか？」

「そうでなければ、俺もこの様な事にはならん。貴様を屠っているだろうよ」

ほざけ、と黒の青年の口が動き、その真っ赤な瞳に怒りが宿る。

その後は、凄絶なものだった。軍用犬の如く、一撃一撃が必殺を期した神速の剣戟がルビオールに襲いかかり、しかしルビオールもそれを体捌きもしくは『幻影の庭園（マスター・オブ・イリュージョン）』で悉く回避していく。まるで、青年の振るう切っ先の行方が読めているとでも言わんばかりに。

「怒りで剣が単調になってる。いくら速くても、あれじゃ……！」

故郷では狼と戯れていた故か、動体視力の高いウルスが声を上げる。しかし、彼以外には――特に、本来なら直接戦闘は不得手なアニーは――、青年の攻撃を分析する事はおろか、戦況についていくのも精一杯となっていた。

もう何分もそれが続けられただろうか、大上段から青年の剣が振

り下ろされようとしているまさにその時、異変は起きた。
金属同士が派手にぶつかり合うような甲高い音と、それに見合った様な火花が飛び散る。しかし青年の剣はどこにも当たっている訳ではなく、強いて言うなれば、『空間に接触してその動きを静止させられていた』のだ。
「何……！？」
「どうしたと言うのだ、これは。――姿を見せろ！」
困惑する青年に対して、ルビオールの反応は早かった。剣の止まった『空間』に向かって咆え、そして空間は変化する。
まず、空間が歪む。背景が奇妙に偏向され、その偏向されている空間は丁度『人』の形になる。そして、剣と接触している面から、次第にその正体を顕にしていく。
やや痩せたような体躯に、毛先だけ紅い長髪、青紫の瞳。それ等の情報を統合した場合、導き出される答えはただの一つ。
「ナオヤ……！」
「これも幻術魔法のちょっとした応用だ。……あまり使いたくはなかったがな」
どこか超然とした態度は、いつもの通り。右手で剣を止めている、というある意味異様な行動も、一向に気にする様子は無い。
「ナオヤ・イグニス。貴様……」
「コウスケ・タカツキ……オリジナルなのか？　とにかく、この件は情報部（おれたち）のヤマだ。部外者（よそもの）が首を突っ込むな――ッ！！」
自己主張の中でもきちんと自分達の立場を理解し、頭に血が上っている様に見えながらも偽装は怠らない。そんな言葉の直後、ナオヤは青年――コウスケを弾き飛ばす。右手――それも、素手で刃を物ともせずに押し退ける。そんな不条理に一瞬コウスケは反応を遅らせ、ナオヤの攻撃を直撃させてしまう結果となった。受け身を取りつつ、どこかにサポート要員を配置していたのか、コウスケは突如展開された転送ポートへと入ってその姿を消す。
そんな内輪もめとも取れる騒ぎの最中に、ルビオールが攻撃して

こなかった事が幸いだった。彼にしてみればむしろ、ナオヤがここで体力を徒らに消耗すれば好都合と思っているのかも知れない。
しかし、ナオヤはそれでも表情に変化を見せない。
「カリス、ウルス、魔法に頼らない直接攻撃は出来るな？　アニー、魔力昇圧用意。――目に物見せてくれよう」
３人の答えを待たず、矢継ぎ早に指示を出すナオヤ。戦術プランの構築は既に彼の脳内では完了しているらしい。
「事前に簡単なレクチャーくらいはしてくれても……［昇圧］！」
《同感。いくら何でもぶっつけ本番はキツいよ……》
ナオヤの実行せんとしている事を理解したのか、アニーとタウティ、２人――と言うより、１人と１機と表現した方が適切か――の不平を浴びながらも、ナオヤはアニーからのサポートを受けて着実に魔力をチャージして行く。
「チャージなどさせるものか――！」
当然の様に、低く唸りながらルビオールが突撃をかける。彼の見せる、初めての攻勢。彼もまた、ナオヤの手札（カード）を読んだのかも知れない。
しかし。
「Ｂｅｉｓｔａｎｄ　ａｔｔａｃｋｅ，　Ａｉｎｓｅｌ．　Ｓｔｕｒｍ！」
『白虎閃蹴撃！　だぁーらっっしゃぁぁぁぁぁっ！！』
ナオヤの鋭い声と共に、女性の叫びが空を切り裂く。それと共に天から降って来た蹴りがルビオールを襲い、ルビオールは退避を余儀無くされる。音速こそ超えてはいなかったものの、彼女の垂直落下は音声とほぼ同時であり、直撃していればと言う想像はルビオールに初めて驚愕させるにはやや過ぎたる物であった。
「っ……誰だ！？」
『ちゃす、ナオヤのカノ――』
「あぁ、俺の融合騎、エインセルだ。心配する事は無い」
態勢を立て直しながら問うルビオールに、女性――融合騎、エイ

ンセルとナオヤが時間差で答える。ナオヤの放った言葉の内容に不満だったのか、エインセルはやや不機嫌な表情になってはいたが。
「ＯＫ，ｗｅｌｌ ｔｈｅｎ．．．ｈｅｒｅ ｗｅ ｇｏ．」
ナオヤの言葉と共に、彼の手の内に一冊の本が乗る。やや古そうなマホガニー色の表紙には金の糸で六枚の翼を持った女神が刺繍されており、その出自の特殊な事が伺える。それはナオヤの指示を待つ事無く自然にページが捲られ、魔法を探り当てる。
「あれも魔法、これも魔法……ではな。弱点を知るのが極めて簡易になり、そこを突かれれば呆気ない程に脆い。それを身をもって知るが良いさ」
《Ａｎｔｉ Ｍａｇｉｌｉｎｋ－Ｆｉｅｌｄ，ｍａｘｉｍａｌｌｅｉｓｔｕｎｇ.》
対魔力結合力場、直訳するとそうなる魔法の行使が宣言される。それも、本――魔導書型マス・ストレージデバイスの言葉を信じるならば、最大出力で。その魔法の意味する所をその場にいる全員が知った直後、ナオヤを中心に空間が波打った。
ＡＡＡランク相当の対魔法防御用フィールド系魔法、管理局員にしてみれば半年前の悪夢の再来。ジェイル・スカリエッティの手駒であったガジェットドローンの用いていたＡＭＦこそが、ナオヤの発動した魔法の正体であった。
しかし、カリスのデバイスに集められた氷の爪も、ウルスの生み出した巨大な剣も、その魔力の連結を解かれる事は無い。
「魔力量も技量も僅かなのでな。こういう魔法は凝縮制御して初めてモノになる」
「不覚……！」
手首足首のみを除き、ルビオールはやや暗い色をした球状の結界内に閉じ込められている。御丁寧にも、少しだけ空間から露出するその四肢の末端にはきっちりとバインドが展開されており、ルビオールの動きを完全に封じている。
「俺個人としてはチェックメイトだと思うのだが、如何かな？」

稀少技能を発動しようにも、それが魔力を用いる物である以上は、ＡＭＦ――それも、可視領域にまで達する程の濃度の物を突破せねばならない。そして、ルビオール自身は例えランクＳ＋程度の魔力があろうが、ブラスターシステムも無ければカートリッジも無い。更にそれまでの戦闘で消耗を余儀無くされていた為に、今の彼には最大値の半分程度の魔力しか残されていなかった。その様な状態では、この１００％超クラスのＡＭＦを突破しようが無い。それを見込んで、ナオヤの降伏勧告は発せられていた。

しかし、それが薄氷の上を渡るが如き博打に過ぎない事に、アニーは気付いてしまった。いくら昇圧したとしても、所詮はＢ＋の実力しか持たない者が継続的にＡＡＡ級魔法に魔力を注ぎ込み続けたとしたらどうなるか。その先の想像は容易かった。指一本動かす体力すら注ぎ込んで維持されているＡＭＦは、ナオヤの命すら奪いかねないのだ。

ナオヤの眉間に縦皺が刻まれ、頬を汗が伝う。彼自身の限界が近い事は、明白となっていた。

「言葉の割には余裕の無さが目に見えているぞ。……いや、余裕の無い事が解っているからこそ、こうして早く片を付けようとしているのだな？」

だから早く攻撃しろと、ナオヤの目がカリスやウルスに告げている。しかし、２人は攻撃する事が出来ない。ルビオールの稀少技能を封じる為に展開したＡＭＦが裏目に出て、彼等の魔法攻撃すら不可能にしてしまったのだ。カリスのデバイスに纏われた氷の爪も、ウルスの創り出した魔力の剣も、魔力を必要としている以上はＡＭＦの格好の餌食になってしまう。そればかりか、ＡＭＦがそれ等に対して働いている時は、ルビオールに対しての効果が薄まってしまうかも知れないのだ。

《だから、魔法じゃなくても良いんだって！》

「直接攻撃しろと言っているだろうが、この……！」

タウティとナオヤ、両方から厳しい言葉が飛ぶ。その言葉で、カ

リスはようやく気付いた。
「あぁ……やってやるさ！　ウルス、合わせろ！」
「はいっ！」
　カリスの声で、ウルスもデバイスを通常の杖にまで戻す。カリスも集められた氷を解除し、手に装備されるのはデバイスのみの状態になる。そのままそれぞれの得物をもう一度保持し直し、今なお拘束され続けているルビオールに向かって突撃を開始した。
「バインド解除。……直撃させろ、２人共！　全力で吹っ飛ばせ！！」
「おらぁぁぁぁっ！！」
「はぁぁぁぁっ！！」
　ルビオールにかけられたバインドが解除され、カリスとウルスも同時に己の武器を振り抜く。当然ながら、受け身も防御も許されず、ルビオールはその攻撃を直に喰らい、バインドによる拘束も無いが為に、
宙を舞う羽目になった。
　いや、バインドが無いだけマシだったかも知れない。２人分ものフルスイングは確実に正中線を捉えており、ルビオールの体は５ｍ程の飛距離を出している。もし吹っ飛ぶ事でのダメージ軽減が不可能であれば、骨の１本や２本は折れていたかも知れない。
　とにかく、これで決着。ルビオールが再び戦闘可能な程に体力を残しているようには見えず、地面に倒れ伏したままナオヤから再度のバインド拘束を受けている時点で戦意も無いと見て良いだろう。
「しかしナオヤ、意外だったなぁ。まさか情報系だけじゃなくて、戦闘にも対応してて、しかもＡＭＦだろ？　流石に驚いたぜ」
「本当ですよ、あんな技術を持っていたなんて、今までどうして黙っていたんですか？」
　戦闘終了という事で緊張の解けたカリスとウルスが、ナオヤに駆け寄る。その顔は明るく、ナオヤの魔法戦闘能力に対しての感想を口々に述べていた。

それを傍で聞きながら、アニーは一抹の不安に駆られる。使用したデバイスがいかなる物かは不明だが、本来ならばナオヤの実力でＡＭＦを展開出来ると言うのは筋違いも良い所だ。ランクにして５段階、その圧倒的な差を埋めてまで放たれる魔法の反動が、大きく無いわけが無い。そこから更に、バインドまで使っているのだ。ただでさえ余裕の無い状態から、オーバーキルとすら形容出来る魔力の消費。それが如何にナオヤを消耗させているか――。

「おい、ナオヤ？」

「ちょっと、大丈夫ですか！？」

そこで、アニーの思考の海へのダイブは半ば強制的に中断される。

ナオヤの体は、地面に倒れていた。

第十四話　決着、しかし代償は大きく（後書き）

次回、ムーギネーター様がお送りします。

第十五話　過去の記憶（前書き）

さて、今回は急遽私――混沌の使者がお送りします。

大した出来ではないと思いますが、よかったら覗いてってください。

では、どうぞ♪

第十五話　過去の記憶

なに……？　いや……なんで……？　この気持ち……。
ナオヤが倒れたことで、アニーの頭の中は、ぐちゃぐちゃになる。
不安が現実となったことで、思考が追い付かない。何が起きたのか理解できない。理解したくない。
アニーは膝から崩れ落ちるように、膝を着き、顔を覆う。
「い……や……ナオ……ヤ……ナオヤナオヤナオヤ……！　ナオヤーーー！！」
もうわけがわからず、ただ、ナオヤが倒れたという事実に泣き叫ぶアニー。
「ちょ――ッ！　落ち着けアニー！」
「いや！！　いやーーー！！」
「アニーさん！！」
いつもの冷静なアニーの取り乱しように、カリスとウルスは慌てて、アニーを宥めにかかる。
そうしながら、医療班を呼び出した。
だが、アニーはまったく落ち着きを取り戻す気配がない。
そんな様子を、ナオヤはぼやける視界で見つめる。
――変わらないなアニー……どんなに成長しても泣き虫なところは……。
ナオヤにとって、アニーの泣き顔を見るのは、初めてではない。
何度もある。そう何度も、何度も。

泣き虫が無くならないアイツの泣き顔を何度も見てきた。
お前は知らない……お前と、この内部監査部で会って、俺がどれほど安堵したか……。お前が自分の道を歩んでいるのを知って、元気そうな姿を見て、どれだけ安堵したか。俺の選択が、間違っていたとしても、お前はこうして元気でいる。それだけで救われたようだった。
８年前のあの日から、ナオヤとアニーの道は途切れた。
もう、交わることはないはずだった。
それでも、俺はこうしてお前に……。

◇◇◇

お見通しなんだから」

涙を拭いたアニーは、俺に人差し指を突き出し、前かがみになって、自信満々に言ってくる。

「ふっ……」
「何がおかしいのよ？」
「お前の顔」
「ナ・オ・ヤァァァア！！」
「ははは！」
「わ・ら・う・なぁあ！」

ポコポコ叩いてくるアニーを俺は笑いながらあしらう。
どうやら、元気も出たようだ。まったくいちいち面倒な奴だ。こうでもしないと、元気が出ないんだからな。
まあ、ここまではいつもの日常で、俺もそれなりに幸せな人生を送っていただろう。
だが、そんな日常もあの日を境に崩れ落ちた。

その日は俺の誕生日だった。
秋の少し冷たい風を浴びながら、街の中をアイツと一緒に歩く。
毎年の誕生日プレゼント選びだ。

「毎度のことだが、ちょっとはサプライズみたいな、趣向を凝らしたことをしようとか思わないのか？」
「どうしてあなた相手にそんなことしなくちゃいけないの？」

コイツ……！
素で訊いてきてるのが、軽くムカつく。まあ、別にこんなのは、

俺たちの……なんだ、義務というか習慣というか……とにかく、特別なもんじゃないが。
それでも、こう、もうちょっと反応してもいいだろ。
はぁ……、と思わず、ため息が出た。
アニーのやつは、不思議そうな顔でこっちを見ている。
俺はとりあえず、その態度にムカついたので、頬をこねくりまわす。

「にゃ！？　ふぁにふふのふぉ！？」
「うるさい」

アニーは多少抵抗するが、俺の力には叶わず、為すがままである。
とりあえず、1分間ほどこねくりまわして、解放してやった。ふ～、少しはすっきりしたな。
解放されたアニーは、赤く腫れた頬を痛そうに押さえていた。

「う～、バカナオヤ～」

アニーは半眼を作り、俺を睨み付ける。そんな顔したところで、俺には敵わないがな。

そうして、俺たちは、買い物をする前に、金を卸そうと銀行に向かった。
その間も「何が欲しい？」とか訊いてくるのだが、俺は決まって「なんでもいい」と返す。
そうすると、アニーは「それが一番困るのよ」と嘆息している。
まあ、そう言われても、本当になんでもいいのだから、困られても困るが。
そんなこんなで10分後。銀行に着いた。
着いたは着いたのだが……この状況って……。

俺とアニーが銀行に入り、少ししたら、急に覆面を被った集団が押し入ってきた。どうやら、銀行強盗のようだ。
まさか、こんなところに出くわすとはな……まあ、管理局員（訓練生）としては、放っても置けないか……。
数は5人。1人が金を詰めようと受付員に攻め寄っている。ソイツの近くにさらに1人。他は客の牽制。
問題ないな……。これでも、俺はエース級の魔力量はあるしな。
とりあえず、他に聞こえないように、小声でアニーに話しかける。

「アニー、お前は下がってろ。俺が片づける」
「ちょっと待って。危険よ」
「大丈夫だ。俺の実力は知ってるだろうが」
「でも……」

そこまで話したところで――

「おい！　そこで何を喋っている！！」

1人が手に持つデバイスを向けて、俺とアニーに言い放つ。
大した実力もない野郎どもが、調子に乗るな……！
俺はその瞬間、床を蹴り駆けだす。強盗犯の1人は、慌てて対応しようとするが、遅い！

「がはっ！？」

ソイツの鳩尾に拳を打ち無力化した。
それに気づいた他の強盗どもも、デバイスを構え始める。

「がっ！？」

その瞬間、その内の1人が急に吹き飛び、壁に激突し、ズルッと崩れ落ちた。
全員が吹っ飛ばした張本人を探すために、俺から視線を外す。
その隙に、俺はすぐさま1人の懐に飛び込むと、ソイツを昏倒させる。
更にもう1人が盛大に吹き飛んで、気絶した。
それを為したのは、俺の融合型デバイスである。名をエインセル。性別は女。等身大クラスの融合騎で、まあ、世間的に見たら、モデル並みのスタイルだ。俺にとっては、言動がアレなんで、正直“だから？”といった感じなのだが。ちなみに、コイツは時空間の異なる位相にいるので、ほぼ認識不可能だ。
何はともあれ、犯人は早くもあと1人となったわけだが……。

「降伏したらどうだ？」

とりあえず、良心的にそう提案してみる。
だが、犯人の方も相当血が上っているのか、全然デバイスを下ろす気がないようだ。
やれやれ……。

「へ……へへ……終わりだ……てめぇらのせいで……終わりだよ！」

犯人は焦点の合わない目で、俺たちを睨みつけ、デバイスを突きつけた。アニーのいる方に。

「な――っ！」
「ひゃはは！　てめぇらのせいでぇぇぇ！！」

犯人から砲撃が放たれる。アニーは魔力を持たない。殺傷設定にしてあるこれを喰らったら……！　俺はその瞬間、その場を駆け出

した。

「キャアアアア！！」

「アニー！！」

俺は右手を伸ばし、アニーの前にシールドを展開。即席でどこまで守れるか……！

砲撃の閃光で辺りが、何も見えなくなる。

くっ……！　右腕に焼け付くような痛みが奔る。だが、そんなことを気にしている場合じゃない。

「アニー……無事……か……？」

視界が安定してきて、相手の姿が見え始める。

俺が見たのは、怪我一つなく立つアニーの姿。だが、その顔は怯えというか、驚きというのか、とにかくショックで歪んでいた。

不思議に思ったが、アニーが無事なのに安心する。そこで、更に右腕に痛みが奔り、右腕を見た。そこには……何もなかった。

ちっ……！　どうやら、即席で作ったシールドでは、完全に防げなかったらしい。俺の右腕はごっそり消え去っていた。

アニーはそのショックからか気絶し、その場に倒れた。俺はそれを左手で支える。

「アニー……」

その後、管理局員が来て、犯人は全員捕まった。ちなみに、砲撃を撃った犯人は、エインセルにボコボコにされていた。

それから、４時間後。

日が沈み始めた。そんな時間。俺は右肩から仰々しく、包帯を露わにさせながら、アニーの眠るベッドの横で立っていた。
相当、ショックだったのか、未だに目を覚まさない。そのことは心配だが、医者も特に外傷はないというし、時間が経てば目を覚ますだろう。
だが今、気にしているのはそのことではない。

「エインセル、いるか？」
『はいはい何かな？　愛しのダ――』
「訊きたいことがある」

俺がふざけたことを言う前に、封殺したら、エインセルは不満そうに唇を尖らした。
俺はそのやり馴れたやり取りを無視し、本題に入る。
「“書記の術（アルス・ノトリア）”の魔導書の管制人格である貴様に訊く。人の記憶の一部分を消すことは出来るか？」
『……へ～、またなんで？』
「訊いてるのは俺だ。出来るのか？　出来ないのか？」
『内容によるかな……私にできるのは記憶の上書きだから』
「記憶の上書き……なるほどな。それでいい。出来るんだな」
『リスクがあるけどね』
「なんだ？」

エインセルは、俺の前に人差し指を一本立てる。

『まず一つ目、上書きは消すとか忘れるとかと違って、何かの拍子に記憶が蘇るなんて、そんな都合のいいことはないよ』
「かまわん。その覚悟はしている」

エインセルは、うん、と頷くと次に薬指を立てる。
……よくそんなに綺麗に立つな……、とどうでもいいことに感心しながら、エインセルの話は続く。
『二つ目、あなたの魔力の絶対量が減る。あなたの力を使うことになるからね』
「ああ」
俺が即答すると、エインセルは、はぁ、とため息を吐き、親指を立てる。
本当にどうでもいいが、その指の立て方は何なんだ？
『最後に三つ目、魔法――というより、私――アルス・ノトリアを使う際に、障害が生じる』
「そうか」
俺のどこまでもどうでもいいという態度に、イラついたのかエインセルは、ギリッと歯ぎしりを立てると、俺の目を見据える。
『私に訊いてきたんだから、私も訊いていいよね？　どうしてその子のためにそこまでするの？』
エインセルは傍で眠るアニーを指差し問う。
まったく、俺は別にコイツにするなんて言ってないんだがな。まあ、コイツにやるんだが。
俺は頭を掻いて嘆息し、このままでは納得しそうもないので、理由を話す。
「簡単なことだ。俺がコイツのことをよく知ってるからだよ」
『答えになってない……！』

「なるさ」
『なってない！　大方、この子から、あなたについての記憶のすべてを上書きさせようとしてるんでしょ！　今回のことが関係してるんでしょ！』
「流石だなエインセル。伊達に何年も俺の傍にはいないか」
『話を逸らさないで……！』
「理由はさっき言った通りだ。行くぞ」
『う～……どこへ……？』

エインセルは一頻り俺を睨みつけると、移動する俺にそう訊いてきた。
決まってる。

「ソイツの両親のところだよ。自分の娘の記憶をいじるんだ。言わないといけないこともあるし、説得しに行くんだよ」
『……ふんっ！　ナオヤのいじっぱり！』

どうやら、やっと納得したらしい。いや、納得はしてないか、了承したみたいだ。
それから、アニーの両親のもとに向かう。
アニーの両親にすべての経緯を話し、そしてあの話をした。当然、俺とアニーは幼馴染で、俺はアニーの両親とも仲がいい。だから、否定した。そんなことしなくていい、と。
だが、俺は必死に説得した。娘――アニーの危険性について交えて。
アニーの両親は、納得はいってなかったろうが、そこまで言うなら、と了承してくれた。
ありがとうございます、と感謝を述べ、最後に、俺のことは忘れてください、と言い残して、アニーの元へと向かった。アイツの記憶を消すために。

時間にして、３０分弱だろうか。そのぐらいで、再びアニーの病室に戻ってきた。
深呼吸をする。この扉を開ければ、俺はアニーの記憶から、俺を消去しなければならない。そうすれば俺は、アニーとは完全な他人だ。
そして、万に――いや、億に一つの可能性である“思い出す”という事が起きないように、俺は違う街に行かなければならない。いや、違うか。ただ、俺が怖いだけだ。俺との記憶が失われたアイツと一緒にいるのが。
なんにしても、もう会うことは二度とないだろう。まだ、少し躊躇いが残る。
しかし、やらなければならない。なにより、アニーのために。
もう一度、深呼吸をし、まだ寝ているであろうアニーの病室を開けた。
そこには――

「い……ない……？」

そこにアニーの姿はなかった。
起きて、トイレか何かに行ったのか……？
いや、まさか……俺とエインセルの話を聞かれてた……？

「ちっ……！」

俺は急いで病室を飛び出す。
病院内の看護師などに、アニーの特徴を話し、どこに行ったか訊きだす。
どうやら、外に出てったらしい。時間にして、１０分くらい前のことみたいだ。

話を聞いていたなら、少しおかしいが、病室で俺の言ったことについて、いろいろ考えていたなら、ある程度納得できるか……。
なんにしても、そこまで時間は経ってない……！　まだ、その辺にいるはずだ。

「エインセル！　お前も探せ！」
『やだ』
「な――っ」
『見つかったら、ちゃんと記憶処理してあげるよ』

ちっ……！　その言葉を残して、エインセルは姿を消した。
くそがっ、1人で探すしかないか……。アイツの行きそうなところは……。
そう考え、1つ思い浮かんだ。アイツが訓練で、逃げ出した際に、よく泣いていたあの場所。

訓練校のある裏手。そこに辿り着いた俺は、辺りを見回しながら歩く。
すると、そこには、膝を抱えて、泣きじゃくる姿があった。
俺はソイツに近付いていく。ソイツはまったく気づくことなく、泣きじゃくる。
まったく本当に泣き虫だなコイツは……。

「また泣いているのか」
「！！？」

俺の声に、ソイツは逃げようと立って走ろうとするが、俺はすでにソイツの相当近くにいたので、逃げようとするその腕を掴み、こちらを向かせる。
それは予想通り、アニーだった。顔は涙と鼻水が、垂れていて、

ひどい顔だ。目も赤く腫れ上がっている。
こんなになっちまうとは……少し想定外だな。ここまで、動揺するとは……。

「なんて顔してんだよ」
「ヒクッ……ナ……オヤ……が……」
「まず、その顔を拭け。ほら」

ポケットからハンカチを取り出し、アニーに渡す。
アニーは素直にそれを受け取り、顔を拭く。
どうやら、まだ少し泣き止まないみたいだが、少しは落ち着いたらしい。
何でコイツは、こうすぐ泣くかな……せっかくの決心が揺らぐだろうが……。

「落ち着いたか？」
「ぐす……うん……」
「はぁ……それで、俺たちの話を聞いてたのか？」

俺がそう訊くと、アニーの目からまたぼろっと涙が溢れ出した。
やっぱり、聞いていたみたいだな。
それにしても、コイツのこんな状態はホントに初めてだな。

「どう……して……なん……で……」

この場合、なんで記憶を消さなくてはいけないのか、ということだろう。

「わた……しは……忘れ……たくない……！」

俺はそれに目を伏せる。つまりは、考えを改める気はないという意思表示。
アニーはそれに気付いたのか、俺に抱き着いてくる。
「お願い……！」
その懇願は、俺の決心を大きく揺らがす。
だが、それでも駄目なんだ。このままじゃお前は……。
「……なぁ、アニー、俺の右腕のことどう思った？」
アニーの肩がピクッと動く。
コイツのことだから、ずっと気にしていたはずだ。
それこそ、考えすぎなほどに。
「ごめん……なさい……！　私のせいで、あなたの腕が……。でも……！」
アニーは顔を上げて、俺を見る。
俺はその瞳を見て、確信した。
やはり、コイツの記憶から、俺を消さなきゃいけない。そうじゃないとコイツは……。
「だから、あなたの助けになりたいの！　私のせいだから……！成績優秀なあなたの未来を潰すような真似をしてしまったから……！　だから……！」
「それなんだよアニー」
「え？」
お前はそう考えると思ったよ。

そして、何を言っても、その考えが覆ることがないのも知っている。何年も一緒にいるんだ。コイツがどう考え、どう行動するかなんて、すぐわかる。
だから俺は……。

「お前の未来を縛りたくない。お前はきっとこの先、俺を中心に生活していく。そしてそれは、お前の未来を潰すことになる」
「そ……れは……」
「ごめんなアニー……」
「ナ……オ……ヤ……」

アニーの意識はなくなり、俺は崩れるその体を支えた。
アニーの意識をなくしたのは、俺の前に立つ女。

「すまないなエインセル」
『もういい。それより、本当に後悔しないね。ナオヤに何が起こっても』
「ああ」

俺は気を失ったアニーを運びだし、病室のベッドに戻した。
これで本当に最後だ。俺は惜しむように、アニーの頭を撫でてやる。そうすると、アニーは安心したような表情を見せる。
それを見て、思わず笑みがこぼれた。

『……やるんでしょナオヤ！』
「あ、ああ。よしやるぞ」
「『ユニゾン・イン！』」

俺とエインセルの身体が重なり、１つになる。
ユニゾンが成功すると、俺の顔は中性的になり、身体も女性っぽ

い細身になった。
これは、俺とエインセルの融合相性があまり良くないためだ。つまりは若干、エインセル寄りの身体になっている。
俺はアニーの頭に自分の左手を乗せる。
こうなったのは、すべて俺の甘えと油断のせいだ。お前のせいじゃない。お前は強い奴だしな。泣き虫だけどな。
一瞬、そうアニーに言ったときのアニーの怒り顔が、頭に浮かび、思わず微笑が洩れた。

――これでお別れだアニー。俺がいなくても頑張れよ。

病室を閃光が包み込む。
閃光が止み、どうやら成功したらしいことを確認して、アニーの両親を呼びに病室を出た。
妙な身体の違和感を感じながら……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ん……？」

アニーは見知らぬベッドで目を覚ました。
天井が白い。自分の部屋ではないらしい。

「起きたかいアニー」
「お父さん……」

ベッドの横には、アニーの母と父の姿があった。
そこでアニーは、身体を起こし、部屋の全体を見つめる。

「ここって……病室……？　そうだ……私、確か銀行強盗に撃たれそうになって……それで……」

そこまで思い出し、バッと父と母の方を向き詰め寄る。

「私を庇った“管理局員の人”は大丈夫だった！？」

“管理局員の人”。これほどにアニーの両親に、衝撃を与えたものはなかった。

本当はあまり信じていなかった。そんなこと出来るはずがない、とどこかで思っていたのだ。

だが、この子は“ナオヤ”ではなく“管理局員の人”と言った。つまりは、ナオヤのことは、もう何も覚えてないということなのだろう。

父はそのことに、一瞬目を伏せ、再び顔を上げる。

「ああ、大した怪我ではなかった様だよ」

「よかった……」

アニーは安心したように、胸を撫で下ろした。

それをドアの外から聞いてる者がいた。

ナオヤだ。ナオヤは、どうやら成功したらしいことを確認すると、病院を出て行った。これでもう大丈夫だ。アニー、お前はお前の道を行け。

ナオヤはその後、訓練校の先生やアニーとナオヤのことを知る生徒たちに、片っ端から当たり、俺のことはアニーに話さないで欲しい、と頭を下げに行った。

それも終わると、ナオヤはアニーと一緒にいた訓練校を止め、違う訓練校に通い始める。
これで、ナオヤとアニーの道が交わることは一生ない……はずだった。

あれから8年。
あまり人通りのない路地裏にて。
「あなたがナオヤ・イグニス君ね」
「……」
ナオヤの目の前に現れた女性。ナオヤは目で、誰だ？　と暗に訴える。その目は警戒心を露わにしていた。
女性はそれにも臆することなく、優しげな笑みを浮かべて、話し出す。
「私はアンネ・ルミナリカよ。貴方をスカウトしに来たの」
ナオヤはそのアンネの言葉に、更に警戒心を強めた。何のつもりだ？　と。
ナオヤはあの頃から、もう大した使い手ではない。スカウトされるほどの実績があるわけでもない。
そんな自分をスカウト？　どうやら、管理局員のようだが、何を考えている？
そう思いながら、この“アンネ”という名前で、8年前のことを思い出してしまい、なかなか頭が回らない。
ナオヤは少し苛立たしげに、舌打ちをすると口を開く。
「何のつもりだ？　ルミナリカ一佐」

「あら、私のこと知ってたのね」
「……捕まえた犯人の再犯率が、一番低いことで有名だったな」
「ふふっ、何でかしらね？」
「俺に訊くな」

ナオヤが警戒を緩めない中も、アンネは慈愛に満ちた笑みを止めない。
その笑みは、まるでナオヤの全てを見透かしているようで、更にナオヤをイラつかせる。

「何をそんなに怖がっているの？」
「怖がってる……だと……？」
「ええ、まるで小動物みたい」

ふふっ、と笑うアンネ。
挑発にしか思えない言葉に、ナオヤをまたもイラつかせる。
だが、まだ耐える。
イラついたからと言って、相手をどうにかするなど、そんな三流染みたことをするつもりはない。
とにかく、このアンネが、何故俺を求めるのかを訊かなければならない。
だが、次のアンネの言葉は、そう考えていたナオヤの頭を真っ白にさせた。

「8年前の貴方のしたことのせ――」

アンネがそこまで話したところで、アンネの身体は、グンッと移動し、壁に叩きつけられた。
そのアンネの首は、ナオヤの右腕に押さえつけられていた。

「どこまで知っている？」
「ふふっ、この右腕も貴方の贖罪に因るものなのかしら？」
「……」

ナオヤは無言で、首の締めを強める。
アンネの言葉は、ナオヤの右腕の“義手”のことを言っている。普通の腕にしか見えないが、デバイスの技術を応用した最新鋭の義手である。
それをアンネが知っていた。つまり、コイツは俺とアニーのことを知っている。

「脅しでもするつもりか？」
「そんなこと……するつもりはないわ。ただ……貴方を……救いたいだけ」

どこまでも涼しげで、それでいて慈愛に満ちた表情。
それにナオヤは、気持ち悪い感覚を抱いていた。戦慄と言ってもいい。
ナオヤはアンネに対して、相当な敵意――殺気を放っている。人間とは、相手の敵意に対して、勝手に少なからず敵意を放つように出来ている。
だが、アンネはどうだ？　まったく敵意も何も感じない。そこにはただ慈愛に満ちた表情があるだけ。聖母のような人、と言ってしまえば、それまでだが、ナオヤにとっては、気持ち悪い以外の何物でもなかった。

「お前は……一体なんだ……？」

ナオヤはその気持ち悪さから、思わず手の拘束を緩める。
すると、アンネはその拘束から抜けて、ふぅ、と溜まった空気を

吐き出す。
一息吐いたアンネは、またふふっ、と笑い、言葉を紡ぐ。
「私は私よ。許すことしか出来ない、ただの女」
「……まあいい。本題だ。俺をどうする気だ？」
「どうするって……まるで、私が強制してるみたいな言い方ね」
「実際そうだろう……」
「違うわ。私はあくまで貴方の意思を尊重するわ」
「……いいだろう。どこに配属されるかは知らないが、行ってやる。そこで、貴様のことを見極めてやるさ」
ナオヤはアンネを残し、その場を去った。

第十五話　過去の記憶（後書き）

ではでは、過去を書くだけ書いて、結果をすべてＴＲさんに丸投げします。

頑張ってください！

第十六話　究極の選択（前書き）

お久しぶりのＴＲ、再び暴れて行きたいと思います。

第十六話　究極の選択

「……ん」

ナオヤは目を覚ますと上半身を起こして辺りを見渡す。

「ここはどこだ？」

そこは彼の知る部屋ではなかった。

「その疑問にはこの僕が答えよう」

「ッ！？　お前は！！」

突如響き渡った声に、ナオヤは先ほどまでいなかった場所に立っているコウスケを見て、驚いた表情を浮かべる。

「どうも」

「どうしてお前がここにいる！」

「どうしてもなにも、お前が倒れて心配している他の奴らを強引に帰して、ここにお前を運んだ張本人だからに決まってるだろ」

ナオヤの問いかけにコウスケは、お礼でも言えとばかりに答えた。

「強引にって……お前、あいつらに何をした」

「……転送魔法で巣穴に戻したまでだ」

ナオヤの殺気に、コウスケは意に反さず答えた。

「安心しろ。お前が記憶を封じてまでも守りたい彼女には、何にも

してねえからよ」
「なぜお前が、それを知っている？」
コウスケの一言にナオヤは顔をこわばらせて問いかける。
「いやな、僕には優秀な情報屋がいるのでね、知りたい情報がすぐに手に入るんだ」
「何が目的だ」
にこやかな笑顔で言い切るコウスケに、ナオヤの中で緊張感がさらに高まる。
「目的ね……言うなれば、貴様のおかげで僕の作戦は失敗……これほどの屈辱はない。その仕返しだな」
「まさか、あの夢を見たのはお前の仕業か？」
「ああ、そうだ。情報の信ぴょう性を得るために、お前の記憶を覗かせてもらった。いやいや、なかなかに笑えたぞ」
ナオヤの推測に、コウスケは頷くと笑いながらその過去の感想を述べた。
「もう一遍言ってみろ！」
「何度でも言おう、お前の偽善ぶった過去物語が滑稽で笑えたと言ってる」
ベッドから飛び出して浩介の胸ぐらをつかんでいるにも拘らず、浩介は平然とナオヤを愚弄する言葉を述べる。
「そうであろう？　記憶を消せば相手の為になる？　お前のやっているのはただの自己満足…違うか？」

「そ、それは」

コウスケの言葉にナオヤは返す言葉を失った。
ナオヤのその行動は、アニーを思うが故の行為なのだ。
それを目の前にいる人物が滑稽だと言えば、誰でも怒るであろう。
しかし、それは人から見たらただの自己満足に過ぎないのだ。

「まあ、いいさ。これからもよろしくな、相棒」
「は？」

コウスケの突然の言葉に、ナオヤは目を見開いた。

「僕も昔はお前と同じようなことがあったのだ。まあ、お前と違うのは助けた奴をこの手で殺したことだがな」
「……」

コウスケの言葉に、ナオヤは何も言えなかった。

「相手が自分のせいでダメになるのであれば、いっその事この手ですべてを消すと言うのも一種の報いではないか？　しかも手っ取り早いし相手を束縛から解き放たれる。ま、そんなんだからあの二つ名になるんだけどな」

そんな彼をよそに続けるコウスケの言葉に、直哉は彼の二つ名を思い起こす。

「冷酷な死神、か」
「そう。それでお前には相棒になったのを記念してこれを贈呈しよう」

そう言ってナオヤに押し付けたのは、一本の黒い剣とに何やら文字が書き記されている紙だった。

「何だよ、これ？」

「その剣は普通の剣だ。刺せば場所によっては相手を殺すことが出来る。そしてその紙はどんな術式でも解除できる強制解除の魔法をあしらったものだ」

コウスケの説明に、ナオヤは両手にあるものを見る。

「お前は、記憶を消した奴にその紙で術式を解除し、記憶を取り戻させて話し合いをしてもらう」

「そ、そんなこと――――」

『できるわけないだろ！』と言うナオヤの言葉を遮ってコウスケが口を開く。

「出来ないのであれば、その剣を使って、彼女を殺せ」

「なッ！？」

ナオヤはコウスケの言葉に、耳を疑った。

コウスケは、アニーの事を殺せと言っているのだ。

「だって、話したらダメになるような幼馴染何て邪魔なんでしょ？　だったら消してしまえば邪魔ではなくなるじゃない。まあ、一週間の猶予を上げるから、そのうちに何とかするんだね。ちなみに何もしなければ僕がお前と彼女を消すことになる。まあ、せいぜい頑張るんだな」

ナオヤはこの時初めて目の前の男と自分とは、次元の違う相手だと

言うことが理解できた。

「あぁ、そうだ。ミルドレッド嬢の事だが」

コウスケは扉の前で振り返ると突然口を開いた。

「ミルがどうしたんだ？」

「……いや、なんでもない。せいぜい頑張れ」

しばらく考え込んだ挙句、コウスケはそう言い残し部屋を後にした。

「……どうすればいいんだよ、俺は」

ナオヤの問いかけに答える者は一人もいなかった。

★　★　★　★　★　★

部屋をあとにして数分後

『こんにちは』

「これはこれは、ルミナリカ殿。人に厄介ごとを押し付けて自分日向にティータイムですか？」

目の前に現れた通信画面の先で優雅に何かをのんでいるアンネをジト目で睨みつけながら皮肉交じりに言い放った。

『悪いかしら？　貴方が強制転送してきたみんなを、介抱するのも大変なのよ？』

「……で、あなたに頼まれた風にしてきたが、あれで良かったのか？」

アンネの言葉に、コウスケは話題を変えた。

『ええ、いつまでもあのままではいけないと思ってたのよ。それにしても不思議ね、あなたがこんな憎まれ役を買って出るなんて』

「……ナオヤのあの眼は、昔の僕の目にそっくりだった。僕のような殺人鬼（もの）を作り出してはいけないんだ。そのためであればなんだってするさ」

アンネの驚いた表情に、コウスケは両手を強く握りしめて答えた。彼とて、ナオヤの心情を理解していないわけではなかった。ただ、彼のふさがった傷を開くには荒療治ではあるがああするしかなかったのであろう。それが正しいのかどうかは別としてだが。

『それで、ナオヤの方は？』

「今、妹たちに監視させている。動きがあればすぐに分かるさ」

アンネの問いかけに、コウスケは表情を崩さずに答えた。ちなみにこの監視役を頼むのにもひと悶着あったと言うのはここだけの話だ。

『そう、それじゃあよろしくね』

「了解」

コウスケはそう答えて、通信を切った。

「ナオヤ・イグニス、お前の答え見せてもらうぞ」

コウスケはそう静かに呟きその場から姿を消した。

第十六話　究極の選択（後書き）

すみません、本当に暴れました。
お次は回覧板さん、よろしくお願いします。

第十七話　ナオヤの決断（前書き）

遅れました、申し訳ありません（汗）
今回のシリアス度は１００％です。

では、回覧板出発！

第十七話　ナオヤの決断

コウスケとの通話を切ったルミナリカは紅茶をゆっくりと啜りながら、とある資料に目を通していた。
タイトルに書かれているのは『ナオヤ・イグニスに関する調査書』、ルミナリカが調べたナオヤの全てが書き出されたもの。
そこには当然、ナオヤとフォークスの関係も明確に書かれている。

「相変わらず、面白いことしたわね」

記憶の上書き、義手、転属の繰り返し。
たった一人の少女の未来を縛らないために自らの未来を縛り付けた男の記録。

かっこいいと言えば嘘だ。
――――真実には、幾個の欺瞞が含まれている。

かっこわるいと言えば嘘だ。
――――真実には、助けられている女がいる。

ルミナリカは画面を閉じた。
目の前にはいつの間にかコウスケが立っていた。

「ありがとうね、あなたじゃないと無理だったのよ」
「記憶の上書き、記憶操作に含まれるけど大きく違う禁呪。確かに、あれは普通の人間には治せないよ。僕なら無視する。記憶を元通りにしたら本人の頭は混乱して自壊するだろうからね、最悪植物人間だ」
「そうね」

コウスケの何故と続ける質問を区切ったルミナリカは、今度はコーヒーを用意する。

「大丈夫よ。どうせ何も変わらないから」

「どういう意味ですか？」

「人の関係は魔法じゃ変えられないのよ」

「……僕は帰りますね」

コウスケは何かを言いたげな雰囲気だったが、目の前の得体の知れない聖母のようなルミナリカから距離を置きたくて、話を切り上げ転移してしまった。

残されたルミナリカはただコーヒーを飲み、そして思い出していた。

「あなたがアンネ・フォークスさんね？」

なんの予告もなく脈絡すら理解できないタイミングでルミナリカとフォークスは初対面した。

フォークスは驚いた顔と若干の警戒心を持ちながらルミナリカを正面にして敬礼する。

「陸上警備隊アンネ・フォークス三佐です。約束の日はまだ先だったと思いますが……？」

「あら、ごめんなさい。日を間違えてしまったの、今は暇かしら？」

「はぁ……一応」

「じゃあ今からお話しましょう♪」

そう言ってルミナリカはフォークスを連れて近くの喫茶店に入った。

雑誌に乗るような喫茶店だが、最近あった強盗事件から客足はまばらだ。

その中でも奥の席に座ったルミナリカは対面する席をフォークスに勧めた。

フォークスは敬礼してから座り、居住まいを正す。

「そこまで畏まらなくてもいいわよ？」

ルミナリカは笑って、アイスティーを二つ頼む。

「すいません。性分です」

「なら仕方ないわね」

ふふふ、と笑って見つめられる。

フォークスは目の前にいる得体の知れない上官に警戒心を強めながら努めて平静を取り繕う。

さっきから、ルミナリカから一切の敵愾心を持たれていない。それが自分の性格故か、ルミナリカの性格故かは分からないが、不自然なくらい居心地がいいのは確かなことだった。

だから一刻も早く要件を終えて任務に戻ろうと決めたフォークスは単刀直入に聞く。

「話があるとお聞きしましたが、その話とは何でしょうか？」

「あら？　嫌われてるのかしら？　少しはお話しようと思ったのだけれど」

「いえ、暇とはいえ、すぐに任務に戻れるようにしたいからです」

とっさに取り繕ったが、やはりフォークスはルミナリカのことを良くは思えなかった。
さっきの少し棘のある言葉にも、多少不愉快を持って良いにも関わらず、何の感情も示さずに、ただ受け入れ、許した。
ただ、寛容という言葉を当てはめるには少し異質な感じがする。
強すぎる違和感が異常なくらい自然な空間を不自然に成り立たせている。

「じゃあ先に言いましょう。アンネ・フォークス三佐、あなたに私の部隊に入ってもらいたいの」
「ルミナリカ一佐の部隊に、ですか？」
「そうよ。強制はしないわ。ゆっくり考えてもらってもいい」
「はぁ……。しばらく考えさせてください」
「良い返事を期待しているわよ♪」

簡単に引き下がったルミナリカは続けて、言葉を紡ぎだす。

「もう泣いてないみたいね」
「ッ！？」

それが一体どういう風にフォークスに影響を与えたのか、身を強ばらせ、いっそ殺意でも織り交ぜたらどうなるのかというほどの緊張が走り抜ける。
フォークスはルミナリカを完全に敵とみなした。

「誰からか教えて貰ったんですか？」
「そんな怖がらなくてもいいのよ？　ちょっと調べただけなんだから」

「なら質問を変えます。あなたは私が泣いている時に慰めてくれた人を知っていますか？」

そうだ、フォークスの記憶には自分が泣いている記憶が確かにある。

けれど泣き止む瞬間の記憶がてんでない。

否、あるにはあるが何故かぼやけている。まるで思い出したくない、認めたくないとでも言うように。

ルミナリカはまるでそのあやふやな記憶を知っているかのように見えたのだ。

「そうねぇ、質問の答えはイエスよ。でも、教えるわけにはいかないわね」

「どうしてですか！？」

「簡単なことよ。これは二人の人間に関係する秘密だもの。あなた一人だけに教えるわけにはいかないわ」

相手は一佐、自分よりも経験がある。だから何を言っても言い負かされるのがオチだろう。

なら自分の勝てるところは何か？

フォークスは数瞬の間に答えを見つけ出した。

「ルミナリカ一佐、私と勝負しませんか？」

「何で勝負するのかしら？　私は戦闘はできないわよ？」

「知っています。だから勝負の内容はこうです」

――――所属中にもう一人を探し当てること。

ルミナリカはゆっくりと現実を見た。
部長である自分の机から見える室内には本来いるべきはずの部下達を含め誰もいない。

構わない。管理するのが自分なら、なんでも好きなようにすればいいのだ。
誰であっても何をしても自分だけは誰をも許そうと決めたのだから。

だからこそルミナリカは自分を許すことが出来ない。
何かにおいて自分を許してしまっては、その何かと平行線上にある別の何かを許すことが出来ないからだ。
平行線も別次元も何もかもを許して許して許し尽くすことが、ルミナリカの生き方だ。
だが、それは自分が善だと思う人にとっては別の意味をもつことがある。

善を許されるなら、許された善は、今までその人が信じ続けていた善は、――――悪へと成り下がってしまうから。
故に、自身の善を保つために、ルミナリカを拒絶しようと嫌悪を抱く。

人としては完全に破綻しているルミナリカは奇しくも破綻いるが故にその破綻さえ許容しきれてしまう。
その時点でルミナリカという一個人は大衆から独立した別種の大

衆へと置換しているのだ。

「ふふふ……。さて、勝負は良いところまできたかしらね。負ける気はありませんよ？」

ルミナリカはコーヒーを飲み干す。

あら、美味しいわね。

◇◇◇

そんな状態のナオヤに声をかける人物がいた。
最近出会い、そして現状を一番理解していないであろう人物だった。

そう、ベルカからの何かの因果により現世にたどり着いた、ミルドレッド・マイアルだ。

「任務中だ、ルミナリカ部隊長のところへ戻れ……」
「でも……」

ミルドレッドは逡巡した。
何故なら目の前に立ち、命令してくる上司は明らかに満身創痍な出で立ちだったからだ。
そんな人を放っていくわけにはいかないと、そう考えてしまう。

「……ナオヤさん、無理してませんか？」
「……していない」

答えは長い沈黙の後からきた。
それがどれだけ神経を使ったことなのかは分からないが、ただ、隠しきれていないのは本人にも分かった。

「……大丈夫、だ。俺はいくところがある。だからお前は戻ってろ」
「本当ですか……？」
「約束、だ」

ナオヤは強がりにも笑って見せた。
まだ幾分にも不安が残るミルドレッドだったが、本人がそう言っているのだ。
自分の私怨でここに残るわけにはいかない。

「絶対です！」
そう言い残して走り去るミルドレッドを見送った後、歩みを再開する。
フォークスを探して、歩き続けるのだ。

フォークス、カリス、ウルスの三人は内部監査部の隊舎内部を隈無く捜索していた。
なぜなら突然、コウスケといった魔導士がナオヤを攫ってどこかへ転移してしまったからだ。
そのあまりの早業に後を追跡することすら不可能だった。
でも、この隊舎のどこかにナオヤの魔力反応があることは確か、故に隈無く捜索しているのだが、まるで雲を掴むかのような心地だ。

「ナオヤ……ナオヤ……！」
「ナオヤさん！」
「ナオヤ！」

三人の声が隊舎に響く。
しかしどれに対しても返答はない。

「私はこっちを探すから、カリスとウルスは向こうを探して！」
「「了解！」」

ということで三人というアドヴァンテージを利用して別れて探す

事にする。
フォークスはどこか確信にも似たような気持ちで走っていた。
確実にナオヤへと近づいている感覚がある、その根拠は何もないのだが、確かに近づいていると思えるのだ。
だからそのまま歩いていき、そして道の真ん中に転移魔法陣が開かれているのが見えた。
それは明らかに不自然な場所に展開されており、まるでフォークスを誘うようにそこにあった。

どうしてだろう。
フォークスにはその転移魔法陣が何故ここにあるかなど気にならなかったし、これが良いものか悪いものかも同じだった。
ただ、ここに入らないといけない気がしている。

「入らないと……」

フォークスは足を踏み入れた。
転移魔法が発動する。
周囲の景色が一瞬でがらりと変わる。
そこは、懐かしい場所だった。

そしてそこに、泣いている自分と重なるような格好で、

――――ナオヤ・イグニスがうずくまっていた。

「ナオヤ！」
「アンネか……」

フォークスの声に反応したナオヤは顔を上げる。
目があった。

二人は目を離す事もなく見つめ合い、少しの時間が過ぎた。

「本当は直で行こうと思ったんだけどな……。ちょっと寄り道してしまった」

「大丈夫よ……、私達のために傷付いてくれたのに、心配したに決まってるじゃない！」

「そうじゃない……、そうじゃないんだ……！」

ナオヤは懺悔するように頭を抱え、フォークスに頭を下げた。

「お前は知らないだろうが、俺は覚えてる。俺だけが覚え続けている。それが苦痛だなんて思ったことは一度だって、今だって、未来だって有り得ない！

けど、苦しくない訳がないじゃないか！」

吐き出されたものは何よりも我慢を選んだ男の我が儘とも言える戯れ言。

もちろん、記憶を上書きされているフォークスにはナオヤが何の事を言っているのか、誰のことを覚えているのかは分からない。

けれど、確かに一つ言えることがある。

自分がこんな状態になった時、暖かい言葉を投げかけてきてくれた誰かがいたこと。それだけは確かなのだから。

記憶が曖昧で前後の記憶が全く持って繋がらないが、それでも暖かくなったという結果は揺るがない。

フォークス自身は知り得ないことだが、記憶が曖昧になっているのは、それが変えたくないことだったからだ。

だからこそ、変わったという認識を得ない為に脳が曖昧に変換してから、記憶の上書きをされたのだ。

すると、本来ナオヤがいた筈の場所にいる、まったく赤の他人と

して登場するナオヤのことを認識しないようにしたのだ。
ただ、フォークスは何故という疑問を根底から破綻させられているので、疑問に思う事はない。
未来永劫に。
それはナオヤの望んでいることだった。
――――けれど、ちらつかされてしまった。
可能性というどのような原罪にも勝る不幸（きぼう）に。

それを使わないことなんて、ナオヤにはできない。
覚悟を決めてやったことなのに、たった一回チャンスがあればそれにかけようと思ってしまう。それほどまでに、ナオヤはフォークスの事が……――――――。

ナオヤは手に持った紙を手に取る。コウスケに手渡された絶対を解除する魔法陣。
それを発動させればきっとフォークスの記憶は完全に元通りになり、そして、あの事すらも思い出して……――――――。

「……そうだよな」
「ナオヤ？　どうしたの？」

手に持った絶対を解除する魔法陣。ナオヤはそれを、――――引き裂いた。
まるで過去と決別するかのように引き裂いたのだ。

「アニー」
「な、何？」
「俺はお前が好きだ」
「え？　……えぇ！？」

顔を真っ赤にして後ずさるフォークスを見て、淡い笑みを浮かべたナオヤは、その上で、ナイフを取り出した。
しないなら殺せ、それは誰かと約束した事だ。
だが、そんな約束を守るようなら、自分はこんなにも捻くれないだろうと、そう思う。

「じゃあな、アニー」
「――――――……え？」

ナイフの切っ先が向かう。
その先にあるのは、ナオヤ・イグニスの心臓。
慌てて駆け出すフォークス。
だが後ずさった分足りない。
後ずさっていなかったら届いたかも知れないという距離。
ナイフが、ナオヤの体を串刺しにした。

第十七話　ナオヤの決断（後書き）

次は暇零さんに回したいと思います。
できれば、ナオヤを生かすような奇跡を起こして欲しいです（笑）

第十八話　奇跡の代償（前書き）

暇零です。
あんな無茶振りされた上にあんまし書けてなかったら駄文&駄展開にもなりますよ（＊´・ω・）（・ω・、＊）ネー

第十八話　奇跡の代償

胸に突き立った銀色の刃。冷ややかな感覚の後に、灼ける様な熱がナオヤの全身を蹂躙する。しかし、声を上げて痛がるまでも無い。コレよりも遥かに上の苦痛を味わうはずだったアニーの事を思えば、この程度では音を上げる事なぞはナオヤの心が、存在自体が許す筈も無い。

「ナオヤ……何、を……！？」

呆然とした表情で立ち尽くすアニーの声が遠い。胸板を止め処無く流れる鮮血は、愚直なまでに全身に血を送り届けようとする心臓がまだ働いている事を示している。しかし、このままではナオヤは確実に死に至る。それは、誰の目から見ても明白であったし、ナオヤ自身もそれを理解しているが為にナイフを自ら手に取ったのだ。

「アンネ・フォークス……君は、君の『生』を大切にしてくれ。誰かに捧げたり、誰かの犠牲になる事なんて、必要無いのだから」

「……何を言っているのか、分からないよ？」

ショックで考える事も感情の表現も停止してしまい、ただ涙を流しそこに立っているだけのアニー。彼女の言葉に、ナオヤは今まで他人の前では見せてこなかった様な――否、かつてアニーに記憶のあった頃に、彼女にだけは見せていた、穏やかな笑みを浮かべる。

「遺言だよ、アニー。俺からの、最後のお願いだ。守ってくれるよな？」

アニーの顔が、僅かに俯く。首肯のつもりと捉え、ナオヤは胸に

刺さる刃を再び握り込み、一気に引き抜く。同時に冗談の様に吹き出す真っ赤な血液が辺りに飛び散り、それはアニーにも赤と言う色を暴力的に塗りたくっていく。
ナオヤの体が、大きく揺らいだ。ナオヤ自身の魔力や体力等を使って維持されている紛い物の右腕が、ナオヤのバイタルサインの低下を感知し、少しでも負荷を減らすべく強制排除された。
右腕の無いナオヤ。
泣いている自分。
そして、『ここ』という場所。
それ等全てが、アニーの頭の中を駆け巡る。導いた答えは、たった一つだけだった。
「嫌……ナオヤ、そんな……嫌ぁぁぁ

「さて、どうかしらね。私は干渉したりはしないもの」

言外に刺々しい批判を織り交ぜたエインセルの言葉を軽くいなし、また眠っている様な細い目で画面を見るルミナリカ。その態度に業を煮やしたか、エインセルは実体化してルミナリカに詰め寄った。

『ナオヤをわざわざ死に追いやったって事、分かってるの！？　貴女も、あのコウスケって真っ黒けも！！　貴女達が殺した様なものよ！！』

エインセルにどれだけ罵倒を叩き付けられても、ルミナリカは動じる素振りを見せない。ただ普段通りに画面を見つめるだけで、エインセルの方を見ようともしない。コミュニケーション自体が全く成立していないのだ。

『……くっ！』

怒りの表情を湛えたまま、エインセルも本体であるアルス・ノトリアを乱暴に手に取り、どこかへ行ってしまう。大方ナオヤの下へ行くのだろうと目星を付けて、ルミナリカも書類整理の仕事に戻る。読めているのかいないのか分からない程の速度で画面はスクロールされていき、しかしその動きはある一箇所で止まる。

「Ａｉｎｓｅｌ．　……第９７管理外世界では、北部イングランド伝承に登場する『自分自身』を意味する妖精の名前であり、他の次元世界でもほぼ同様の意味を込めて、数多くの伝承にその名は刻まれている。融合騎としてはこれ以上無い程に皮肉な名前ね」

小さく溜息を吐きながら、ルミナリカは窓の外の大きな夕陽を眺

める。地平線にその下半分を隠しながら、それはミッドチルダ首都であるクラナガンのビル街を自身の色で染めていく。
窓の外には、長い影を落としながら庁舎から走り去って行くエインセルの姿が見えていた。

走る、ただひたすらに。どこへ、というのは、問うまでも無い。ただ、彼女の主人の下へ。

『何で……何で、今更、あんな――！』

空気中に存在する魔力素を体内の人工コアで魔力へと変換し、それがそのままエインセルの活動エネルギーとなる。人間よりもタフではあるが、そういう動力の使い方をしている以上、必ず息切れや限界というモノも存在はする。
ナオヤが死んだとしても、また新しい主へと転移し、魔力回路を掌握し、自身の電池としてしまえば良い。――かつて、ナオヤに行ったのと同じ様に。しかし今は、ナオヤに死んで欲しくない、生きていて欲しい、という、極めて人間臭い感情がエインセルを突き動かしている。それこそ、人間を遥かに上回る身体の駆動効率を持ちながらも、汗ばみ、息切れしてしまう程に。

『あの……馬鹿ッ！！』

有事の際しか飛行は許可されない、という原則を愚直に守っている結果として、彼女は走り続けるしか無い。常人を少しだけ超える程度の速度しか出せない事を呪いながら、感情だけが先走らぬ様に脚を前に送り続ける。

ナオヤの髪は、普段から僅かに紅の色は混じってはいた。しかし、今はその何倍もの赤が飛び散り、ナオヤとその周囲に加え、アニーをも嬲っていた。
血の流れ出す勢いは流石に衰えを見せており、それがナオヤの生命力の低下を表している事は誰の目にも明らかだ。

「ナオヤ……」

虚ろな目で彼の顔を見ながら、アニーは手を握る事しか出来ない。故に、その傍らに誰かの立つ事に気付けなかった。

『ねぇ。貴女もやっぱり、ナオヤに生きてて欲しい？』

少し疲れた様な調子の声をかけられて初めて、アニーは脇に立つエインセルの方を向く。

「……うん」

少し遅れて頷くアニーに、エインセルは安堵と呆れの入り混じった様な深い息を吐く。ちらとアニーの方を向くと背中に担いでいたアルス・ノトリアを下ろし、まるで封印の様に厳重にかけられたブックホルダーを外していく。

『1つ、方法が無いわけじゃない。結構リスク大きいけどね』

その言葉で、アニーは想像も付かない様な勢いでエインセルに詰め寄る。御託は良いから早くその方法を教えろと言わんばかりの迫力に、エインセルは思わずその表情を強張らせた。両の掌を向けて

何とか落ち着かせようとしても、このまま時間を潰していればナオヤも危ないし、何よりアニーが襟首を掴んできはしまいかという不安に駆られ、大人しく説明を始める。

『まぁ、単純な事だけど。今のアルス・ノトリアはまだナオヤと繋がっているから、魔法行使が出来ないんだ。そこで、私と貴女がユニゾンし、一時的に仮契約を行う事で、貴女の魔力を使って魔法を使う事が出来る様にする。貴女のやる作業は、出来る限り魔力をかき集める事と、私とのユニゾンに耐える事だけだね。後は私が全部やるから、心配しないで』

ブックホルダーから解放されたアルス・ノトリアを斜め読みしながら、目当ての魔法を探すエインセル。言外に、今の内に魔力を集めておけ、と言われている事に気付いたアニーは、集圧と昇圧とを同時に発動して自身の内に魔力を蓄えていく。それが許容量の限界を超えそうになった所で、アニーの肩にエインセルが手をかけた。

『ユニゾン、イン』

まるで挨拶でもするかの如き軽い口調で宣告され、直後にアニーは己が内にエインセルの転移した事を感知した。

魔力の吸いとられる様な、底なし沼を体に飼っている様な感覚。それに抗うには、これまで以上のペースで魔力を上げていくしか無い。

『さぁ、私は見付けたよ。そっちの準備はどう？』

念話とはまた異なった感覚で、頭の中に声が響く。融合騎とはこういう物かと感心しながら、アニーはチャージされた魔力量を確認し、エインセルに報告する。

「純粋出力では、警戒艦の炉と同じくらいには。……でも、大丈夫なの？」

小規模であり、Ｓランカーにこそ劣るものの、艦艇と同等の魔力を内側に封じ込めたアニー。通常であればブラックアウトする危険性も極めて高く、また、そのダメージも計り知れない。しかし、エインセルはそんなアニーの不安を打ち消す様に軽く笑ってすら見せた。

『大丈夫大丈夫、それを使うのは私なんだから。ＳＳ＋程度までなら余裕で耐え切れる設計だしね、私』

勝気な表情で掌に拳を打ち付けるエインセルの姿が脳裏に浮かび、アニーの表情も和らいだ。行くよ、と宣言されただろうか、そう思うか思わないかの内にアニーの手に乗ったアルス・ノトリアはユニゾンする前までエインセルが読んでいたページを開き、古代ベルカの言葉で紡がれた文が輝きを持ち始め、光は帯となってナオヤの体を包む。

その中で一際強い光を放つ一行が、アニーの視線を惹きつけた。

「命は……命でしか、贖えない……？」

『Ｉｃｈ　ｏｐｆｅｒｎ　Ｍｅｉｎ　Ｓｅｅｌｅ．　……心配しないで、私に任せて』

そう言ってのけるエインセルの表情に、一抹の儚さ――死を受け入れた者の様な、どこか解き放たれた様な、安らいだ笑みを見出し。

「――貴女が、代わりに逝くと言うの！？」

アニーは、叫んだ。
ナオヤに生きて欲しい、それは事実だ。しかし、その代償として誰かに代わりになって欲しい、等と考えた事は一瞬たりともありはしない。真面目で、優しい心の持ち主であるアニーが、その様な事を許せるはずも無いのだ。

「止めて、私はそんな事をしてまでも望んでいたわけじゃ無いのに！！」

『あぁ……そうだろうね。忘れてた』

微笑。自分を代償としてまで、主を救おうと言うのか。人間とは、近い様でありながら、絶対的なまでに理解出来ない思考。

『ごめんね。私の為に、利用させてもらっただけなんだ。だから、貴女は悪く無いよ。こうしてユニゾンしているけど、『私』が消えれば後には何も残らないんだから』

更に追加で別の魔法を起動し、アニーの周囲にはかなりの数のスフィアが展開され、２つを残してそれぞれは散り散りに飛び去って行く。残された２つはアニーとナオヤの体の周りをゆっくりと回り、何をするわけでもなくただ浮遊を続けている。

「そんな……それで良いの！？　みんな忘れられて、悲しくは無いの！？」

『悲しくなんか無いよ。みんなが忘れていても、私はみんなの側にいられるし、それだけで良いから』

ナオヤが纏っていた帯は解かれ、彼の体に既に傷は無い。穏やかな表情で浅く眠りの呼吸を繰り返す彼は、彼の持っていた最強の戦力にして最高の相棒を失う事を、理解してはいないだろう。

『――じゃ、ばいばい。ナオヤと仲良くね、アニー』

その、エインセルの言葉で、スフィアはアニーとナオヤの胸に入り込む。苦痛は無い。ただ、暖かな感覚。かつて、この場所で味わった事のある感覚。それが、記憶の改竄であると気付いたときには、アニーに最早抗する手段は残されていなかった。

「エインセル――！」

叫ぶ声が、届く事は無い。アニーの内側にあった彼女の感覚は急激に薄れてきており、それと同調するかの様に彼女に関する思い出も、消えていく。ナオヤの時とは異なり、ただ決定的に、残酷なまでに性格に作用した魔法が、容赦なくアニーから記憶を奪い去って行く。リアルタイムで矯正を強制される感覚に耐える事は出来ず、アニーの目からは次々と大粒の涙が零れていった。

それから、どれだけの時間が経った事だろうか。１分？　１０分？　それとも１時間？

いや、実際に経過した時間は関係無い。アニーには、例えそれが刹那の時であったとしても、無限に感じられていたのだから。

ナオヤが、小さく声を上げて、体を起こす。涙の止まらぬアニーを見て、首を傾げている。それだけなのに、アニーは先程よりも激しく泣きじゃくり始める。

「アニー……」

「ナオ……ヤ……」

ナオヤが生きていてくれたというのに、この喪失感、この深い悲しみは何だろうか。アニーはただ、願っただけだと言うのに。ナオ

ヤを生かしてくれと、そう心から祈っただけなのに。奇跡、それが起きただけなのに、アニーの涙は嬉しさともう半分、悲しみから流れていた。

ナオヤとアニーの間に、灰となって崩れていく1冊の本があった。それが何であるかを確認する前に灰は風に乗って飛ばされ、肩から外れていたナオヤの義手をかすめて空へと昇って行く。

「……済まなかった」

「許せるはずないでしょ、馬鹿……」

優しくナオヤを抱擁し、その人としての温もりを感じる。ただそれだけで、今の2人は大分幸せだった。

2人に共通して存在する虚無感の正体に気付く事は、この先永劫に無いだろう。

第十八話　奇跡の代償（後書き）

次回、ムーギネーター様です。
マジ色々全てに於いてすんませんっした。

第十九話　私が只１つ許さないモノ（前書き）

バトンをキャッチしたムーギネーターです。

前回やらなかった分、今回は頑張りました！

第十九話　私が只１つ許さないモノ

時間は戻り、ナオヤがコウスケに“決断”を突き付けられている頃

――――

「どう言う事だ、ルミナリカ一佐！」

静寂に支配された空間の中に、デスクへと叩き付けられる拳の音とカリスの怒声が響く。あまりの剣幕と音にウルスもミルドレッドも気圧され生まれたての仔犬の様に震えていたが、今の彼の意識にはそんなモノは入っていなかった。

「少し落ち着きなさい、カリス。２人共怖がってるでしょう？」

そんな波濤の如きカリスの剣幕に対し、アンネ＝ルミナリカは些かの痛痒も感じていないかの如き冷静極まる素振りと口調で彼を諭した。平時であれば見た者に癒しを与える聖母の如きそれは、しかしこの状況に於いては背筋に寒気を感じさせる類の薄気味悪さしか感じさせなかった。

「話を逸らすな！　何であの状態の２人から俺達を無理矢理引き剥がしたんだ！」

そんな彼女の笑みで、内を駆け巡る悋気を余計に刺激されたカリスが吼える。その怒号は獰猛な雷の如く周囲を駆け巡り、そこにいた全員の鼓膜に痺れにも似た錯覚を与えた。

「そんなに怒らなくても話すわ。元よりその心算で、私はアナタ達を呼んだのだから」

未だ鼓膜に刺激を残しながら、アンネは慈愛に満ちた――――ウスキミワルイ仮面を思わせる笑顔のまま続けた。

「“彼ら”には解決しないと行けない問題があるの。彼ら2人が背負い、今尚引き摺っている“嘘”がね。その“嘘”は今はまだ何の問題も起こしていないけど、何れ大きく2人の在り方を歪める」

滔々と、眼下に置かれた原稿を読み上げる様に彼女は続ける。その言葉に迷い故の淀みは無く、彼女が確固たる信念の下にその言葉を空気に解き放っていると言う事はまだ年若いウルスやミルドレッドにも容易に理解出来た。

「だから、それを“壊す”のよ。彼らがその嘘に壊される前に、彼ら自身の力でね。その為には彼らがお互いに向き合う必要があるの。そして私達はそれに干渉してはいけないの。飽くまでも彼らが己自身で解決しなくては、ね」

「その結果、2人の間に何があってもなのか！？　あんな風に取り乱したアニーが、傷を負ったナオヤが！　万一アンタのその行動のせいで更に傷つくとしてもか！？」

「それでもよ。塗り固められた“嘘”を見逃せば、何れそれは途方も無い傷を2人に与える。本来2人が負わなくても良い傷までもね。そしてその傷を負うのは、彼ら2人だけではないの。彼らに関わる――――彼らの幸せを宿願とする人達全てが、心に永劫痕を残す傷を負うのよ」

溢れる激昂を抑えずに怒鳴るカリスの瞳を見据えながら、アンネは確固たる語調で返す。そこに迷いは一欠片も感じられない。暗に――――いや明確に「もし2人に何があろうともこの行動が正しい事に変わりは無い」と断じているその言葉は、その場にいる全員の

心に恐怖感を感じさせるには十分であった。

「こうなった事は私にとっては無論予想外だったけれど、同時に降って湧いた機会でもあるの。勿論あの2人にとってもね。彼らが突き付けられた事実に対しどんな選択をするかは分からないけれど、少なくとも1つの“嘘”を壊せるのならばそれをふいにする心算は私には無いわ」

「ッ！　もう良い！」

怒りと異様なモノへの恐怖の入り混じった感情を端的に吐き捨てると、カリスは乱暴に部屋の戸を開けて出て行った。残された2人はその音に怯んだ後、アンネの顔を窺ってから彼の後を付いて去って行った。恐らく別の場所――――この部屋からは遠く隔絶された場所に居るナオヤ達を探しに行く心算だろうとアンネは理解したが、特にそれを阻止する行動を起こす事は無かった。

何故なら、彼らに彼女の目論見を阻止する事は不可能だから。絶対の確信に裏打ちされた予測を根拠に、彼女はカリス達と入れ違いにこちらに向かって来ている青年を待つ事に意識を向けた。

～～～

そあれ憎む理由の無い彼女に対しそれは当然の反応であり、彼女も自分と周囲の為にとその期待に応えんとした。

だが、そんな折にとある事件が起きた。新聞にすれば通算で3ページ――――飽きっぽい衆愚の記憶には一瞬しか残らないその事件は、しかし彼女に決定的な変化（ゆがみ）を齎すには十分過ぎる事件だった。

とある会社の粉飾決算。己の失態を覆い隠すべく傲慢で強欲な社長のワンマン経営の犯したその所業を、あろう事か彼女の父――――偶々その事実を知ったに過ぎない平々凡々な一社員は義憤に駆られて社長を追及したのだ。

常識や倫理観からすれば、この上も無く正しい行動だろう。だが、理屈など通らぬ不条理が罷り通るのもまた現実。社長の怒りを買った彼はその罪を全て擦り付けられ、正義の味方から諸悪の根源へと凋落してしまった。要領と言う言葉を度外視したが故に悪とされた彼は結局己が命を断つ事で全ての真実を明かしたが、代わりに多くの犠牲を周囲に強いると言う罪も犯したのである。

犠牲を強いられた人物の中には、例外ではなくアンネもいた。自身の尊敬する父が、常に嘘を嫌った父が嘘に因って辱められ嬲られたと言う事実がどれ程の犠牲を彼女に強いたかは言うまでも無いだろう。そしてそれは、アンネ＝ルミナリカと言う人物の中に大きな“歪み”を創り出した。

――――“嘘”が全てを壊した。

嘘の犠牲になった父親は死に、その事で心に治癒不可能な傷を負った母も後を追う様に人生に幕を下ろした。親戚や友人――――それまで彼女を称えていた者達の中には掌を返したかの様に彼女らを蔑み罵倒する者がいる事も知り、信頼関係も破綻した。後に軽率で蒙昧な報道の過ちに気付いて修復された仲も幾つかあったが、それ

が決して元の絆でない事は明白だった。
アンネはそんな愚か者達を責めなかった。彼らは自分と同じ人間、間違いを犯さずにいる事は不可能なのだから。だから彼女は彼らを許した。罵倒する者の事も過ちに気付いて謝罪して来た者の事も、全てを等しく許した。

だがそれと引き換えに、彼女は“嘘”に冷酷になった。それに一切の憐憫の情も抱かず、只容赦無く明らかにし続けた。“嘘も方便”と言う言葉でフォローすべき事柄でさえ、彼女は暴露しその存在を断罪して来た。飽くまでも、その“嘘”のみを。
内部監査部を立ち上げたのも、偏にその為だ。内に秘められ、なあなあで罷り通る“嘘”を断罪する為。彼女の確固たる信念――――何処までも清廉にして何処までも歪なココロの象徴こそがこの部隊の創設理由である事を知るのは、現時点では彼女只1人である。

第十九話　私が只１つ許さないモノ（後書き）

これ、大丈夫だろうか……

混沌の使者さん、次をお願いします。

第二十話　想い（前書き）

皆さんお久しぶりです。
混沌の使者です。

この度は遅れてしまい申し訳ありません。

全力で書かせていただきました。
よろしければご覧になってください。

第二十話　想い

「歴史は繰り返す……」
「は？」

マイアル家の一室。
机が１つあり、棚が何個かあるだけの簡素な部屋。
その一室で、ルビオール・マイアルが呟いた言葉に、執事服を来た男が、問い返した。

「言い得て妙だとは思わないか？」
「私には解りかねます」

ふむ、と呟くと、ルビオールは執事に背を向け、窓の方を向いた。

「人は歴史を知っている。結果を知り、それをもう繰り返してはいけないと思う」
「はい」
「ならば何故人は繰り返すのか……それは過程を知らないからだ。それに至った過程をな」
「つまり過程さえ知っていれば、同じことは起きないと？」
「そうでもない。知っていたとしても、起こるべくして起こるものもある。所詮、歴史というのは忘れられていくものだ。その時代に生きたものがいなければ、人の意思が介在する限り、幾らでもねじ曲げられる。必要なのは、過程を知り、それをどれ程考察できるかだ。他人が行った考察に頼らず自分でな」
「それさえすれば、歴史は繰り返されないのですか？」
「言っただろう？　起こるべくして起こるものもある、と。結局は繰り返してしまうのだ。人というものはな。それが愚かと知りなが

ら……」

ルビオールは椅子から立ち上がり、窓の外を物憂げに見つめる。

「繰り返される悲劇……俺は……」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

少しやり過ぎたかもしれないわね……。

アンネ・ルミナリカはデスクに座り、ぽつりとそんなことを考えた。

別に嘘を断罪することを反省したわけではないが、追いつめすぎたかもしれないという気持ちもあった。

確かに過去の出来事で、歪みが加わったが元々は心優しい女性であるのは間違いない。

人を極限まで追いつめて、心が痛まないわけではない。

しかし、それでも顔には出さずに、嘘もすべて断罪しているのだ。

それが、アンネ・ルミナリカという信念を貫く人間なのだ。

私はきっと死んだら地獄に落ちるでしょうね。

そんなことを思う。自分がどれほど酷いことをしてるかの自覚はあるのだ。

自覚はあれど、それを止める気はない。信念のもと動く彼女は、これからもそれを崩すことはないだろう。

――それでも私の心はそれを望むことはない……。

そう感じる。それは壊れていると表現しても、問題ないものだ。

何故なら、信念と心は通常、同一であるべきものだ。心でそう決

めて、信念として貫くもの。そうであるはずだ。
しかし、アンネ・ルミナリカにとっては、そうではない。
信念と心は決して同一のものではない。
よく考えれば、すぐにわかることだ。
悪事を許し、事象さえも許容しうる心を持つルミナリカ。ならば、何故、“嘘”さえも許容できないのか？
違うのだ。それぞれの働く回路が。
心ではすべてを許容しうるものを持っている。しかし、嘘を断罪するのは、信念という――いわば、呪いのようなもの。
その呪いは、常にアンネ・ルミナリカという1人の人間を侵食している。
心でいくら許そうとも、その呪いは“嘘”を断罪することを止めない。
それだけ、アンネ・ルミナリカは破綻に満ちた存在なのだ。
それでも、それを許容してしまうから、アンネ・ルミナリカは壊れてしまうことはない。
異常……なんでしょうね……、と心で呟いた。そして、俯いていた顔を上げ、ドアの方を向く。

「誰かしら？」

唐突にドアに向かって、声を投げかけた。
すると、ドアが開き、誰かが入ってくる。
それは長い銀髪に、水色の瞳――ルビオール・マイアル、その人だった。

「お初にお目にかかる。俺はルビオール・マイアルという」
「貴方が……。ここには何を？」
「……負ければ何でも話すという約束だからな。こちらから出向いてやったのだ」

「あら、そうなの。それじゃあいろいろと質問させてもらうわね」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……」

「……」

ナオヤ・イグニスとアンネ・フォークス。

人通りのある街中を通り、今2人は内部監査部に戻る最中である。

流石にあのままあそこにいるわけにもいかないし、部隊長のアンネ・ルミナリカにも聞きたいことがある。

今回の件はあの人が関わっている可能性が高いからだ。それは誘われたときのことからも、推測できる。

そうして戻っているわけだが、どうにも気まずい。

ナオヤはアニーの記憶を上書きし、更にはそのために自殺まで図ろうとした。それは言ってしまえば、自己満足であり、やはり許されるものでもない。

正直な話、なんと声をかけていいかわからないのだ。

逆にアニーからしてみると、怒りたい気持ちもあるのだが、記憶を消したことも、自殺を図ったことも、結局のところ、自分のせい――というか、自分のためであった。

怒りたいんだけど、そう考えると、怒るに怒れない。自分がしっかりしていて、ナオヤに頼られるような存在だったなら、こんなことは起きなかったかもしれない、なんてことを思ってしまう。

そんなことから、2人はどこか気まずいまま、歩きながら戻っていた。

そんな中、ナオヤが決死の思いで、声を出す。

「ア……ニー……その……だな……すまなかった……」
「それはもう聞いた」

だが、やはりナオヤは言葉が出ずに、ただ謝った。
しかし、アニーには素っ気なく返される。そうなると、ナオヤも再び何を返していいかわからず、うぐっ、とのどを詰まらせた。

――思わず素っ気なく返しちゃった……どうしよう……。

ただ、アニーの方も、自分が悪いと思いながらも、やっぱり許せないので、そんな返しをしてしまったようだ。
再びの静寂が2人の間に流れた。

「あのだな」
「あの」

と思いきや、声が重なった。
2人とも慌てて手を振り、「そっちからどうぞ」と喋る権利を受け渡そうとする。
だが、2人とも否定するもんで、どっちか決まらなかった。

「な、ナオヤから言ってよ」
「俺はさっき先に話したろ。次はお前だ」
「何よそれ。そんなの関係ないでしょ」
「うっ……まあそうだが……だがな……」
「ああもう！　言い訳の1つでも聞いてあげるって言ってるの！ほら！」

すると、ナオヤはしばし黙った後、深呼吸をするかのように、深く息を吐くと、ぽつりと話しだした。

「言い訳は特にない。あれは俺の自己満足で、お前にとっては望まない形だったからな」

――ま、そうよね。この人が惨めに言い訳なんかするはずないか……。

そこまでの言葉では、そんな感じで冷静にナオヤを見るアニー。
そういうところは昔と変わらない、なんて感想さえも抱く。
だが、次の言葉で冷静さが解かれた。

「俺が言いたいのは、その……俺が言った言葉についてだ」
「言葉？」
「その……あれだ……俺が……お前を……その……“好き”……と」

その言葉で一気にアニーの顔が朱に染まった。
そういえば……、と思い出す。
ナオヤがナイフを自分に刺す前に、私の事をす、すす、好きと、とと……！
その後の出来事で忘れていたアニーだが、ナオヤの言葉で思い出してしまった。
あわわ、と慌てだすアニーにナオヤは続ける。

「それは……忘れろ……」
「へっ？」
「お前も自分の事が好きな奴が、職場にいるという状況はやりにくいだろ？　俺も気恥かしい。だから――」
「ナ・オ・ヤ？」
「――ッ！」

そのアニーのプレッシャーに思わず、ナオヤは口を噤んだ。
ふふふ……そうよね。あなたはそういう人だわ。相手の気持ちを考えないで、そういう事を言う。
まあ、それも相手の事を考えての行動だけど、気持ちを考慮しないのよね。
でも、流石にその言葉は私も許容できないかなぁ。
急激に冷めたアニーの雰囲気に、ナオヤはたじたじである。

「ねぇナオヤ。それはつまり私の事は好きじゃないってこと？」
「い、いや、そうじゃない！　俺は……その……お前の事が……そのだな……」
「はっきり言う！」
「うっ……好きだ……」
「じゃあどうして忘れてなんて言うの？」
「いや、だからな――」
「私もあなたのことを好きなのに」
「……はい……？」

突然のアニーの告白に、ナオヤは、何言ってんのこいつ？　みたいな表情を浮かべる。
アニーは勢いであんな事を言って、やはり恥ずかしいのか顔を赤らめながら、ナオヤにわかるようにもう一度――

「だから……私もあなたの事が好き！　なの……」

少し吃(ども)りながらも、肝心な部分ははっきりと言った。
だが、ナオヤは未だにクエスチョンな気分だった。
ナオヤはアニーが自分の事を好きと思っていたなどと、一欠片も思った事がない。あの頃も今も。
何故、急にそういう結論に至ったかが、全く理解できないのだ。

そうなると、もしかしたら、何か勘違いしてるんじゃないか？
と考え出す。

「あのなぁ、もし俺のやったことに責任を感じてるなら、それは間違いだ。すべては俺の独断でやったことなんだからな」

アニーは責任感が強い。
もしかしたら、何か俺に負い目を感じてるのかもしれない。それを恋心か何かと勘違いしてるのでは。
そんなことを思い、アニーに諭すようにそう宣(のたま)った。
のだが、アニーの雰囲気が更に険悪になった。
どうしてこの人はこう……！

「ナオヤ！」

突然のアニーの大声。
ナオヤは流石にびっくりし、その身体を仰け反らせる。
だが、その身体を逃さずに、アニーの両腕がナオヤの両頬を捉え、固定した。
ナオヤの顔は面白い顔になり、しかし、負けじとアニーの顔も朱に染まっていた。

「ちゃんと私のことを見て！　もう一度言うわ！　私は――あなたのことが好き！！」

ナオヤはまっすぐにアニーを見つめる。
その顔は羞恥からか真っ赤に染まり、決死の覚悟だったのが見て取れる。
流石にここまでやられては、もう信じないわけにもいかない。
はぁ……、と心の中で溜め息を吐き、結局全部俺の独りよがりだ

ったか……、と心の中で呟いた。
ナオヤは優しくアニーの手を退けて、こちらの想いも伝えるべく目を合わせる。
「俺も……お前のことが好きだアニー」
「うん……」
2人の想いが重なる。
お互い気恥しいながらも、それを確かめるように抱きしめ合う。
――パチパチパチ
と、そこで周囲から拍手が聞こえた。
「「〜〜ッ！」」
思い出してみると、ここは人通りのある街中で、当然不特定多数の人がいるわけで、その中で大声を出したり、あまつさえ告白などしようものなら、注目されるのは当然なわけで。
つまりは、すんごく恥ずかしい。
2人はあまりの羞恥に、その場を逃げるように去って行った。

とりあえず、人通りの少ない路地に出ると、荒くなった息を整える。
ある程度息が整うと、アニーが崩れ落ちるように膝を折り、両手で両目を覆った。
「うわ〜ん！　ナオヤの馬鹿馬鹿馬鹿〜！　私もうしばらくあそこ

の通り歩けないわよ〜！」
「俺のせいにするな……大声出したのはお前だろ……」
「あなたが鈍感だからでしょ〜！　もういや〜！」

えぐえぐ、と泣き止まないアニーに困惑の色を浮かべるナオヤ。
一応ナオヤも恥ずかしいのだが、アニーの恥ずかしがり具合に、一転冷静になった。
そんな冷静になったナオヤは、若干の恥ずかしさは残るものの、アニーとの仲を素直に喜んだ。
口の端に少しの笑みを残し、アニーに近づき手を伸ばす。

「いつまでもそうしてても始まらんだろ？　行くぞ」
「でもぉ……うぅ……」

アニーはあまりの恥ずかしさに、立って歩くことすらしたくない――というか、人に会いたくないという気持ちが勝り、俯いたまま唸っていた。
ナオヤはそんなアニーの心情が、まあまあわからんこともないので、どうしたものか、と頭を掻く。
こんなときはどうしたかな……、と少し記憶を辿り、アニーに声をかける。

「安心しろアニー。これからは俺がいる。俺がお前の側にいる。だから大丈夫だ」

正直、言ってて恥ずかしい、と思うのだが、アニーは結構クサイ台詞みたいなのが好きで、案外すぐに引っ掛かる。
アニーはナオヤに向かい、顔を上に向ける。その瞳は涙で濡れて、どこか小動物のように揺れていた。その瞳が上目遣いになり、ナオヤの顔を見つめる。

そして――

「ほんと？」

「〜〜ッ！」

若干首を傾げながら、訊いてきた。

ナオヤはそのアニーの瞳から思わず、視線を逸らし――

「……お前のそういうところは反則だ……」

ぼそっと呟いた。

アニーには聞こえてなかったようで、疑問符を浮かべていた。

とにかく、その反則的な瞳から、視線を逸らしつつ、アニーを立ち上がらせる。

「どうかしたの？」

「なんでもない……」

ナオヤはさりげなくアニーの埃を叩(はた)いて落としてやると、スッと前を歩き出した。

アニーはそんなナオヤの後ろから近づき、隣に立つ。

ナオヤの顔色を窺いながら、その顔を覗き込む。

「……なにか怒ってるの？」

「別に怒ってはいない……」

「じゃあ何で目を合わせないのよ」

「俺の勝手だ」

むぅ……、と唇を尖らせて、不満を露にするアニー。

好き同士ってわかっても、ナオヤは態度が変わらないのね……、

と少し残念に思いながらも隣を歩く。
でも、と思う。もしかしたら、今回の件について考えてるのかもしれない、と。
そう考えると、自然と自分もその事を考えてしまう。
ルミナリカ部隊長は本当にこの件に関わっているの？　ううん。きっと関わってる。
出会いのことを考えると、確信めいたものがある。
そう考えるが、ナオヤはどう思ってるのかな？　と思い、質問するべく口を開いた。

「ねぇナオヤ……」
「だから怒ってないと――」
「そうじゃなくて……ルミナリカ部隊長のことどう思ってる？」
「そのことか……正直わからないな」
「わからない？」
「ああ、会った当初は険悪だった。得体も知れなかったしな」
「うん」
「だがな、こうして仕事をしてきて、俺はあの人を見てきた。感じたのはただ優しいということだったよ」
「……私も……」

母性に溢れ、聖母のように優しく包み込んでくれる。
あれは正しく彼女の本質だ。
嘘や偽りにより作られたものではない。あれが彼女の姿なのだ。
だが、わからない。あれが本質であることは確かだ。
しかし、ならば何故、今回のような強行策を行ったのか？　いや、まだ関わってると決まったわけではないが、関わってるとしたら……。
このような危険な策を取るだろうか？　あの優しい人が。
故にわからない。

アンネ・ルミナリカの心が。
だが、それなら――
「わからないなら訊けばいい」
「答えて……くれるかしら……？」
「答えてもらうさ」
そう不敵に笑い、ナオヤは歩いていく。
アニーはそんなナオヤを見て、どうするつもりなのかしら、と不思議に思いながら、でも今は……、とその左手に抱き着いて共に歩いていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――くそっ！

カリスはナオヤ達を探しながら、何度目かわからない憤りを感じていた。
彼は元来、正義感が強く、まだ無くなったわけではない。
ただ、隠れているだけなのだ。閉ざされた心の扉の中に。
だから、時々扉が開いて、正義感が現れる。
今回のこともそうだ。
アニーとナオヤを引き剥がすのは、自分の正義から逸脱した行為と判断したため。
だからこそ、あそこまでアンネ・ルミナリカに言及したのだ。
だがそれだけではなかった。
――どうしてなんだよ……！

わからなかった。あのアンネ・ルミナリカがあのような行為をするのかが。
カリスはこの部署に入って、あの人を見てきた。
最初に会ったときは、訳がわからなかった。
自分の過去を知りながら、それを許容し、自分の部署に入れようとする。それが。
しかし、あの人は言ったのだ。

偽善で良い。

と。

だからこそ、偽善だと思いながら、ウルスとミルドレッドの父親役を引き受けた。
彼女に対しての苛立ちは確かに前からあった。どうしてかはわからない。それでもあった。
しかし……だ。

――俺はあんたのこと優しくていい人だと思ってた……！

だが、今回のことでわからなくなってきた。
一体何が彼女の本質なのか？

「くそっ！」

わからないことに苛立ち、近くにあった壁を思い切り殴った。
その手からは血が垂れる。
だが、足りない。
この苛立ちを解消するには。

もう一度殴ろうと振りかぶり――

「「パパ！！」」

ウルスに身体をミルドレッドに拳を止められた。

「止めてよパパ～！　お手手痛いよ～！」

ミルドレッドが涙を流しながら、拳を自分の身体で包むように止める。

「そうですパパ！　こんなことしたって何にもならないじゃないですか！」

ウルスもその身体に必死に抱きつき、必死に呼びかけた。

その2人の説得により、カリスはようやく落ち着きを取り戻していく。

ゆっくりと拳を降ろしていき、ウルスとミルドレッドを見て、何やってんだ俺は……、と悲観し、辺りを見回す。

さっきまではどうにも周りが見えていなかったが、ここはどうやら裏路地のようだ。

恐らく本能的に、人気（ひとけ）が無いような場所に、アニーとナオヤがいると思い、そこを探そうとしていたんだろう。

結局、探すことはなく、鬱憤を吐き出すだけになったわけだが。

カリスは落ち着いていくと、脱力しその場にへたり込む。

すると、自然にウルスとミルドレッドも座ることになった。

「すまねぇ。みっともないとこ見せたな」

心配そうに見つめる2人に、そう声をかけ頭を撫でる。

どうやら、本当に落ち着いたようである。そのことに2人は胸をなでおろし、よかった、と心の中で呟いた。
しかし、それでもカリスの顔が晴れることはない。未だ曇ったままだ。
だが、それもわかろうというもの。ルミナリカのあの態度。あれには不明な点が多いのだから。
それはウルスも同感で、正直な話、カリスより戸惑っていた。
それというのも、ウルスは皆よりもルミナリカとの付き合いは長い。
この内部監査部に入れたのも、ほぼそのためと見ても間違いない。
そんなウルスはずっとルミナリカを見てきたのだ。
まるで、母親のように接してくれるあの人を。
そんなあの人が、どうしてあんな真似をするのかがわからかった。
ずっと見てきたから、あの人が誰よりも優しいと知っている。
知っているはずなのに……。

――わからない……。

大いなる矛盾。知っているはずなのにわからない。
何故にこのような事が起こるのか。それもわからない。
どうして……。

「どうしてだろうな……」

すると、まるでウルスの心情を読んだかのように、カリスがぽつりと言葉を発する。
ウルスもミルドレッドもそんなカリスを見る。
酷く辛そうな顔をしていた。

「どうしてあの人はあんなことをしたんだろうな……？　わからね

ぇよ……普段のあの人ならあんなことするはずねぇ。だったら、普段のあの人のあの態度は全部嘘だったって言うのか？」

疑問形で問いを発する。

それにウルスが反応し、言葉を発しかけたところで――

「違う！」

カリスから答えが発せられた。

わかっているのだ。問いにしなくともそんなことは。

「……わかってる。あの人のあの優しさは本物だ。本物のはずなんだ……」

「そうですよパパ。アンネさんの優しさは本物です。それは絶対です……！」

確実なことはある。

だけど、不確実なこともある。

その不確実な部分が、堪らなく不安で。

知っているはずなのに、わからないから。

だから、2人とも辛く、迷いが生じる。

そんな2人にミルドレッドが声をかける。

「大丈夫だよ！」

何の根拠もないであろうただ元気な声が、2人の耳に届く。

それに少し苛つく。

ミルドレッドは自分達を元気付けようとしてるんだろうと思う。

そう思うのに苛ついてしまう。

そんなある意味嫉妬に似た感情を宿らせながら、カリスは少し語

気を荒げて言う。

「何が……大丈夫なんだよ……！　確かにルミナリカ部隊長の言うこともわかるさ！　だがな！　だからって、あいつらがさらに傷ついていいことにはならねぇじゃねぇか！」

カリスはただ胸の内を苛立ちのまま、ミルドレッドにぶつける。

ぶつけた後に、ハッとするが、だが訂正する気にはならない。

このままでは全部が壊れる。今までの関係が。何も大丈夫なことなんかないのだから。

しかし、それでもミルドレッドは――

「大丈夫だよ……」

と、言い張る。

その言葉は、本当に大丈夫だと思わせるような力があるように思えた。

ミルドレッドは更に続ける。

「パパもウルスお父様も……こんなにアンネさんのこと信じてるんだもん……」

そう。2人とも信じている。アンネ・ルミナリカが優しい人で、信じるに値する人だと。

それが今回のことで、少し揺らいでいるだけ。

だが、揺らいでいても、あの人が優しいと言う考えは変わらない。

それなら――

「もう一度話そう？　パパもウルスお父様も納得いくまで、アンネさんと話そうよ。そしたらきっと大丈夫だよ！」

何故だろうか……その言葉を素直に信じたくなる。
もう一度話せば、わかり合えるような、そんな気がする。
何故こんなことを思ってしまうのか？　わからない。わからないが――

「「ふっ」」

2人とも笑みが溢れた。
さっきまで笑うほどの余裕はなかったのに、ミルドレッドの言葉でその余裕が出来た。
2人は薄く笑うと、思いきり立ち上がる。

「ったく、年下に言われちまうとはな」
「あはは、でも何か元気出ました。もう一度、アンネさんのところにいきましょう、パパ」
「???」

そんな2人をミルドレッドは、不思議そうに見つめる。ミルドレッドは、自分の気持ちを素直に言っただけであり、それにより2人をどうかしようと考えたわけではない。
でも元気になってよかった♪
と、思い、自分も立ち上がる。
そこで、カリスが「あっ」と声を上げる。

「その前にナオヤとアニーを探さねぇといけねぇよな……」

ルミナリカとの和解も必要だが、ここは心配な2人を探すことの方が重要だ。
何かあった後では遅いのだから。

だが、ミルドレッドはそれにも異議を唱えた。

「それも大丈夫！　ナオヤさんは私と約束したもん！　ママも大丈夫！　だってママ強いもん！」

そう力強く言う。

ナオヤといつ何の約束をしたのだろうか？　と思った2人だが、まあミルがここまで言ってるなら大丈夫か、と少しばかり安堵する。しかしママが強い、というミルドレッドの掛け値のない本気の言葉に、アニーが聞いたらどう思うかな？　と思い、苦笑を洩らした。

そんな2人の心情がよくわからないミルドレッドは、やはり頭にクエスチョンマークを浮かべるのだった。

「そんじゃまルミナリカ部隊長のとこに行くか。あの人の心の内を全部ぶちまけてもらうぜ」

左手に右拳を打ち付けて、シャッ！　と気合いを入れたカリス。しかし、その瞬間、壁を殴った際の傷が痛み、ギャッ！　と声を上げた。

そのカリスの様子に、苦笑と共に和やかな雰囲気が流れた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

管理局の廊下。

2人の男女が歩く。

軽い距離を保ち、いかにも先程会いました的な雰囲気で歩いている。

一方その対面の廊下では、3人の男女が、あーだこーだと何か言

い合いをしながら歩いていた。
その２人と３人は、はた、と前方の存在に気づく。
２人の方は若干気まずい雰囲気。３人の方は何だかわなわなしていた。

「ナオヤ！　この野郎！」

すると、３人の内の１人――カリス・ラッドが２人の内の１人――ナオヤ・イグニスに飛び掛かった。
ナオヤは躱そうかとも思ったのだが、さすがにそれは無粋か……、と思い甘んじて――跳び蹴りを食らった。

「く……何をする……！」
「うるせえ！　無事なら無事と連絡しろバカ野郎！　心配しただろうが！」

確かに連絡すべきだったか……、と思う反面、だからって跳び蹴りをするか普通？　と憤りを露にするが、やはり自分が悪いと思い、ため息だけに抑えた。
一方のアニーは――

「ママ！」
「ミル」

ミルドレッドがアニーの身体に飛び付き、アニーが抱き締めるという感動的な場面が繰り広げていた。
なんとなく余ってしまったウルスは、ぽりぽりと頬を掻き、目立つなぁ……、と悲観した思いを感じるのだった。

とまあ色々あったが、お互いある程度の事情を話し合い、目的は同じとわかると、とにかくアンネ・ルミナリカのところに向かおう、ということになった。
そこでカリスが先程話していた内容をナオヤに話す。

「ただ話し合ってたんだが、どうルミナリカ部隊長に本音を吐かせるかが思い付かねぇんだ」
「大丈夫だ。お前から情報ももらった。こちらのカードは揃っている」
「何か考えがあんのか？」
「まあな」

それ以降は会話はなく、ナオヤは内部監査部の部署に向かう。
カリスはもちろん、アニーやウルス、ミルドレッドも頭に疑問符を浮かべながらもついていった。
そしてとうとう部署まで辿り着く。
そのドアの前で、皆一様に緊張しながら、先頭のナオヤがドアを開けるのを待つ。

「……行くぞ」

少しの沈黙の後、ドアは開かれた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――赤――

視界が真っ赤に染まる……。
目の前のものが何なのかを理解するのに、時間を労し、それでも理解ができない。いや、したくない。
アニーとミルドレッドの身体が、膝から崩れ落ち、ウルスの身体が信じたくないというように、一歩下がり、カリスの瞳が大きく見開かれる。
目の前に広がる光景は、正しく血であった。
それも目の前の壁に、放射線状に撒き散らされた。
そして、その前の机には――突っ伏しているアンネ・ルミナリカの姿があった。

「くっ……！」

そんな中、ナオヤだけはすぐに放心状態から抜け出し、急いでアンネ・ルミナリカに近寄る。
壁に付着した血は、まだアンネ・ルミナリカのものと決まったわけではない。それを確かめるためにも――いや、そうでないことを祈りながら、アンネ・ルミナリカの身体を椅子から降ろし、仰向けにして腕で支えた。

――くそっ……！

しかし、希望はなかった。その胸からは夥しい血が流れ、致命傷であることを示していた。

ナオヤ以外の者たちも、放心しながらもアンネ・ルミナリカの近くまで来て、その姿を見る。現状が現実として襲ってくる。それは絶望。

ナオヤはその中で、わずかな希望に縋ろうと声を張った。

「目を開けろ！　ルミナリカ部隊長！　俺は……！　俺はまだ貴女に何も訊いていない！　目を開けろ！　アンネ・ルミナリカ！！」

もう絶命してると思いながらも、必死に呼びかける。

訊きたい事がある。今回の事もそうだし、何よりこの部隊長の“矛盾”について何も訊いていない。

それなのに何も言わないまま、この世を去るなど――赦さない。

その時、奇跡が起こる。微かにアンネ・ルミナリカの瞳が開いた。

その瞳はナオヤを捉え、他の皆の姿も捉えた。

そして――

――よかった

声にならない言葉。唇だけが動き、その形を作った。顔は死の瀬戸際だというのに、未だに優しく微笑んでいた。

それだけで矛盾が解かれた。

――ああ……この人は本心ではずっと心配していたんだ……。そして、本心ではない何かが、この人を動かしていた。

そんな感じがした。

すべてを口にせずとも、その心が見えた気がする。

だが、すべては遅かった。奇跡は一瞬しか起きず――アンネ・ルミナリカの身体は完全に沈黙した。

その情報は、すぐに全員に伝播する。

現実として捉えたくないと思いながら、本能は無残にもそれを現実だと主張する。
理性が、違う……こんなのは現実じゃない、と否定しても、本能はすでに理解していた。
そう……アンネ・ルミナリカは今日この時、死亡した。

「い……や……いやぁぁぁぁぁぁあ！？」

アンネ・フォークスの悲鳴が木霊し――

「うそ……だ……」

ウルス・クリッターの信じられない――信じたくないという声音が響き――

「なんだよこりゃ……なんなんだよ！！」

カリス・ラッドの一際大きな声が辺りを支配した。

第二十話　想い（後書き）

いかがでしたか？

なるべく皆さんを鬱の世界に取り込むべく描きました（ぇ

とりあえず、可能性やらなんやら色々と張り巡らせました。

無茶ぶりやっほい、な内容でしたが、次のＴＲさん……頑張ってください。

第二十一話　死の真実（前書き）

書く速度の速さに定評？のあるＴＲです。
衝撃のラストに次ぐ衝撃の物語をどうぞ。

第二十一話　死の真実

時は戻り、ルビオール・マイアルがアンネ・ルミナリカの元に訪れた時。
アンネ・ルミナリカが命を落とす2時間前の事だ。

「……負ければ何でも話すという約束だからな。こちらから出向いてやったのだ」
「あら、そうなの。それじゃあいろいろと質問させてもらうわね」
そう言い切り、アンネは疑問をぶつける。
「貴方の娘……もしくは家族に当たる、ミルさんだけど、本当にあなたの家族なのかしら？」
「何が言いたい？」
アンネの直球の問いかけに、ルビオールの目が鋭くなる。
「彼女は貴方、もしくはあなたのご先祖さんが、発見したのではないのでしょうか？」
「……」
アンネの推測に、ルビオールは反応を示さない。
お互いに無言を貫き、緊張感が漂う。
「驚いた。まさかそこまで見抜いていたとは」
静寂をうち破ったのはルビオールだった。

その言葉は、肯定を意味していた。

「ああ、貴方の言った通りだ。彼女は2代前のマイアル家の者が倒れているのを発見、保護した」

「そう。では次の質問。彼女は……」

ルビオールの答えに、アンネは表情を崩さず質問を投げかける。

「彼女は、本当に行方不明になったのかしら？　2代前の人が彼女を封印したのではないのですか？」

「貴方は一体何者だ？　さっきからただの局員とは思えないほどの質問をしているが」

アンネの問いかけに、ルビオールは眉をひそめる。

その内心は、驚きと焦りだった。

「私はただの監査部の部隊長です」

「……そうか。では、答えよう」

アンネの裏表のない表情に、ルビオールは降参とばかりに彼女の問いかけに答える。

★　★　★　★　★　★

アンネルミナリカが命を落とす30分前。

とある場所にある、オフィスビルを思わせるほどの高さを誇る建物の屋上。

そこにはスコープ付きの銃を構える青年と、そんな青年を一歩下がって見守る女性の姿があった。

「どう？　二人の様子は」

「ああ、なんだかんだ言って目標は達成したようだ。僕の出番はなかったようだ」

女性の問いかけに、青年はスコープを覗き込みながら苦笑い交じりに答える。

その青年の名は、コウスケ・タカツキ。

そして女性の名前はニクス・エルセーヌであった。

コウスケの照準は少し離れたところにいる、ナオヤとアニーの二人を捉えていた。

コウスケは二人が思いを交わし合ったのを確認し、スコープを覗くのをやめる。

「お前まで来なくてもよかったのに」

「だ、だって私はコウスケの……その、彼女だもん」

コウスケの言葉に、ニクスは頬を赤らめながら答えた。

もっとも、コウスケには最後の方は聞き取れてはいなかったが。

「はいはい。取りあえずミッションコンプリートだ。これから片付けとかするから、ニクスは先に戻ってて」

「うん、分かった。それじゃ、また後でね」

コウスケの指示に、ニクスは素直に従い、柔らかい笑顔を浮かべながらコウスケに手を振るとそのまま屋上を後にしていく。

「さて、ぼちぼちと撤収作業をしますか」

コウスケは撤収作業をすべく、片づけを始めた。

そんなコウスケに連絡が入ったのは、アンネ・ルミナリカが命を落とす、１０分前の事。

「誰だ？」

コウスケは怪訝そうな表情をしながら通信に出る。

【こんにちは、コウスケ】

その相手は、アンネだった。

「これはこれはルミナリカ殿。一体どのようなご用件で？」

【前のように呼んでくれるかしら？】

コウスケの問いかけに、アンネは不満そうな表情で告げた。

それは聞いたコウスケは一息つくと、要求された喋り方に戻した。

「……アンネお嬢様、一体どうされたのでしょうか？」

【ふふ……その呼び方いつ以来かしら】

コウスケの改まった言葉づかいにアンネは笑みをこぼす。

「6年ぶりではないでしょうか？」

そのやり取りを見ている物がいるとすれば、全員が彼女たちの関係をこう呼ぶだろう。

――執事とお嬢様――と。

【よく覚えてるわね。用件は、ミルさんの事よ】

「ミルドレッド嬢ですか。彼女がどうされました？」

和やかな雰囲気もどこ吹く風、二人は真剣な面持ちで言葉のやり取りをする。

【どうやら、彼女の正体、私たちの仮説通りだったわ】

「そうですか」

アンネの言葉を聞いたコウスケは静かに目を閉じた。

【ところで、彼らは？】

「ええ、ミッションコンプリートです。今撤退をしようとしていました」

コウスケの答えに、アンネはほっとした表情を浮かべた。

【ところで、貴方にお願いがあるの】

「はい、何なりとお申し付けください。アンネお嬢様」

アンネの突然の切り出された言葉にも、まったく動じず片膝をついて答える。
それはまるで忠誠を誓う騎士のような姿であった。

【貴方が持っているのは、私が3年前にプレゼントした銃よね？】
「ええ、記念にと頂いた魔力によって魔弾（たま）を生成し、それを使って放つ銃。今でも大切に使わせていただいてます」

その銃は、先ほどコウスケが構えていた銃であった。

【その銃で、この私を撃って】
「……アンネお嬢様、今なんと？」

アンネのあまりの言葉に、コウスケは自分の耳を疑い聞き返した。

【だから、その銃で私を撃ってと言っているのよ】
「申し訳ありません。いくらアンネお嬢様と言えど、それだけは」

コウスケはアンネのお願いを断った。

【撃ちなさい、これは命令よ】
「……ッ！？」

”命令”と言う二文字の言葉に、コウスケは息をのんだ。
彼女が命令をすれば、それは絶対服従を意味しているのだ。

「一体アンネお嬢様に何が？」
【私の仮定が確信になったら、なんだか気が抜けちゃったのよ】

コウスケの問いかけに、アンネは気の抜けた声で答えた。
そのアンネの表情は、どこか吹っ切れたような様子だった。

「そうですか……」

コウスケは前々から、彼女が何時しか自らその命を絶つのではないかと不安に思っていた。
それが今、違った形で現実のものとなろうとしているのだ。
だからこそ、止めようとはしなかった。

「分かりました。アンネお嬢様の命、確かに聞き入れました」

もし止めれば、彼女は自らでその命を絶つと言うことが分かっていたから。
それだったらいっその事自らの手で送り出そう。
それがコウスケの心情だった。

【今私は監査部にいるわ。あなたのいる場所からなら十分に狙えるはずよ。貴方にも準備がいるでしょうから5分経ったらまた連絡するわ。それまで準備をしていてね】

アンネはそれだけ言うと、通信を切ってしまった。

「勝手なお方だ、お嬢様は」

コウスケは小さくそう呟いた。

★　★　★　★　★　★

コウスケとアンネの出会いは彼女が少女の時にさかのぼる。
その当時は父親が生きており、幸せな家庭だった時だ。
そんなある日、父親が連れてきた一人の少年。
それがコウスケであった。
父親がふざけて言った『君は今日からアンネの執事だ』と言う言葉から、コウスケとアンネの主従関係は始まりを告げた。
そして、父親が自ら命を絶つ数日前に、父親はコウスケに『アンネの支えになってほしい』と告げたのだ。
父親が自ら命を絶ち、母親までもを失くした彼女を陰から見守り続けた。
そして時は流れ、アンネはコウスケと再会を遂げた。
それからもちょくちょくと、主従関係として色々なお願いをし続けたアンネは、いつの日にかぽったりとそれをしなくなった。
そのきっかけは、コウスケにもわからなかった。
だが、時期を考えるとちょうどそのころにしていた調べ物が原因ではないかとコウスケは推測していた。
その調べ物は、忘れられし都、アルハザードにまつわる、ある伝説だった。

コウスケの回想を遮るように、連絡を告げるアラームが鳴る。

【コウスケ、準備は出来たかしら？】
「ええ。アンネお嬢様の門出にふさわしい魔弾（たま）を込めさせていただきました」
モニターからの問いかけに、コウスケはいつものように静かに答える。
【あら、どんな魔弾（たま）かしら？】
「ええ、名前は”Ｗｅｌｔ　ｄｅｒ　Ｅｎｇｅｌ”。直訳すると、天使の世界と言う魔弾（たま）です」
アンネの楽しげな表情での問いかけに、コウスケは静かにその名前を告げた。
【ふふ、私には天使なんて言葉、似合わないわ】
「いいえ、アンネお嬢様こそこの言葉にふさわしいと私は自負しております」
天使と言う名前に吹き出したアンネに、コウスケは反論した。
それも、突然パタリと止んだ。
「部隊の方は大丈夫なのですか？　さぞかし悲しまれるでしょう」
【それは大丈夫よ、私の後任なら、ナオヤ・イグニス准海尉に決めているわ】
コウスケの問いかけに、アンネはいつものように答えた。
「ナオヤ・イグニス……彼ですか。まだまだ子供な所もあるでしょうが、後任としては適任でしょう。まあ、アンネお嬢様には遠く

及びませんが」
【相変わらず辛口ね】
「私は真実を言っているまでです」
アンネの苦笑い交じりの言葉に、コウスケは表情を崩さずに答えた。
【皆をお願いね】
「それは、命令ですか？」
【ええ、命令よ】
アンネの答えに、コウスケは目を閉じてそうですかと答えた。
【コウスケ、そろそろ……】
「ええ。良い旅を」
【ふふ、ありがとう、コウスケ。お疲れ様】
アンネはそれだけを告げ、通信を切った。
「……本当に、勝手なお方だ」
コウスケはそう呟いて、照準を管理局本局の、内部監査部がある部屋内にある椅子に座っているアンネの胸に合わす。
「さようなら、お嬢様」
そしてコウスケは指を引き金に置いた。
★　★　★　★　★　★

同時刻、内部監査部。
そこにはアンネの姿があった。
「ふぅ……」
アンネは一息つき、その時を待つ。
「あれは残しておいたから、大丈夫よね」
確認するようにアンネはつぶやいた。
そんな時、耳をつんざくような音が彼女の耳に聞こえる。
「……そろそろね」
それの意味しているものがなんなのかが分かっていたアンネは、目を閉じてそれまでの事を思い返した。
父親と過ごした楽しい日々、父親をうそつき呼ばわりされた時の苦しい日々。
時たまコウスケを玩具にしたこともあった。
「ふふ……」
アンネは再び笑った。
そして、その時は訪れた。
風を切るような音と共に、彼女は机に突っ伏した。
★★★★★★

時間は戻り、ナオヤたちがアンネの死体を見つけたころになる

「……あの人だ。あの人が、アンネさんを！！」

「あ、ミル！！」

憎悪に満ちた声を上げ、ミルは突然内部監査部を駆けだしていった。それを誰も止めることはできなかった。

「……どうした」

「……これ」

ナオヤに、ショックが抜けないアニーが一枚の封筒を差し出した。それは、ミルが駆けだした拍子に彼女も目の前に落ちてきたものだった。

そして封筒を目にやると、そこにはアンネの文字で『皆さんへ』と書かれていた。

「ッ！？」

「おい、その封筒がどうしたんだ？」

カリスの問いかけに答えることもなく、ナオヤは慌てた様子で封筒の中から一枚の紙を取り出す。

「これ、部隊長が書いた手紙！」

「なに！？　ちょっと貸せ！！」

ナオヤの言葉にカリスは慌ててナオヤの手から紙をひったくると、それに目を通した。

「何だよ、これ」
カリスが地面に力なく座り込みながら呟く。
その紙には事の真相がすべて書き記されていた。

★★★★★

『マスター、撤退しなくてもいいのですか？』
「ああ、ここにいなければいけないんだ」

コウスケは静かに呟いた。
そして、取り出したのは一冊の本。
その本には忘れられし都、アルハザードについての伝説が書き記されていた。
元々は無限書庫にあったものを、彼は無断で拝借していたのだ。
その本を開きながら、コウスケはあるページを開く。
そこに記されていた伝説は次の通りだった。

『アルハザードがあった時代、ある少女がいた。その少女はアルハザードの統括する一家であった。
そんなある日、少女はアルハザードに反旗を翻し滅ぼそうとする。
アルハザードにいた魔導師も応戦したが、少女に勝ることは出来ずに全員が敗れアルハザードは滅びた。
その少女の名前は――――――』

コウスケがそこまで読み進めていた時だった。

「ッ！？」

コウスケは慌ててその場を離れる。
次の瞬間、コウスケがいた場所の地面は、深くえぐれていた。

「来たか」

コウスケは静かに呟いた。

「貴方が、貴方がアンネさんを殺したのね！」
「否定はしない」

憎悪を含んだ言葉に、コウスケは動じることもなくそう告げた。

「その姿をしている様子だと、全てを思い出した……いや、力が戻ったと言うべきか」

目の前に立っている人物にそう声をかける。
その女性は短めの赤い髪に紅い目をしていた。
服装な青と黒の二色の巫女服のようなものだった。

「許さない、私はあなたを、絶対に許さない！！！」

女性は、その手にバイオリンを構えながら叫ぶ。

「許されなくて結構だ。僕は誰の許しも乞う気はないからな」

コウスケは女性に、冷たい口調で答えた。

「もういい。アンネさんを殺した罰、受けてもらうわ！！」

「ふッ、来るがいい、ミルドレッド・マイアルよ」

コウスケはそう答えその女性の名を口にする

「ッと、これは偽りの名だな。訂正しよう。来るがいい、ミルドレッド・”アルザード”よ」

そして、二人は一気に駆け出した。

第二十一話　死の真実（後書き）

前回よりもさらに鬱度が増してしまった気が……
お次は、回覧板さんです。
宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1585t/

魔法少女リリカルなのはStS　内部監査部の日常

2011年12月7日00時58分発行